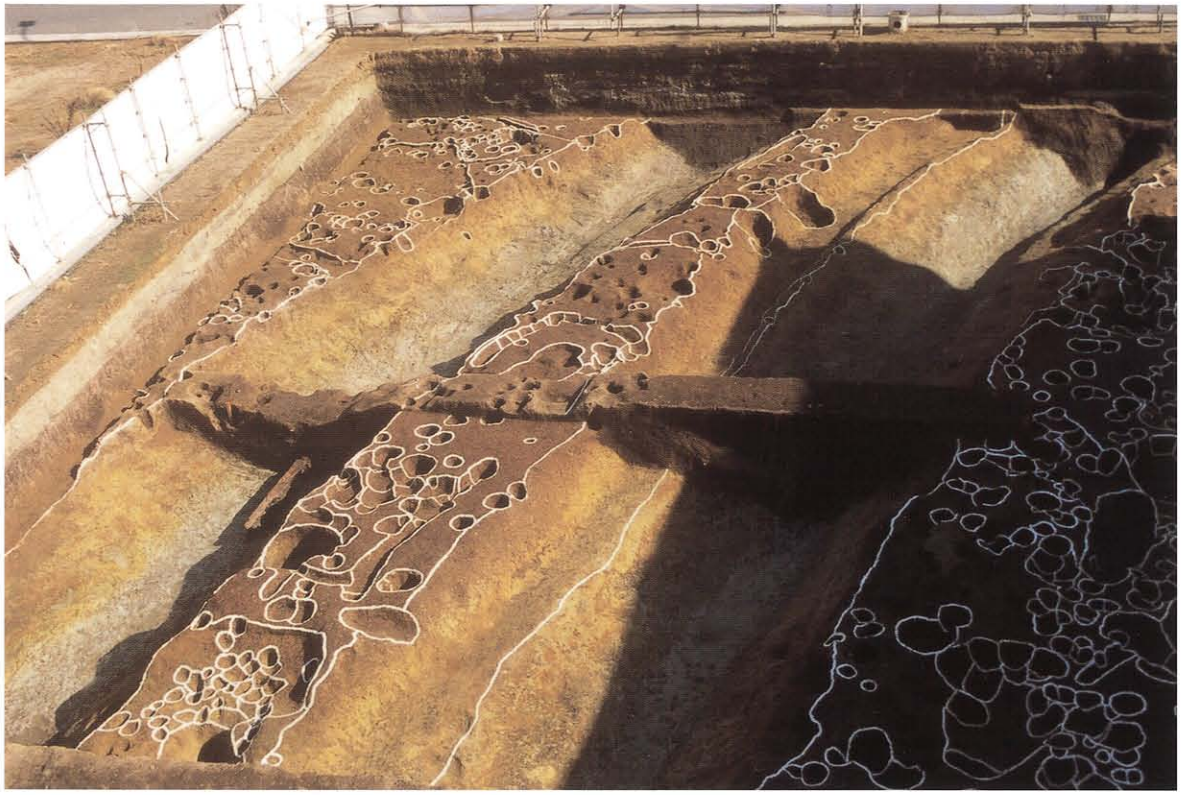
大阪府茨木市

# 平成16年度発掘調査概報

平成17年3月

茨木市教育委員会

巻頭図版Ⅰ



東奈良遺跡　第３面　調査区全景（西から）

東奈良遺跡　第３面　SD-601・SD-502B　土層断面（西から）

本文１Ｐ～

巻頭図版Ⅱ

西部南側西区　石室検出状況（南東から）

第１西部南側西区　石室周辺埴輪列南群（南西から）

耳原遺跡　本文40Ｐ～

# はじめに

日本の古代を考える言葉に、銅鐸文化圏と銅矛・銅戈圏というのがあり西日本の東西に分布しているのはよく知られたことであります。しかし、数年前に島根県神庭荒神谷遺跡で大量の銅剣・銅矛が、また、加茂岩倉遺跡で大量に埋められた銅鐸が出土したのはご存じのことと思います。

さらに、佐賀県の吉野ヶ里遺跡で小銅鐸や鳥栖市の安永田遺跡からは銅鐸の鋳型が発見されるなど、九州からも小ぶりとはいえ銅鐸の姿が見られ、上記の文化圏の色分けや時代の後先・伝搬の由来については、必ずしも明らかでありません。

わたしたちのまち茨木市も、東奈良遺跡から出土した銅鐸の鋳型や小銅鐸が発見されるなど銅鐸文化圏に属していたと考えられます。また、その鋳型と同笵の銅鐸が豊岡市気比３号銅鐸、豊中市原田神社銅鐸、香川県善通寺市我拝師山銅鐸で見られるのも興味のあるところであります。

その他全国の銅鐸にも一部「兄弟」関係があることも判明しており、この時代を画する出来事の一つと考えられますが、なぜかその後銅鐸については一切歴史の記述からは姿を消してしまいます。

これらの地中の遺物が出土されたのは、開発事業に伴う発掘調査によるものであることはいうまでもありません。古代の歴史を考えるうえでこれらの貴重な遺物を残し継承していくことは、大切なことと考えています。

この冊子は、平成16年度に行った発掘調査についてその概略について述べたものです。

調査にあたって、惜しみのないご協力をいただきましたご関係の皆様に深く感謝するとともに、今後とも本市の埋蔵文化財の保存・保護により一層の温いご理解とお力添えを賜りますようお願い申しあげます。

平成17年３月31日

茨木市教育委員会
教育長　　大　橋　忠　雄

# 目　　次

はじめに

例　　言

茨木市内遺跡分布図

平成16年度埋蔵文化財発掘調査一覧表

1．東奈良遺跡（東奈良三丁目125・126）……1

2．東奈良遺跡（東奈良三丁目114・115）……23

3．東奈良遺跡（東奈良三丁目127）……27

4．耳 原 遺 跡（耳原三丁目地内）……40

5．牟礼東遺跡（寺田町21他）……51

6．東奈良遺跡（天王二丁目211-1）……54

7．総持寺遺跡（三島丘一丁目261-1他）……57

8．耳 原 遺 跡（耳原三丁目地内）……71

9．東奈良遺跡（東奈良三丁目111）……74

10．宿久庄遺跡（藤の里二丁目455-2他）……81

11．春 日 遺 跡（春日三丁目120）……83

# 例　　言

1．この概報は、茨木市教育委員会が平成16年度に実施した発掘調査事業報告です。
2．本書に使用した地図は「茨木市地域計画図－1／2,500」です。

## 平成16年度 埋蔵文化財発掘調査の概要

### 1．平成16年度発掘調査

茨木市における平成16年度の発掘件数は11件で、埋蔵文化財確認試掘･立会調査件数は229件ありました。発掘調査原因の事業別件数は、民間事業10件、公共事業１件です。公共事業は、コミュニティセンターの建設で、民間事業では共同住宅建設工事や宅地造成工事などでした。

発掘調査件数は前年とほぼ同数で、確認試掘・立会調査件数もほぼ同数です。社員寮の売却や民間工場研究所などの民間企業の土地の売却が進み、交通の利便性や公共施設の充実等からか大規模な共同住宅の開発が顕著にみられ、北部丘陵の彩都も入居が始まっています。

### 2．平成16年度発掘調査における主要な調査の概要

平成16年度において茨木市教育委員会が実施した発掘調査のなかで、注目される調査は東奈良遺跡の調査があげられます。

東奈良遺跡は、昭和48年から翌年にかけて銅鐸を鋳造していた鋳型やふいごの羽口等が出土し、平成11年には東奈良土地区画整理事業に伴い、都市計画道路と区画道路部分の発掘調査により舌のついた朝鮮半島系とみられる小銅鐸が溝底から出土しました。この調査は平成12年までの長期に渡って実施され、報告書「東奈良－東奈良土地区画整理事業に伴う発掘調査概要報告－」が刊行されました。

平成14年から道路以外の換地に民間の開発がはじまり、共同住宅や保育所・老人福祉施設などが計画され、平成16年も共同住宅建設工事に伴う発掘調査が実施されました。
この概報にその一端を記載していますが、今後の調査も見込まれ、この東奈良遺跡の環濠集落としての全体像が明らかにされるものと考えられます。

耳原遺跡の調査では、丘陵地の西端部分で横穴式石室が新たに発見されました。小規模ではありますが側壁石が石室内に落ち込んでいて天井石はなくなっています。

石室内から金製冠やガラス小玉等が検出され、耳原西古墳と名付け、耳原古墳・鼻摺古墳と東西に並ぶ古墳群の様相が判明しました。

## 用語等

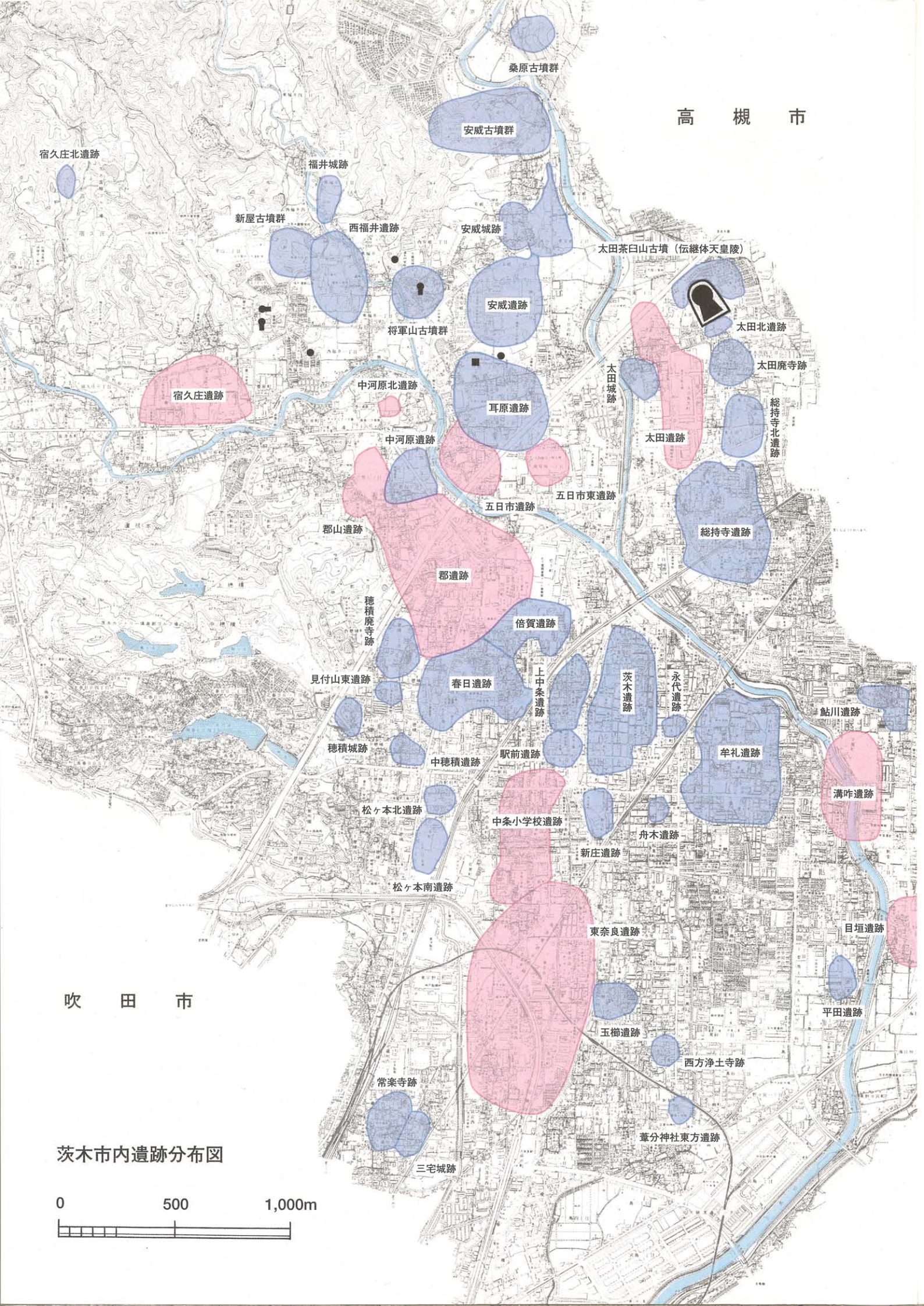
ＳＢ：建物跡・掘立柱建物跡　ＳＥ：井戸　ＳＸ：落込み・不定形土坑
ＳＣ：柱列群　ＳＫ：土坑　ＳＤ：溝・雨落溝
ＳＲ：流路

**畿内第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ様式**：畿内から出土する弥生土器を基準とした土器区分で、機種構成やプロポーション（土器の形態）で、おおよそ５つに分けられⅠ様式が弥生時代前期、Ⅱ～Ⅳ様式が弥生時代中期、Ⅴ様式が弥生時代後期の年代観が与えられている。

**庄内式併行期**：豊中市庄内遺跡から出土した土器を基準とした時代区分で、おおよそ弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にあたる。

## 図版目次


第１図　東奈良遺跡環濠概略図
第２図　〃　第２遺構面平面図
第３図　〃　３　〃
第４図　〃　調査区断面図
第５図　〃　ＳＤ502等断面図
第６図　〃　ＳＤ515等断面図
第７図　〃　出土遺物（１）
第８図　〃　〃　（２）
第９図　〃　〃　（３）
第10図　〃　〃　（４）
第11図　〃　〃　（５）
第12図　〃　〃　（６）
第13図　〃　〃　（７）
第14図　〃　〃　（８）
第15図　〃　遺物観察表（１）
第16図　〃　〃　（２）
第17図　〃　第２・３遺構面全景
第18図　〃　遺構面・断面等
第19図　東奈良遺跡南壁断面土層図
第20図　〃　最終面平面図
隣接調査地平面図
第21図　〃　遺構面検出状況
第22図　東奈良遺跡調査区配置図
第23図　〃　第Ⅰ調査区第Ⅰ遺構面
第24図　〃　〃　Ⅱ
第25図　〃　〃　Ⅲ
第26図　〃　第Ⅱ調査区第Ⅰ遺構面
第27図　〃　〃　Ⅱ
第28図　〃　〃　Ⅲ
第29図　〃　第Ⅲ調査区第Ⅰ遺構面
第30図　東奈良遺跡第Ⅲ調査区第Ⅱ遺構面
第31図　〃　〃　Ⅲ
第32図　〃　第Ⅰ調査区第Ⅰ遺構面
第33図　〃　〃　南から
第34図　〃　〃　Ⅱ
第35図　〃　〃　南から
第36図　〃　〃　Ⅲ
第37図　東奈良遺跡第Ⅰ調査区
第Ⅲ遺構面
第38図　〃　Ⅱ　Ⅰ
第39図　〃　Ⅱ　Ⅱ
第40図　〃　Ⅱ　Ⅲ
第41図　〃　Ⅲ　Ⅰ
第42図　〃　Ⅲ　Ⅱ
第43図　〃　Ⅲ　Ⅲ
第44図　耳原西古墳周辺遺跡分布図
第45図　耳原遺跡第１調査区地形測量図
第46図　〃　第１・２調査区遺構平面図
第47図　耳原西古墳範囲図
第48図　〃　石室実測図
第49図　〃　出土円筒埴輪
第50図　〃　石室玄室内出土
ガラス小玉・金製冠
第51図　牟礼東遺跡遺構図
第52図　〃　南から
第53図　〃　北から
第54図　東奈良遺跡遺構平面図
第55図　〃　遺構検出状況
第56図　総持寺遺跡周辺調査全体図
第57図　〃　北地区全体図
第58図　〃　南地区全体図
第59図　〃　出土遺物
第60図　〃　調査区全景
第61図　〃　調査区全景
第62図　耳原遺跡平面図
第63図　〃　遺構面検出状況
第64図　東奈良遺跡遺構図
第65図　〃　第１次調査第３遺構面
第66図　〃　２　中央区
第67図　〃　２
第68図　〃　２方形周溝墓　溝－Ⅳ
第69図　宿久庄遺跡遺構図
第70図　春日遺跡調査区配置図
第71図　〃　遺構面検出状況


高槻市
吹田市
桑原古墳群
安威古墳群
宿久庄北遺跡
福井城跡
新屋古墳群
西福井遺跡
安威城跡
太田茶臼山古墳（伝継体天皇陵）
安威遺跡
将軍山古墳群
太田北遺跡
太田廃寺跡
宿久庄遺跡
中河原北遺跡
太田城跡
耳原遺跡
総持寺北遺跡
太田遺跡
中河原遺跡
五日市東遺跡
五日市遺跡
総持寺遺跡
郡山遺跡
郡遺跡
穂積廃寺跡
倍賀遺跡
上中条遺跡
茨木遺跡
永代遺跡
見付山東遺跡
春日遺跡
鮎川遺跡
穂積城跡
中穂積遺跡
駅前遺跡
牟礼遺跡
溝咋遺跡
松ヶ本北遺跡
中条小学校遺跡
舟木遺跡
新庄遺跡
松ヶ本南遺跡
東奈良遺跡
目垣遺跡
平田遺跡
玉櫛遺跡
西方浄土寺跡
常楽寺跡
葦分神社東方遺跡
三宅城跡
0
500
1,000m

茨木市内遺跡分布図

# 平成16年度　埋蔵文化財発掘調査 一覧表

| No. | 遺　跡　名 | 調査位置 | 調査期間 | 調査面積 | 調　査　内　容 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 東奈良遺跡 | 東奈良三丁目<br>125・126 | 15.11.12～16.1.29 | 496㎡ | 弥生時代　古墳時代<br>奈良時代　中世　近世<br>石器　弥生土器<br>土師器　須恵器<br>陶磁器　金属器　木器 獣骨 | 共同住宅建設 |
| 2 | 東奈良遺跡 | 東奈良三丁目<br>114・115 | 16.3.23～16.6.9 | 532㎡ | 弥生時代　古墳時代　弥生前期還壕　弥生前期～中期、古墳時代前期初頭の溝<br>土坑　落込み　ピット多数<br>弥生土器　土師器　木製品<br>動物遺体　石製品等 | 共同住宅建設 |
| 3 | 東奈良遺跡 | 東奈良三丁目<br>127 | 16.3.24～16.6.1 | 549㎡ | 弥生時代　古墳時代<br>溝　柱穴<br>弥生土器　土師器<br>須恵器 | 共同住宅建設 |
| 4 | 耳原遺跡 | 耳原三丁目地内 | 16.6.4～16.10.12 | 7,517㎡ | 古墳時代　飛鳥時代<br>円墳（後期古墳）<br>方墳？　溝　柱穴　土坑<br>円筒埴輪　ガラス小玉 | 宅地造成 |
| 5 | 牟礼東遺跡 | 寺田町21他 | 16.5.21～16.5.27 | 106㎡ | 中世<br>溝　柱穴<br>土師器　瓦器 | 共同住宅建設 |
| 6 | 東奈良遺跡 | 天王二丁目<br>211-1 | 16.5.24～16.6.2 | 65㎡ | 弥生時代　中世<br>水田遺構？牛足跡<br>ガラス玉 | 共同住宅建設 |
| 7 | 総持寺遺跡 | 三島丘一丁目<br>261-1他 | 16.5.24～16.6.11 | 1,862㎡ | 古墳時代　飛鳥時代<br>奈良時代　平安時代<br>中世　古墳時代の竪穴住居跡６棟　飛鳥～奈良時代の建物跡<br>中世の建物跡　柱列　墓坑<br>土師器　須恵器　陶磁器 | 宅地造成 |
| 8 | 耳原遺跡 | 耳原三丁目地内 | 16.7.21～16.8.24 | 525㎡ | 中世<br>土取痕　土坑　ピット<br>溝　風倒木<br>土師器　須恵器<br>陶磁器 | 給排水施設移設 |
| 9 | 東奈良遺跡 | 東奈良三丁目<br>111 | 16.6.4～16.8.20 | 532㎡ | 弥生時代　古墳時代<br>土坑　溝<br>柱穴<br>弥生土器　土師器　須恵器 | 共同住宅建設 |
| 10 | 宿久庄遺跡 | 藤の里二丁目<br>455-2他 | 16.8.23～16.11.29 | 502㎡ | 中世<br>弥生土器　土師器 | コミュニティセンター建設 |
| 11 | 春日遺跡 | 春日三丁目120 | 16.11.8～16.12.8 | 396㎡ | 弥生時代　古墳時代<br>中世<br>自然流路　溝<br>弥生土器　土師器<br>須恵器 | 共同住宅建設 |
| 12 | 春日遺跡 | 春日一丁目<br>85-1他 | 17.3.2～17.3.15 | 119㎡ | 古墳時代、飛鳥・奈良時代<br>平安時代、中世<br>土坑、溝、柱穴、耕作溝<br>石器、土師器、須恵器<br>陶磁器 | 共同住宅建設 |

No.12についての報告は後日とします。

# 東奈良遺跡

位置図

**所 在 地**　茨木市東奈良三丁目125・126

**調査原因**　共同住宅建設事業

**調査期間**　平成15年11月12日～平成16年１月29日

**調査面積**　496㎡

**調査担当**　黒須　靖之

**調査結果**

東奈良遺跡は茨木市南部の標高６～８ｍの沖積平野上に位置し、地形的に北西から南東方向に向かって緩やかな傾きを持っている。南北約1.2㎞、東西約１㎞の遺跡範囲で弥生前期の拠点的集落として周知されている。近年、東奈良土地区画整理事業に伴う区画道路部分の発掘調査が実施されてから、この区画内の換地部分の調査が増加しており、今回の調査も換地区画内に共同住宅を建築するため事前に発掘調査を実施したものである。

今回の調査では主に古代～中世を主体とする面、弥生時代前期後半から古墳時代前期を主体とする面及び弥生時代前期を主体とする地山面の３面で遺構検出および精査を行った。

**検出遺構**

今回検出された主な遺構は以下のとおりである。古代～中世面では井戸や溝、土坑が検出された。調査区北及び西側では中世の南北方向の溝および条里制に伴うと思われる鋤溝を多数検出した。これらの耕作溝はＮ４°Ｅでやや東にふれるが、ほぼ東西南北を基調とし条里制区画を意識していることが窺える。次に弥生時代前期後半～古墳時代前期を主体とした面では、弥生時代後期～古墳時代初頭（庄内併行期）の円形周溝（ＳＤ522）・弥生時代中期の環壕（ＳＤ502）、井戸３基、土坑53基、溝約20条、柱穴約2,300口を精査している。また、弥生時代前期を主体とする地山面でも環壕２条（ＳＤ502-Ｂ・ＳＤ515-Ｂ）、井戸２基、土坑７基、溝約10条、柱穴約800口を精査している。

**基本層序**

調査区の基本層序は検出面のⅠ層からⅥ層まで大別される。Ｌ層が表土で0.5～0.85ｍの現代の盛土及び耕作土である。Ⅰ層は灰黄褐色シルト質埴土を含み、層厚0.05～0.15ｍを測り古代～中世の遺物包含層である。Ⅰ層上面では古代～中世（第１面）の遺構検出を行っている。Ⅱ層は黒褐色土ににぶい黄褐色シルトや褐灰色粘土ブロックを含み、層厚0.05～0.3ｍを測る。弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層である。Ⅲ層は黒褐色土に暗褐色シルトと黄褐色粘土ブロックを含み、層厚0.15～0.25ｍを測り弥生時代中期の遺物包含層である。Ⅳ層は黒褐色土に黄橙色粘土を層状に含み、層厚0.05～0.15ｍを測り弥生時代前期後半～中期初頭の構築土（地業）である。こ

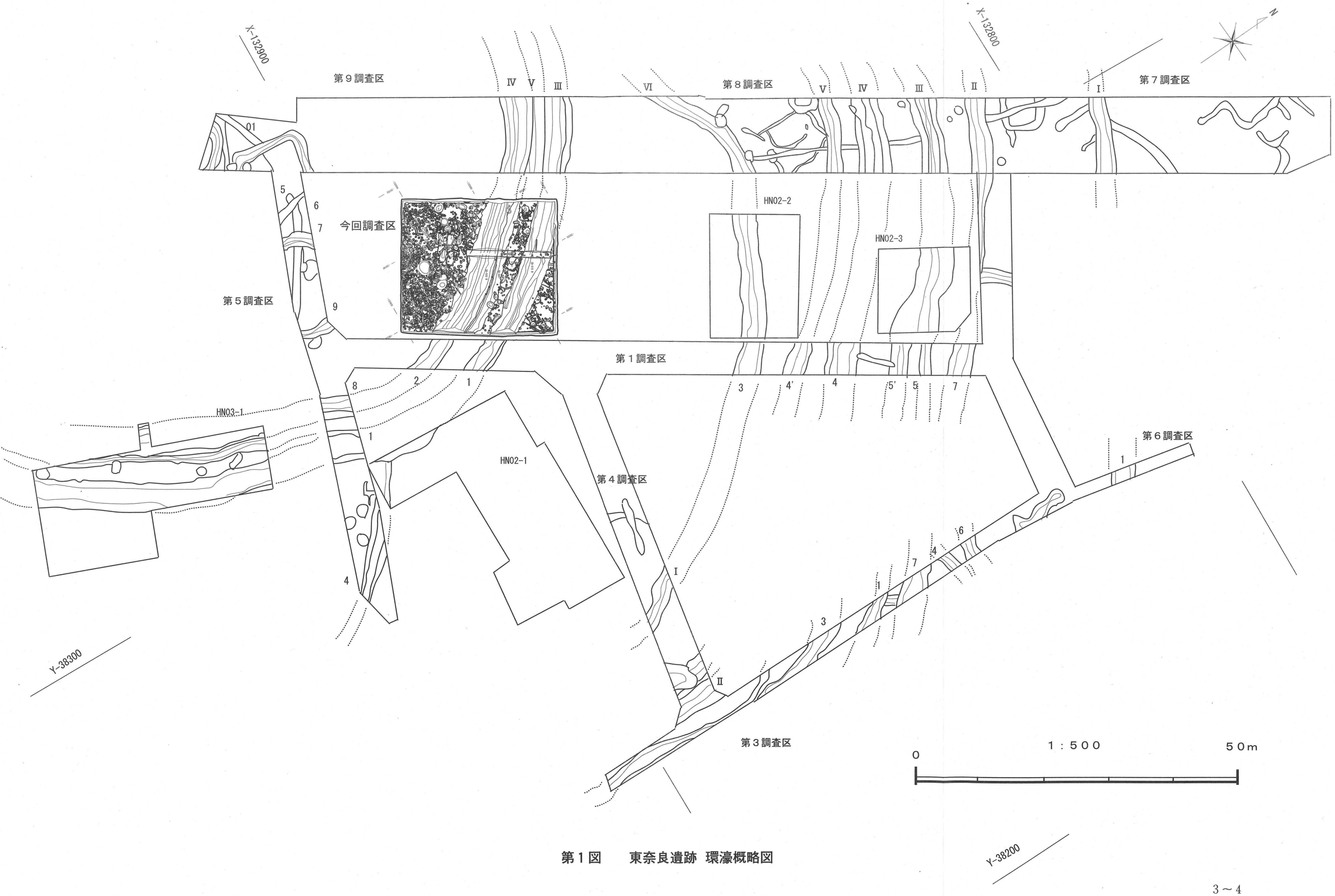
のⅣ層上面で弥生時代前期後半～古墳時代（第２面）の遺構検出を行っている。Ⅴ層はにぶい黄褐色粘土に明黄褐色粘土を含み、層厚0.1～0.2ｍを測り弥生時代前期の遺物包含層である。Ⅵ層は明黄褐色粘土の地山でⅥ層上面で弥生時代前期（第３面）の遺構検出を行っている。最終面の検出面の標高はおよそＴ.Ｐ.7ｍ前後である。ＳＤ522はⅡ層下面、ＳＤ502･515はⅢ層下面、ＳＤ601はⅤ層下面から掘り込まれている。

**出土遺物**

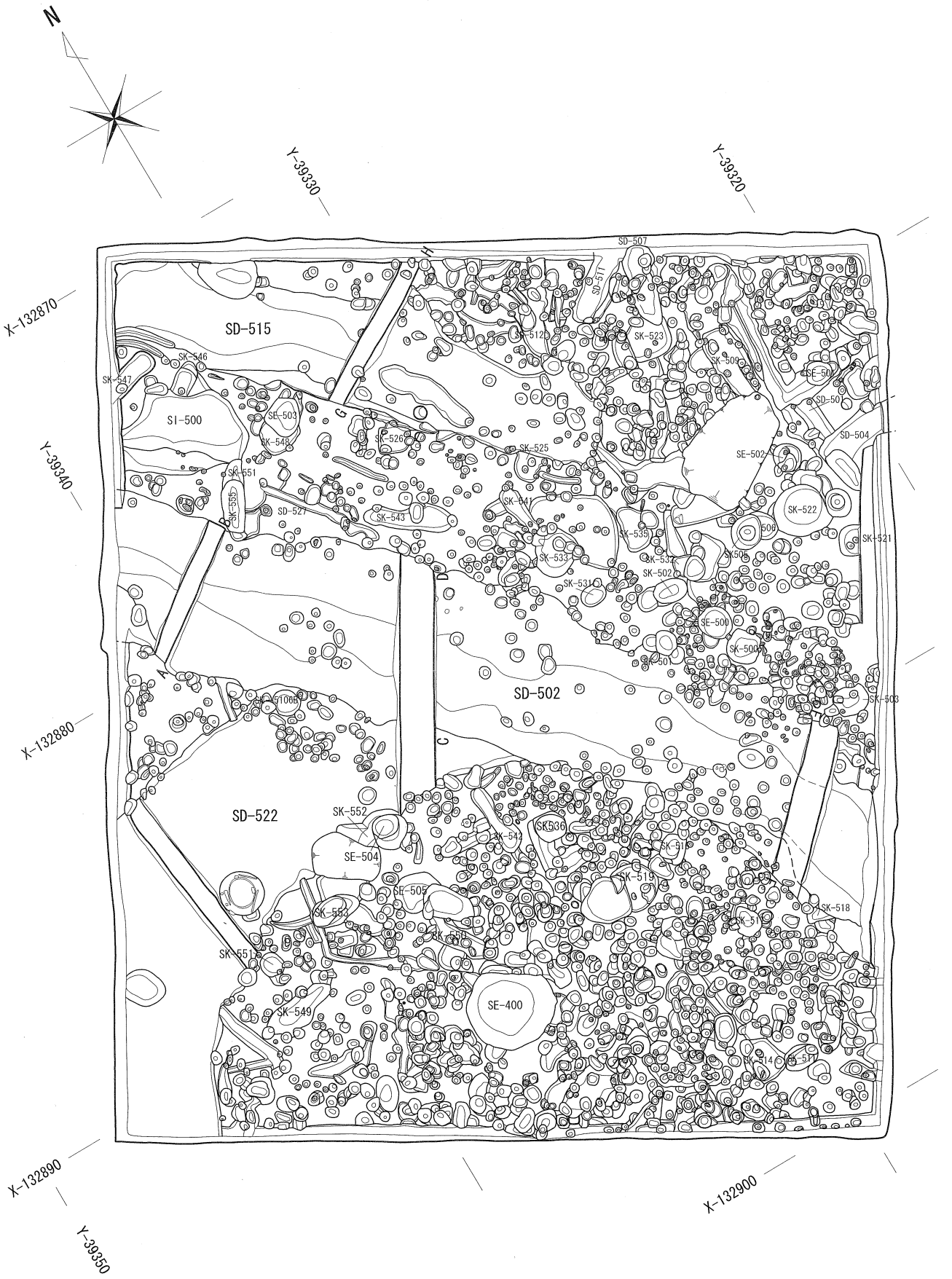
出土した遺物は遺物収納コンテナに換算して約675箱に及び、その種類と内訳は蓋・壺・甕・鉢、高坏・器台・水差し・ミニチュアなどの弥生土器や土製品、石鏃や石槍・石包丁・削器・磨製石斧・砥石・敲石・石皿などの石器類、獣骨を中心とした骨類、板材の木器、古墳時代～古代の土師器や須恵器、中世の土師皿や黒色土器椀、陶磁器類がある。これら多量の遺物のうち、実測可能なものは数百点を数えるが、今回の概報においては弥生時代前期の環壕と考えられるＳＤ502Ｂ・515ＢやＳＤ502Ｂに切られるＳＤ601の土器群を中心に掲載した。出土した遺物量は合計5,500.2kgであった。その内、土器量は5,153.3kg、石器307.5kg、木器16.2kg、骨23.2kgを計る。土器量は㎡当たり10.39kg/㎡であった。周辺調査区(第１図)では02－１が土器量1,893kg、石器80.4kg、木器20.2kg、骨4.6kg、土器は ㎡ 当たり2.97kg/㎡ を計り、02－２では土器量1,398kg、石器13.6kg、土器量は㎡ 当たり4.99kg/㎡ であった。環壕ＳＤ502・515の土器量を比較すると、ＳＤ502が1,400.1kg、13.86kg/㎡、ＳＤ515が371.7kg、4.59kg/㎡ であった。出土した石器の内訳はチップ・フレーク（石器屑）11点、コア（石核）４点、スクレイパー（掻器削器）29点、ナイフ16点、石鏃８点、石錘１点、石ベラ14点、石槍８点、磨製石斧40点、石包丁52点、砥石（扁平短冊タイプ)27点、砥石44点、石皿１点、敲石４点、つぶて４点、その他19点となっており計282点を数え、砥石・石包丁・磨製石斧の多さが目立つ。掲載遺物の詳細は遺物観察表に記した。

**環壕**（第２・３図）

ＳＤ502は調査区のほぼ中央を北西－南東方向に通っており、長さは約22ｍを測る。上端3.5～4.6ｍ、下端0.4～0.7ｍ、深さは検出面から約1.3ｍで南東側がやや標高が低い。断面形は逆台形状を呈し、埋土は大きく分けて14層に大別されるが、Ａ～Ｃ層までは弥生時代中期頃の溝の堆積と考えられる。Ｈ層は黄褐色･灰白色粘土ブロックを多量に含む層でＳＤ515側にのみ見られる。ＳＤ515はＳＤ502に2.3～3.8ｍの間隔をあけ並走しており、緩いカーブを描く外側に位置する。長さは約22ｍを測り、上端3.5～4.3ｍ、下端0.4～0.6ｍ、深さは検出面から約1.05～1.3ｍで断面形はＵ字状を呈する。埋土は大きく分けて16層に大別される。特にＦ～Ｋ層は人為堆積のブロック土と見られ、整地のために地業した可能性がある。ＳＤ601はＳＤ502と515の間を並走しているが、ＳＤ502に切られており、その掘削時期は前期の中でも早い時期と考えられる。長さは約22ｍを測り、上端1.0～1.6ｍ、下端0.3～0.9ｍ、深さは検出面から約0.45～0.85ｍで断面形はＵ字状を呈する。埋土は大きく分けて４層に分かれ、Ｑ２層では焼土が層状に確認された。埋没過程でＳＤ502のＨ層やＬ層に削られるような堆積状況が窺える。



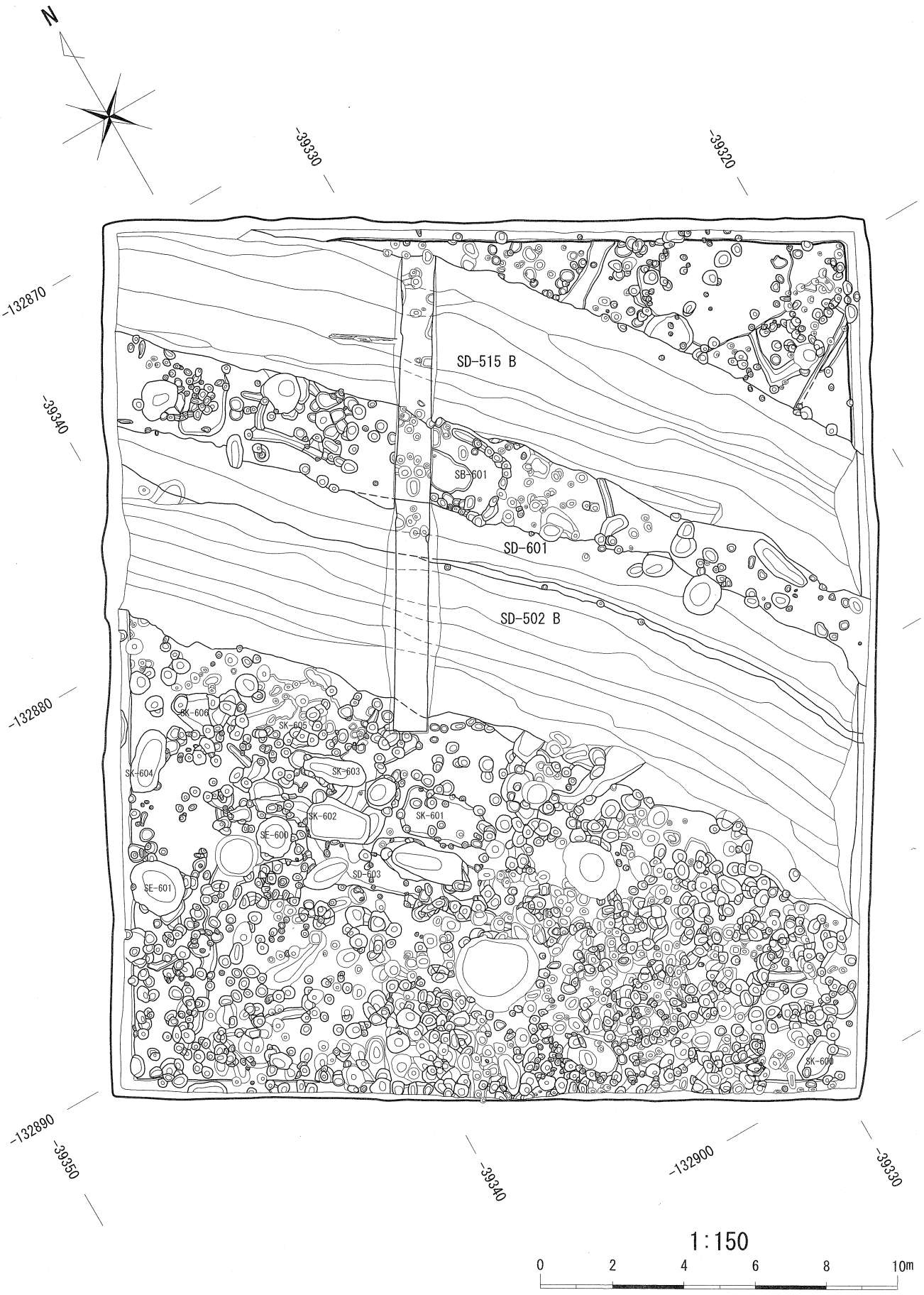

第１図　　東奈良遺跡 環濠概略図




1:150

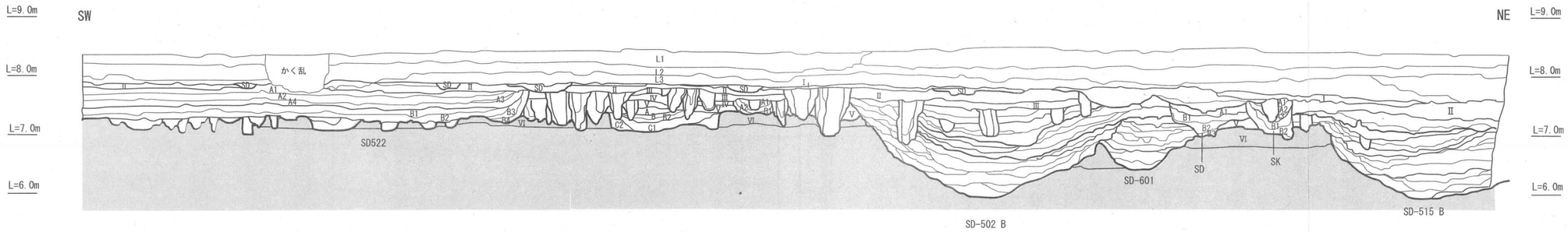
0 2 4 6 8 10m

第２図　　東奈良遺跡 第２遺構面平面図

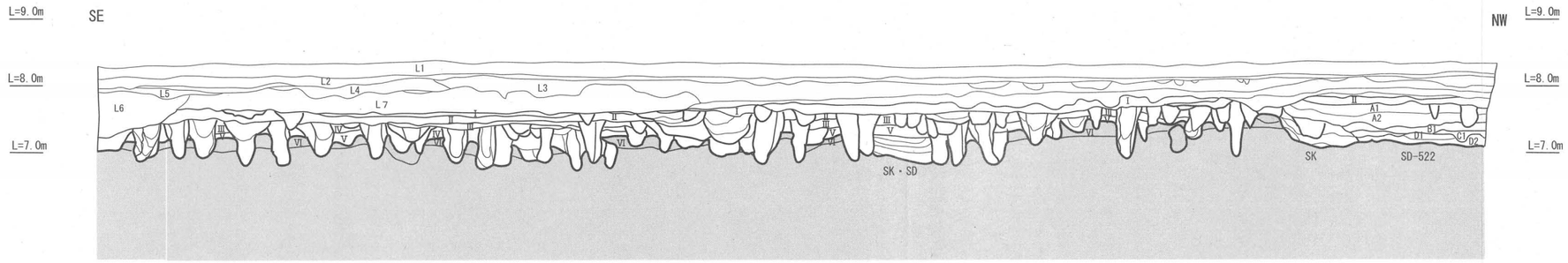



第３図　　東奈良遺跡 第３遺構面平面図

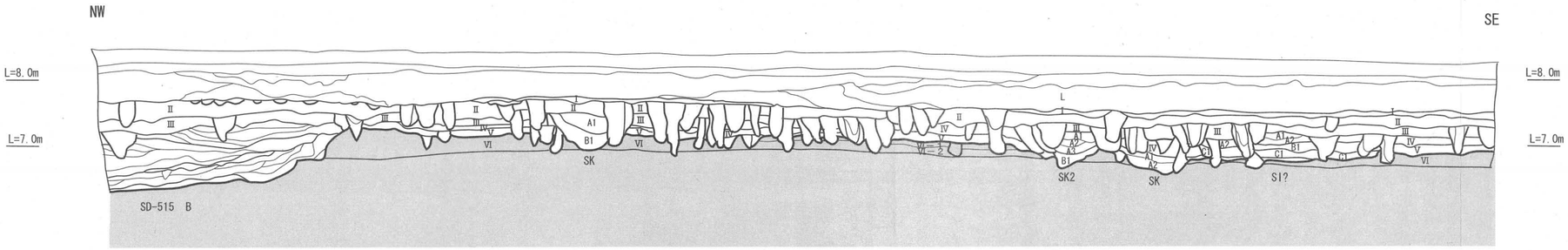
## 調査区西壁断面




## 調査区南壁断面




## 調査区東壁断面



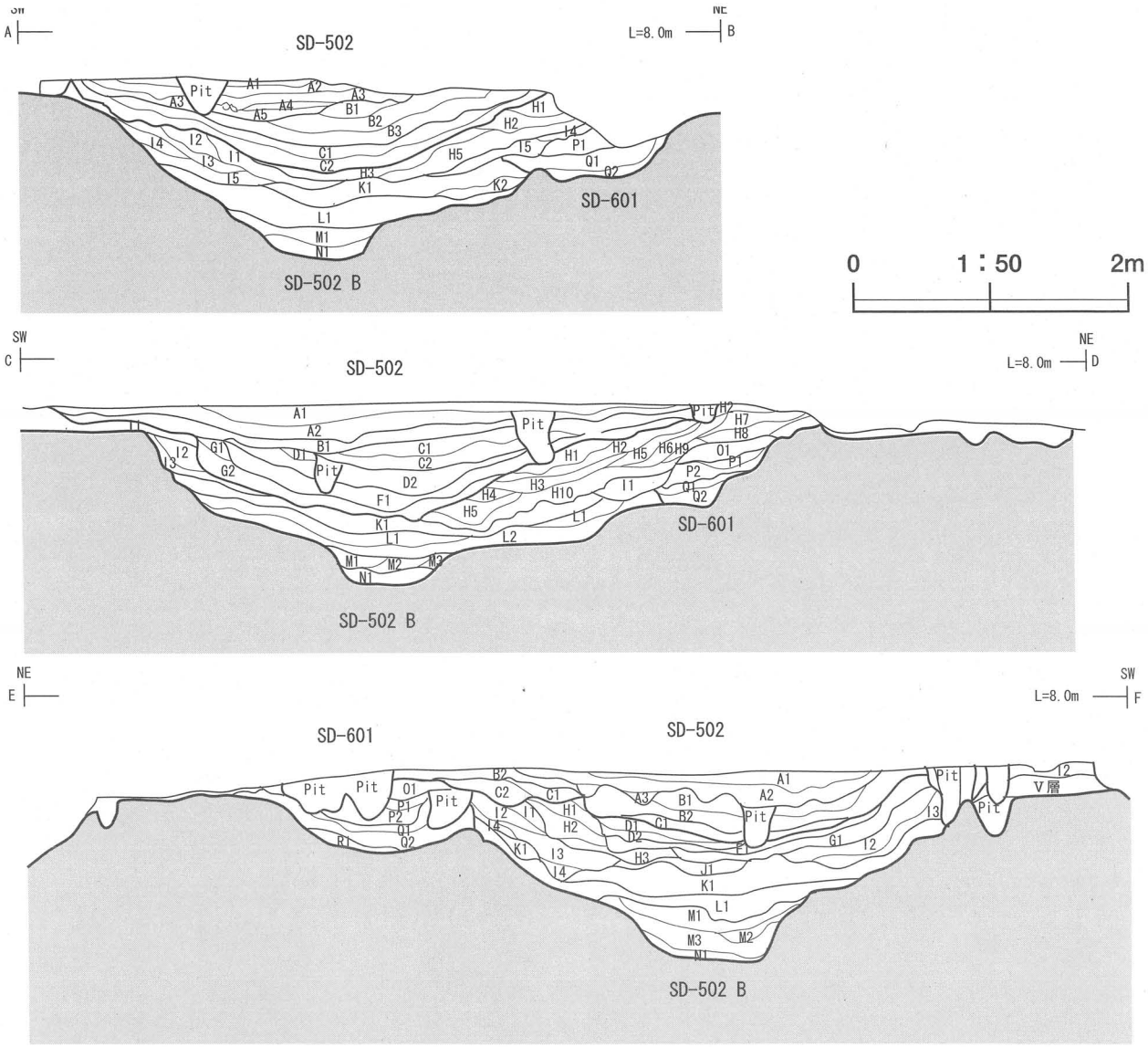

**基本層序**

Ⅰ層　：Si10YR6/2,SiC7.5YR2/3 0.3～2cm大ブロック10～15% Si10YR8/1 粉 15～20%　硬　濃密 ～0.5cm大白色レキ少～中量含，土器少量含む。
Ⅱ層　：Sicl10YR2/1,Si10YR4/3 粉 15～20% HC10YR5/1 0.5cm大ブロック 10～15% 中硬　中密　～0.5cm大白色レキ少～中量含，0.3～1cm大炭化物少量含，土器やや多く含。
Ⅲ層　：Sicl10YR2/2,Si10YR3/3 粉 30～40% HC10YR5/8 0.5～2cm大ブロック 15～20% 中硬　中密　～0.5cm大白色レキやや多く含，～0.5cm大炭化物少量含。土器やや多く含。
Ⅳ層　：Sicl10YR2/2,HC10YR8/8 1～2cm幅層状 40～50%　Si15YR6/6 粉～0.3cm大 3～5%　硬　濃密 ～0.2cm大白色レキ及び～0.3cm大炭化物少量含，土器少量含。
Ⅴ層　：HC10YR4/3,HC10YR6/6 粉～0.3cm大 10～15% 中硬　濃密　～0.1cm大白色粒及び～0.3cm大炭化物少量含。
Ⅵ層　：HC10YR6/6,6/8,HC10YR2/1 1～2cm大ブロック 10%　中硬　濃密　～0.1cm大白色粒及び～0.2cm大炭化物少量含。

古代～中世包含層　(灰黄褐色シルトに極暗褐色シルト質埴土、灰白シルト)
弥生時代後期～古墳時代遺物包含層　(黒褐色土ににぶい黄褐色シルト、褐灰色粘土ブロック)
弥生時代中期遺物包含層　(　〃　に暗褐色シルト、黄褐色粘土ブロック)
弥生時代前期～中期初頭構築土（地業）　(　〃　に黄褐色粘土層状)
弥生時代前期遺物包含層（地山漸移層）　(にぶい黄褐色粘土に明黄褐色粘土)
地山　(明黄褐色粘土に黒色粘土ブロック)

0　1：80　4m

**第４図　　東奈良遺跡 調査区 断面図**




**SD502（中期）**

A1:Sicl10YR2/2,Sil10YR5/3 粉 15～20% 中硬　中疎　～0.2cm大白色レキ及び0.5cm大炭化物少量含，土器多量に含。
A2:Sicl10YR2/2,Sil10YR5/3 粉 10% 中軟　中密　～0.2cm大白色レキ及び0.5cm大炭化物および土器やや多く含。
A3:Sicl10YR2/2,Sil10YR6/6 粒～0.5cm大 20～25% 軟　中疎　～0.2cm大白色レキやや多く含，0.5cm大炭化物及び土器少量含。
B1:Sicl10YR4/2,Sil10YR5/6 粒 20% 中軟　中密　～0.3cm大白色レキ及び0.5～1cm大炭化物および土器やや多く含。
B2:Sicl10YR4/2,Sil10YR5/6 粒～1cm大ブロック 40% 中軟　中密　～0.3cm大白色レキ少量含，1～2cm大炭化物および土器やや多く含，HC10YR6/1 1～5cm大ブロック 5～10%含。
C1:Sicl10YR2/1,HC10YR7/2 1cm大ブロック 10～15%　軟　中密　～0.2cm大白色レキ及び土器少量含，0.5cm厚の層状に炭化物多量に堆積。
C2:Sicl10YR2/1,HC2.5Y8/8 0.5～2cm大ブロック 30～40% 中硬　中密　～0.5cm大白色レキ及び0.5cm大炭化物および土器やや多く含。

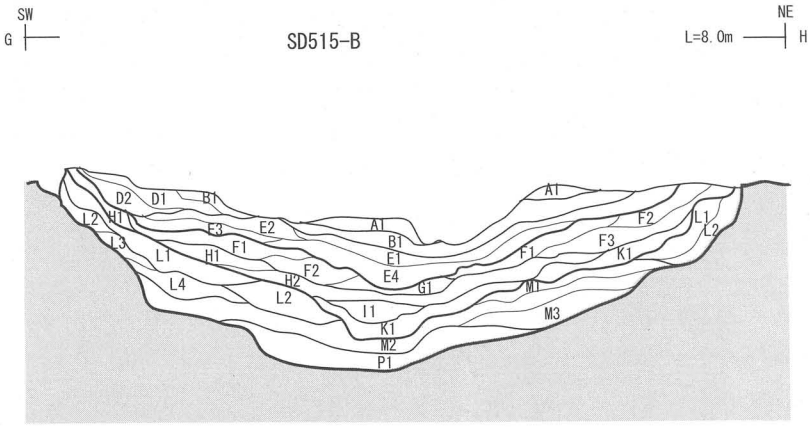
**SD502-B（前期）**

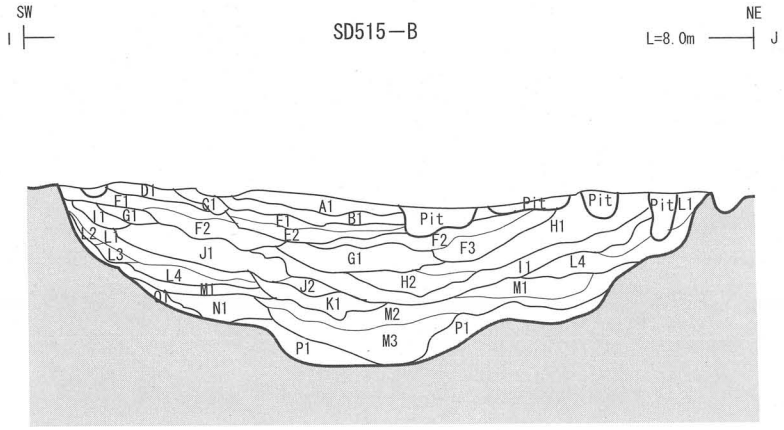
D1:HC10YR7/2,Sic5Y6/6 粒 15%　中軟　濃密　～0.1cm大白色レキ微量に含，～0.3cm大炭化物及び土器少量含，Sicl10YR2/1 1～3cm大ブロック 15%含。
D2:HC10YR7/2,Sic5Y6/6 粒 30～40%　軟　中密　～0.1cm大白色レキ微量に含，～0.3cm大炭化物やや多く含，Sicl10YR2/1 1～3cm大ブロック 15%含。
E1:HC10YR7/1,Sicl0YR5/3 粒 30～40%　軟　中疎　～0.3cm大白色レキ及び土器やや多く含，0.5～1cm大炭化物多量に含，HC10YR3/1 1～2cm大ブロック 15～20%含。
F1:D1・2層に類似。HC10YR7/2,Sic5Y6/6 粒 50～60%　中軟　中密　0.5cm大白色レキ及び土器少量含，～0.3cm大炭化物やや多く含，HC10YR3/1 1～5cm大ブロック 20%含。
G1:HC10YR6/2,Sic10YR5/6 粒～層状 20%　軟　濃密 ～0.1cm大白色レキ及び土器少量含，1～3cm大及び1cm厚さの層状に炭化物多量に堆積。
H1:HC5Y8/3,Sicl10YR4/2 2～3cm大ブロック 40～50% HC10YR2/2 1～3cm大ブロック 15%　中硬　濃密　1cm大炭化物やや多く含，土器微量に含。
H2:HC5Y8/3,Sicl10YR4/2 2～5cm大ブロック 40% HC10YR2/2 1～3cm大ブロック 5%　硬　濃密　1～3cm大炭化物やや多く含，土器少量含。
H3:HC5Y8/3,Sicl10YR4/2 1cm大ブロック 20% Sil5Y7/6 粉 15～20%　中硬　濃密　～1cm大炭化物少量含。
HA:Sil5Y5/4,HC5Y8/2 0.5～1cm大ブロック 15～20%　中軟　中密　HC10YR3/1 1～3cm大ブロック 15%　～0.2cm大白色レキ及び土器少量含。
HB:HC10YR7/8,HC5Y8/2 1～3cm大ブロック 15% Sil10YR5/3 粒 20～30% HC10YR3/1 1～3cm大ブロック 5～7%　硬　濃密　～0.2cm大白色レキやや多く含，1cm大炭化物及び土器少量含。
HC:Sil5Y5/6,HC5Y8/2 1cm大ブロック 15%　中軟　中疎　0.5cm大白色レキ少量含，土器やや多く含。
HD:Sil5Y5/2,HC5Y8/2 0.5～2cm大ブロック 20% HC10YR3/1 1～2cm大ブロック 20% 中硬　濃密　～0.3cm大白色レキ及び～0.5cm大炭化物および土器やや多く含。
HE:Sil2.5Y6/2,HC2.5Y8/2 1～3cm大ブロック 30～40% HC10YR3/1 1～2cm大ブロック 20%　硬　濃密　～0.3cm大白色レキ及び～0.2cm大炭化物やや多く含，土器少量含。
HF:Sic2.5Y7/2,HC2.5Y8/2 1～2cm大ブロック 10% HC10YR3/1 1～2cm大ブロック 5～10%　中軟　中密　～0.5cm大白色レキやや多く含，1cm大炭化物少量含。
HG:Sil10YR5/3,HC10YR6/8 0.5～1cm大ブロック 30% HC10YR3/1 1～5cm大ブロック 15%　中軟　中密　～0.2cm大白色レキやや多く含，1cm大炭化物微量に含。
HH:HC10YR6/8,HC2.5Y8/4 ～1cm大ブロック 25% HC10YR3/1 1～3cm大ブロック 15～20%　硬　濃密　～0.1cm大白色レキやや多く含，～0.3cm大炭化物少量含。
HI:Sil10YR4/3,HC2.5Y8/8 1～4cm大ブロック 20～25% HC10YR3/1 1～2cm大ブロック 15%含。
HJ:HHに類似。HC10YR6/8,HC2.5Y8/4 ～1cm大ブロック 30% HC10YR3/1 1～5cm大ブロック 30%　中硬　濃密　～0.1cm大白色レキやや多く含，～0.3cm大炭化物少量含。
I1:HC10YR5/1,Sil2.5Y7/8 粒～0.5cm大 20～25% HC10YR2/1 1～3cm大ブロック 10%　中硬　濃密　～0.5cm大炭化物少量含。
I2:HC10YR5/1,Sil2.5Y7/8 0.5～2cm大 30% HC10YR2/1 1～3cm大ブロック 7%　中硬　濃密　0.3～1cm大炭化物やや多く含。
I3:HC10YR5/1,Sil2.5Y7/8 粒～1cm大 10% HC10YR2/1 1～3cm大ブロック 5%　中軟　中密　0.3～1cm大炭化物やや多く含，土器少量含。
I4:HC10YR5/1,Sil2.5Y7/8 粒～1cm大 15% HC10YR2/1 1～3cm大ブロック 10%　中硬　中密　0.3～1cm大炭化物及び土器少量含。
J1:HC2.5GY7/1,HC10YR5/1 粉～1cm大ブロック 40～50%　軟　密　1～3cm大炭化物やや多く含。
K1:HC10YR2/1,Sil10YR7/2 粒 10%　軟　密　～1cm大炭化物及び土器やや多く含。
L1:HC10YR4/1,HC2.5GY7/1 0.5～10cm大ブロック 15% 軟　密　1cm大炭化物及び木器やや多く含，土器少量含。
L2:HCN4/1,HCN7/0 1～2cm大ブロック 10～15% 軟　濃密　0.5～1cm大炭化物及び土器やや多く含。
M1:HC10YR5/1,HCN7/1 1cm大ブロック　20%　軟　中密　～0.1cm大白色粒やや多く含，0.5cm大炭化物多量に含，土器少量含。
M2:HC10YR5/1,HCN7/1 1cm大ブロック　30%　軟　中密　～0.1cm大白色粒及び0.5cm大炭化物やや多く含，土器少量含。
M3:HC10YR5/1,HCN7/1 1cm大ブロック　15%　軟　中密　～0.3cm大白色粒やや多く含，0.5cm大炭化物多量に含，土器少量含。HC10YR2/3　30%含。
N1:HC10YR6/2,HC5B7/1 0.5～1cm大ブロック 20～25%　軟　密　HC10YR2/1 1～3cm大ブロック 15% 1cm大炭化物やや多く含。

**SD601（前期）**

O1:Sil10YR7/8,Sicl10YR3/1 粒～3cm大ブロック 20～25%　硬　濃密　～0.3cm大白色レキ多量に含，0.5cm大炭化物微量に含。
P1:Sicl10YR5/4,Sil10YR5/8 0.5～1cm大ブロック 40% HC10YR4/1 1～2cm大ブロック 15～20%　～0.1cm大白色レキ及び～0.3cm大炭化物少量含。
P2:Sicl10YR5/4,Sil10YR5/8 0.5～1cm大ブロック 20% HC10YR4/1 1～2cm大ブロック 25%　～0.2cm大白色レキ及び～0.5cm大炭化物やや多く含，土器少量含。
Q1:HC10YR5/2,Sil10YR5/8 0.5cm大ブロック 20～25% HC10YR4/1 1～2cm大ブロック 10%　軟　中密　～0.1cm大白色レキ及び～0.5cm大炭化物やや多く含，土器少量含。
Q2:HC10YR5/2,Sic2.5Y8/8 0.5～2cm大ブロック 40% HC10YR2/1 1～2cm大ブロック 20%　軟　中疎　～0.3cm大白色レキ及び土器少量含，0.5cm大炭化物やや多く含，HC5YR6/8 層状（焼土）
R1:HC10YR4/2,Sil2.5Y8/8 1cm大ブロック 30%　中軟　中密　HC10YR3/1 1～3cm大ブロック 10%　～0.1cm大白色レキ及び土器および～0.3cm大炭化物少量含。

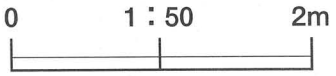
## 第5図　東奈良遺跡 SD502・SD502B・SD601断面図



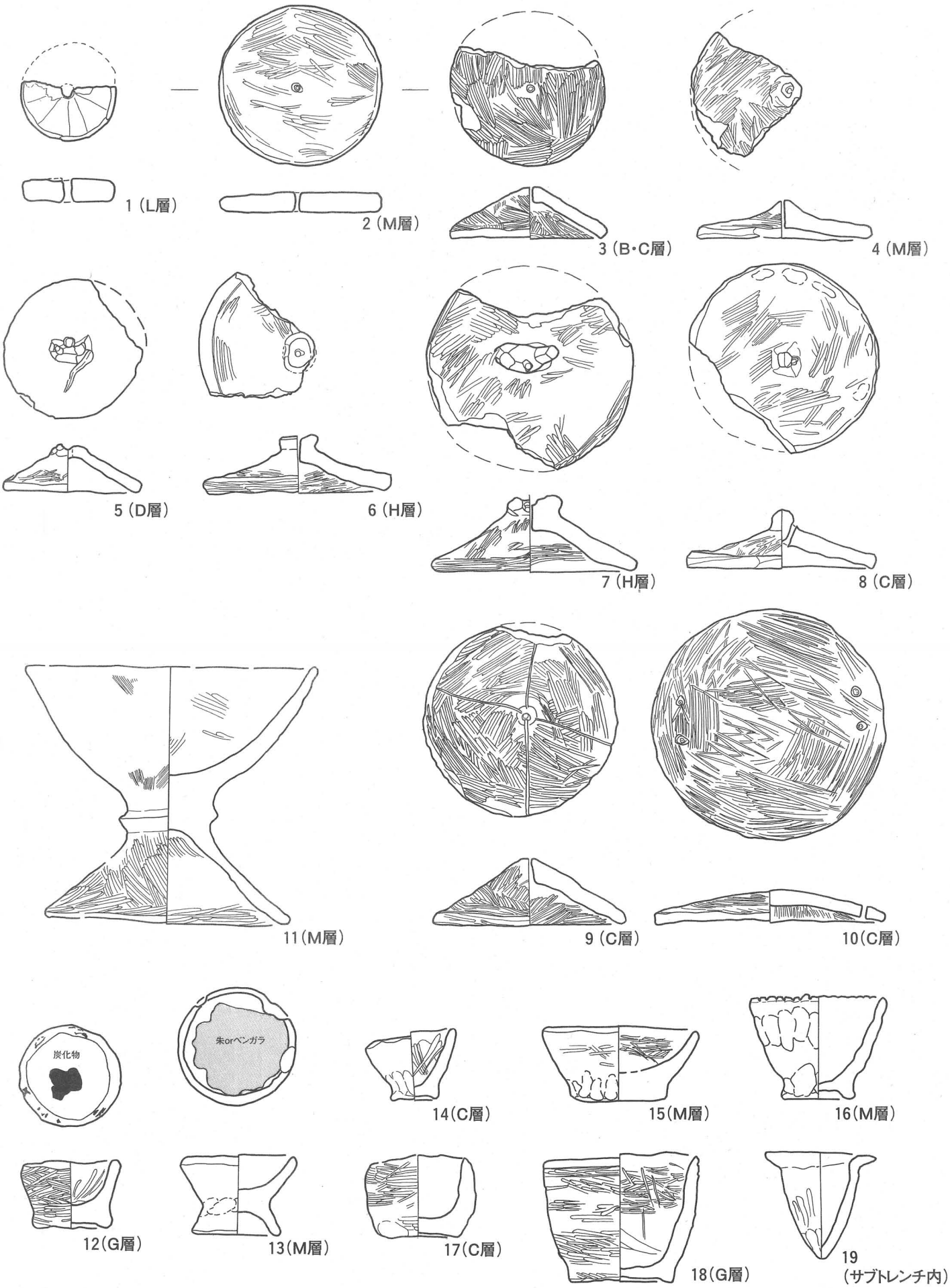




SD515-B

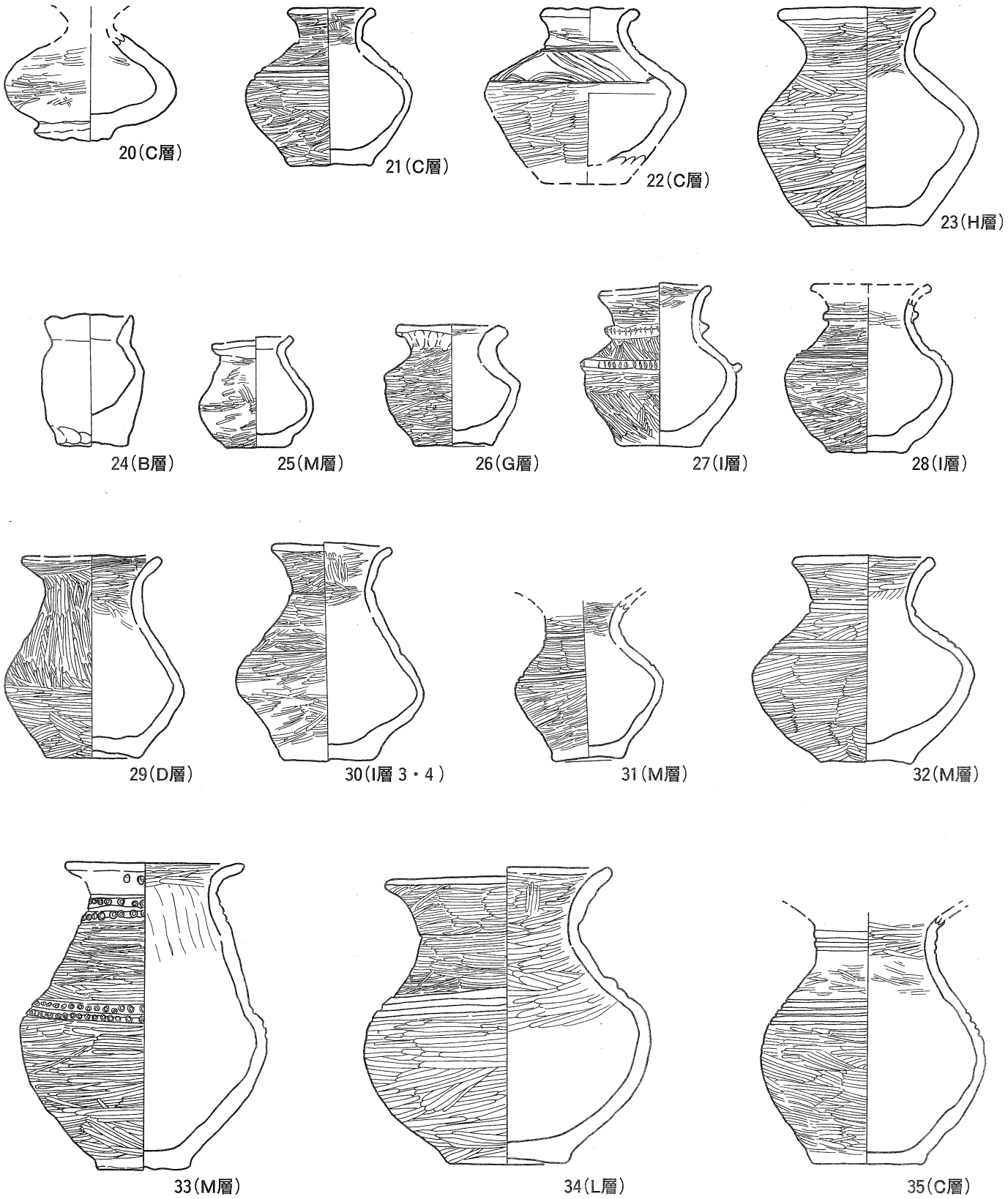
A1:Sil10YR4/3,HC10YR3/1　1～3cm大ブロック 30～40% Sic2.5Y7/8 粒～層状 10%　軟　中密　0.5～2cm大炭化物やや多く含，土器少量含。
B1:Sil10YR5/1,HC10YR7/1 粒～1cm大ブロック 40～50% HC10YR4/1 1～3cm大ブロック 20～25%　中軟　中密　2cm大炭化物やや多く含，土器少量含。
C1:Sil10YR5/1,HC10YR7/1 粒～1cm大ブロック 15% HC10YR3/1 3～5cm大ブロック 40～50%　中軟　中密　2～5cm大炭化物少量含，～0.2cm大白色レキやや多く含土器少量含。土器少量含。
D1:HC10YR5/1,Sic5Y6/6 粒～1cm大ブロック 30～40%　～0.1cm大白色粒多量に含，中硬　濃密　土器少量含。
E1:Sil2.5Y4/6,HC2.5Y6/1 粒～層状 30% HC10YR2/1 1～2cm大ブロック 15%　中軟　中疎　0.5cm大炭化物やや多く含。
E2:Sil2.5Y4/6,HC2.5Y6/1 粒～層状 40～50% HC10YR2/1 1～3cm大ブロック 20%　軟　中密　0.5cm大炭化物やや多く含。
F1:Sicl10YR2/1,HC10YR8/8,HC10YR8/2 1～5cm大ブロック 20～25%　Sic10YR4/2 粒 10%　中硬　濃密　～0.2cm大白色レキ及び～0.5cm大炭化物やや多く含。
F2:Sicl10YR2/1,HC10YR8/8,HC10YR8/2 1～10cm大ブロック 30%　Sic10YR4/2 粒 15～20%　中硬　濃密　～0.2cm大白色レキ少量含，0.5～1cm大炭化物やや多く含。
F3:Sicl10YR2/1,HC10YR8/8,HC10YR8/2 1～10cm大ブロック 30～40%　Sic10YR4/2 粒 40%　中硬　濃密　～0.2cm大白色レキ少量含，0.5～1cm大炭化物やや多く含。土器少量含。
G1:Sil10YR5/3,HC10YR8/2 1～5cm大ブロック 20%　Sicl10YR2/1 1～3cm大ブロック 20%　HC2.5Y8/3 1～3cm大ブロック 10%　～0.2cm大白色レキ及び1～2cm大炭化物やや多く含，中軟　中疎。
H1:Sic10YR5/3,HC5Y7/4 0.5～15cm大ブロック 30～40% Sicl10YR2/1 1～5cm大ブロック 10～15% HC10YR7/6 1～2cm大 5～7%　0.5cm大炭化物やや多く含，中硬　中密　土器やや多く含。
H2:Sic10YR5/3,HC5Y7/4 0.5～10cm大ブロック 30% Sicl10YR2/1 1～5cm大ブロック 20% HC10YR7/6 1～2cm大 10%　0.5cm大炭化物少量含，中軟　中密　土器少量含。
I1:Sil10YR5/2,Sil5Y6/6 0.5cm厚層状 15～20% HC5Y8/2 0.5～3cm大ブロック 15～20%　HC10YR8/2 1cm大　10%　HC10YR4/1 1～2cm大 10%　中軟　中疎　0.5～1cm大炭化物及び土器やや多く含。
J1:HC10YR5/2,HC2.5Y8/6 1～5cm大ブロック 25% Sicl10YR3/2　粒～1cm大 20～25% 中軟　濃密　0.5cm大炭化物やや多く含。土器少量含。
J2:Sil7.5Y8/2,HC10Y8/2 1～3cm大ブロック 30% HC10YR4/1 1～3cm大ブロック 20～25%　中硬　中密　0.5cm大炭化物少量含。
K1:HC10Y6/2,HC5Y5/1 粉 40～50%　中軟　濃密　0.5cm大炭化物少量含。
L1:HC10YR5/2,Sil10YR5/8 粒～0.5cm大 15%　HC2.5Y8/3 ～0.3cm大　5～10% Sicl10YR3/1 ～3cm大ブロック 10%　中軟　中疎　0.5cm大炭化物多量に含，土器少量含。
L2:HC10YR4/1,Sil10YR5/8 粒～1cm大ブロック 30%　HC2.5Y8/3 ～1cm大　10% Sicl10YR3/1 層状 25～30%　中硬　中密　0.5cm大炭化物少量含。
L3::HC10YR5/2,Sil10YR5/8 粒～1cm大ブロック 10～15%　HC2.5Y8/3 ～0.5cm大　5% Sicl10YR3/1 ～1cm大ブロック 5%　中硬　中密　0.5cm大炭化物少量含。
L4::Sil10YR5/2,Sil10YR5/8 粒～0.5cm大 10%　HC2.5Y8/3 ～1cm大ブロック　10～15% Sicl10YR3/1 ～1cm大ブロック 3～5%　軟　中疎　0.5～1cm大炭化物やや多く含，土器少量含。
M1:HC10YR5/1,HC10Y6/2 1～2cm厚の層状 Sic10YR5/6 粒 15% 軟　中疎　～0.3cm大炭化物やや多く含。
M2:HC10YR5/1,HC10Y6/2 1～2cm厚の層状 Sic10YR6/2 粒 20～30% 軟　中疎　0.3～1cm大炭化物及び土器やや多く含,HC10YR4/1 1～5cm大ブロック 10～15%含。
M3:HC10YR5/1,Sil10Y6/2 粒 5～10% Sic10YR6/2 粒 15% 軟　濃密　1～2cm大炭化物やや多く含,土器及び木器少量含。
N1:HC10YR5/1,Sil10YR6/2 粒 30% HC10YR5/2 2cm大ブロック 10%　軟　濃密　0.5～5cm大炭化物多量に含，土器やや多く含。
O1:HC10YR3/1,HC2.5Y8/1 1～3cm大ブロック 20% Sic10YR6/1 粒 30% 中軟　中密。
P1:HC10YR4/1,HC10BG7/1 0.5cm大 5～7%　軟　濃密　0.5～1cm大炭化物やや多く含，木器多量に含。
F～K層は人為堆積ブロック土で地業の可能性有り，L層は壁際粘土，M・N層はSD515－Bの最下層粘土，O・P層は壁崩落土。



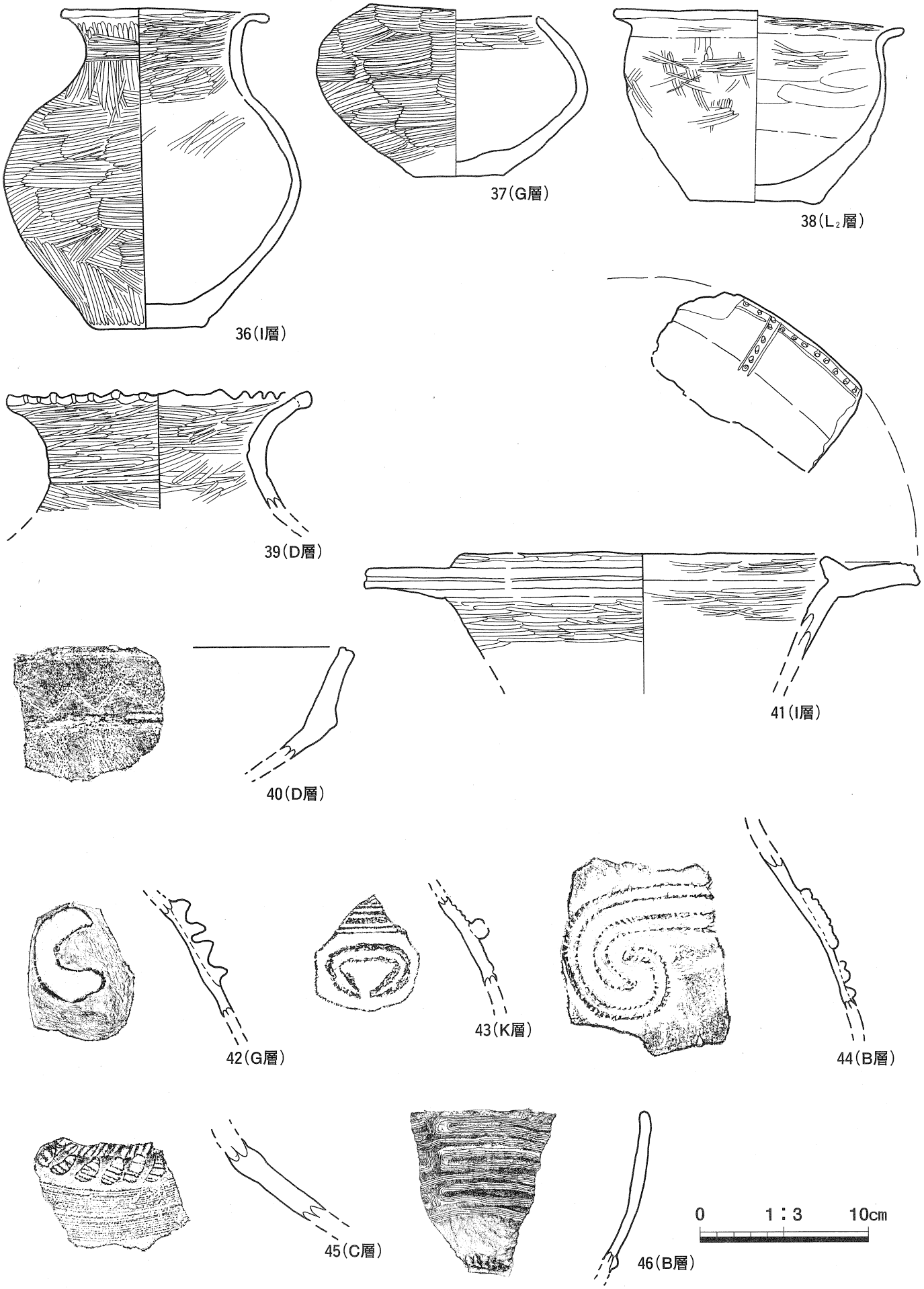

第6図　東奈良遺跡 SD515・SD515－B 断面図



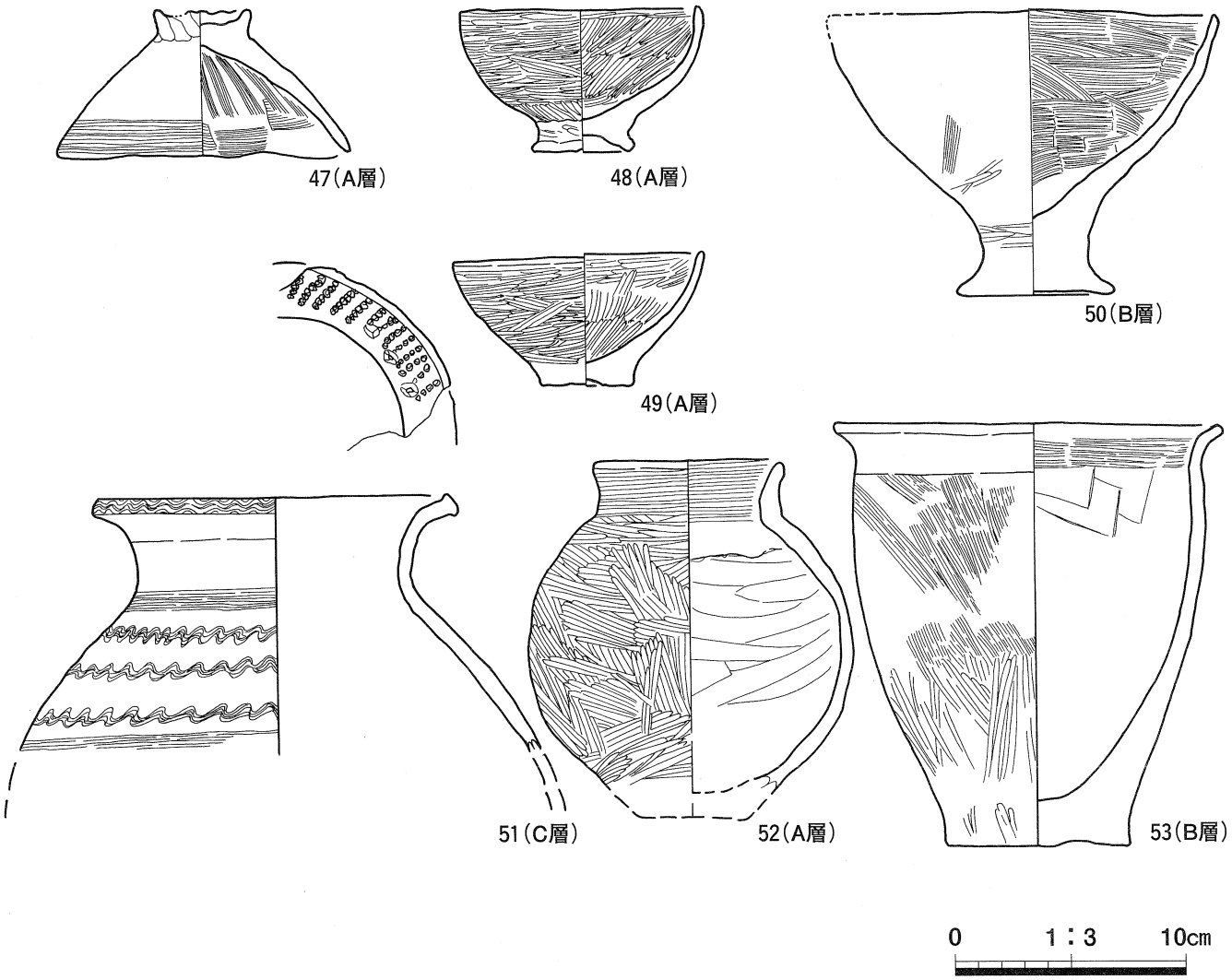

第７図　東奈良遺跡（SD502・B）出土遺物（１）　0　1：3　10cm




第8図　東奈良遺跡（SD502・B）出土遺物（2）



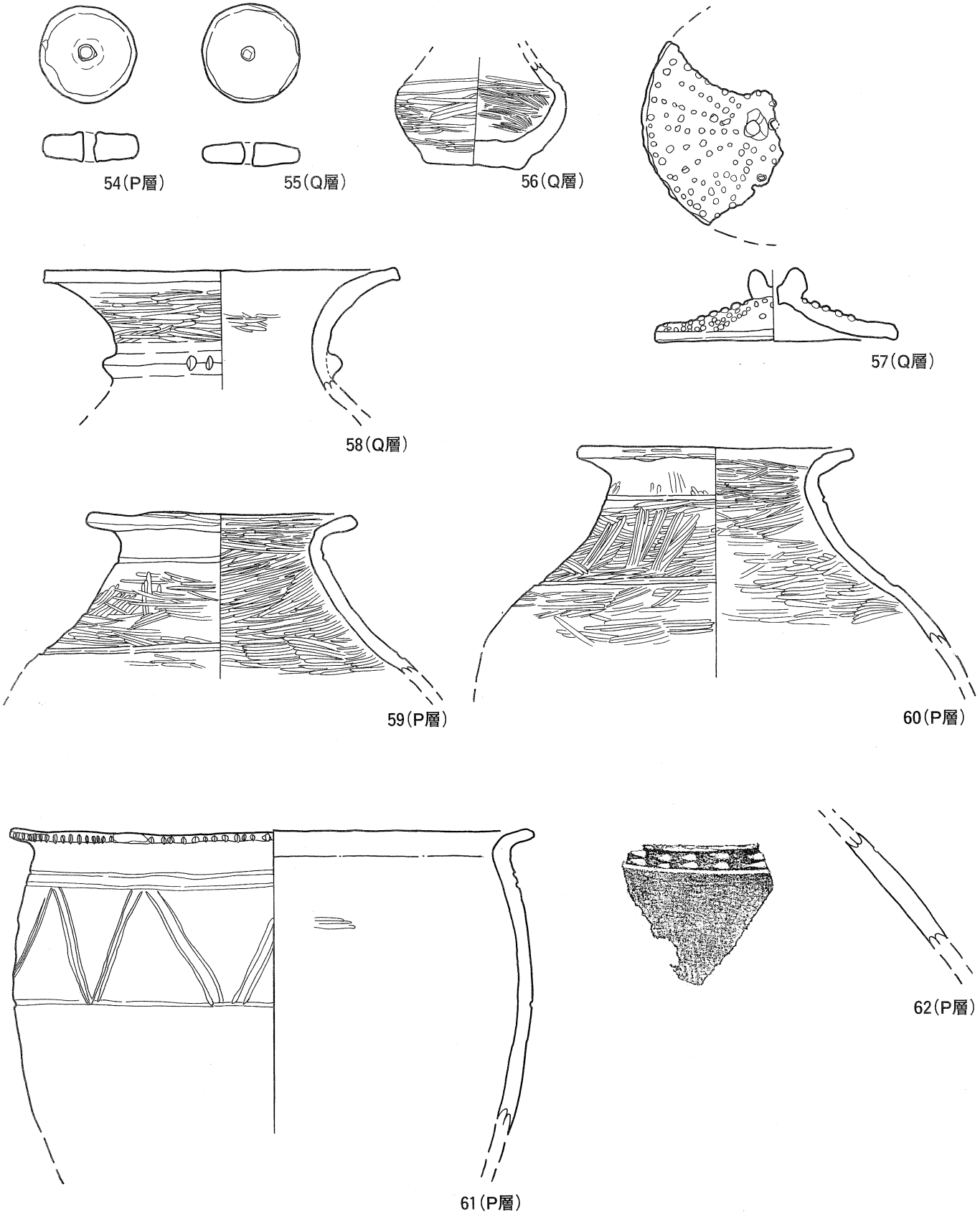

第９図　東奈良遺跡（SD502・B）出土遺物（３）



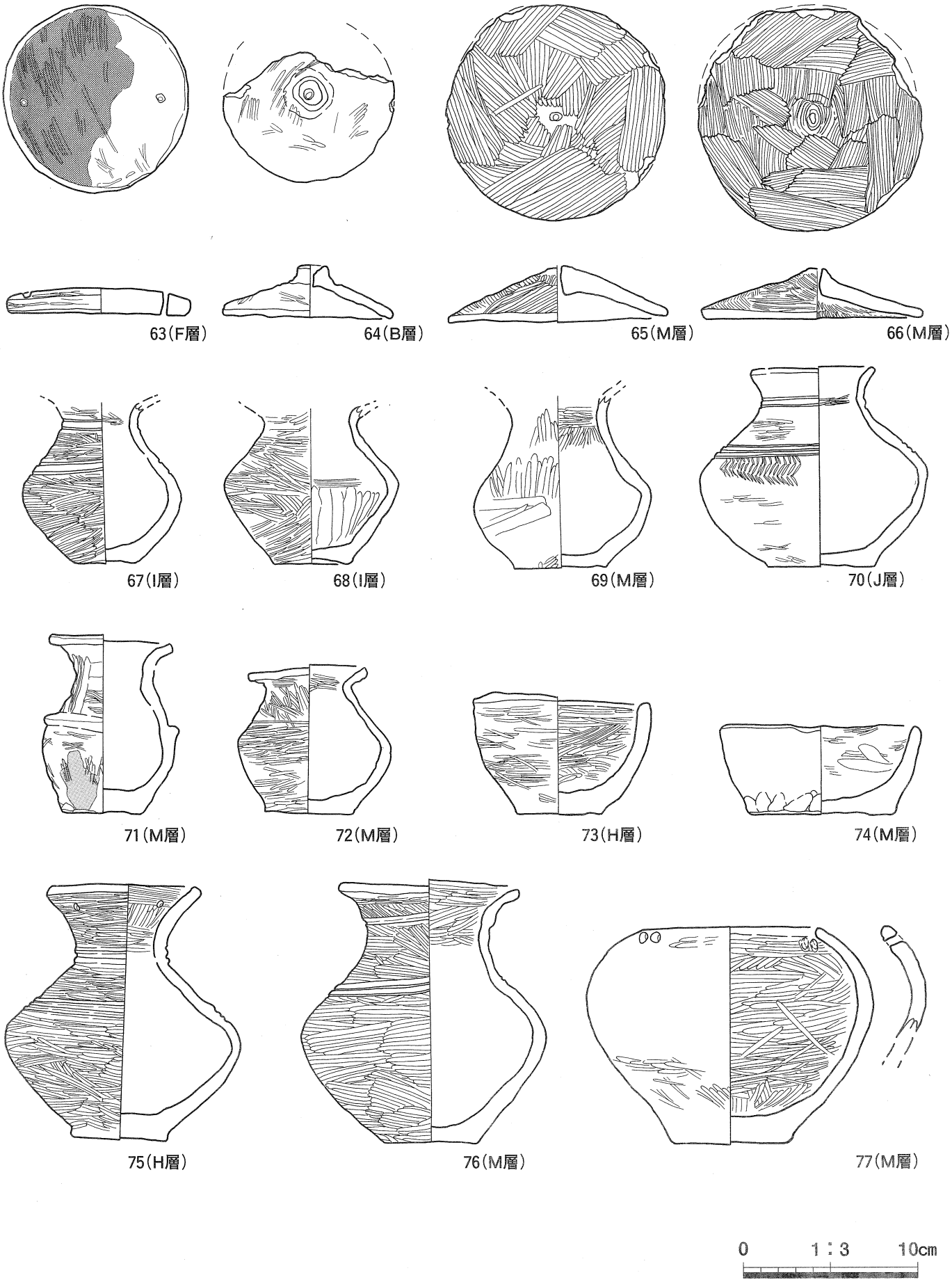

**第10図　東奈良遺跡（SD502・B）出土遺物（４）**

## まとめ

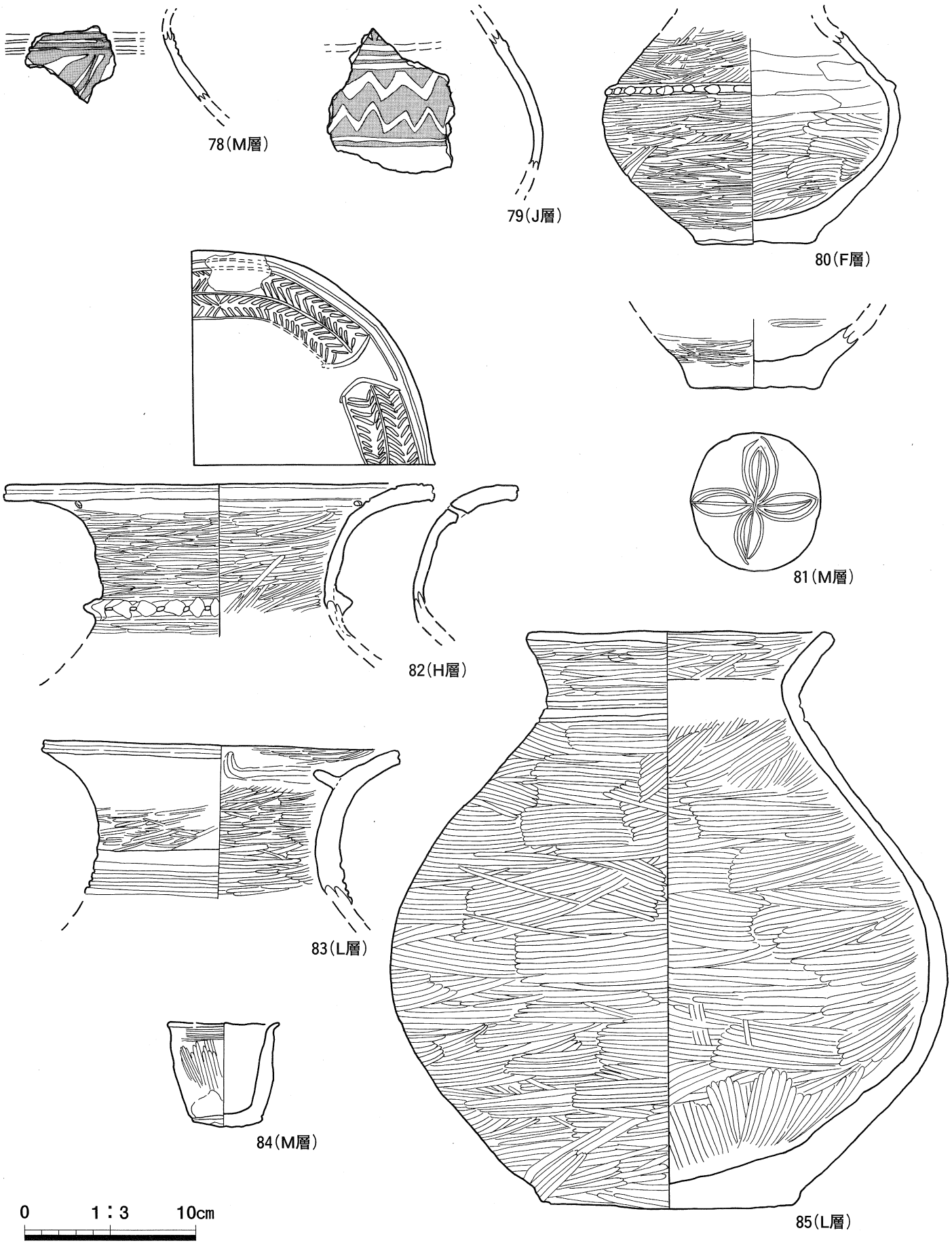
出土遺物からＳＤ502やＳＤ601、ＳＤ515は弥生時代前期前半頃には開削されていたことが改めて確認された。埋没も弥生時代前期或いは中期初頭頃には埋没し、中期段階で新たに再掘削される。また、ＳＤ502に見られたＳＤ515側の埋土に粘土ブロック土が大量に流れ込む状況は土塁状の構築物を想定させる。さらに、ＳＤ515に関しても黄褐色粘土ブロック土はＳＤ502側から流れ込んだ量の方が多いことからも窺える。柱穴に関してはＳＤ502のカーブの内側では数え切れない程の柱穴が検出されているが、土塁状の部分に小柱穴群で構成する方形の2.1×2.5ｍの建物（ＳＢ601）らしきものが見られる。この調査では弥生時代前期に属する遺構群が多数を占め、中期初頭段階（Ⅱ様式）の遺構は土坑等が散見される程度で中期後半（Ⅳ様式）になって再び土坑や井戸、溝を中心に遺構数が増加する。今後、外側に展開する環壕との関連が注目される。



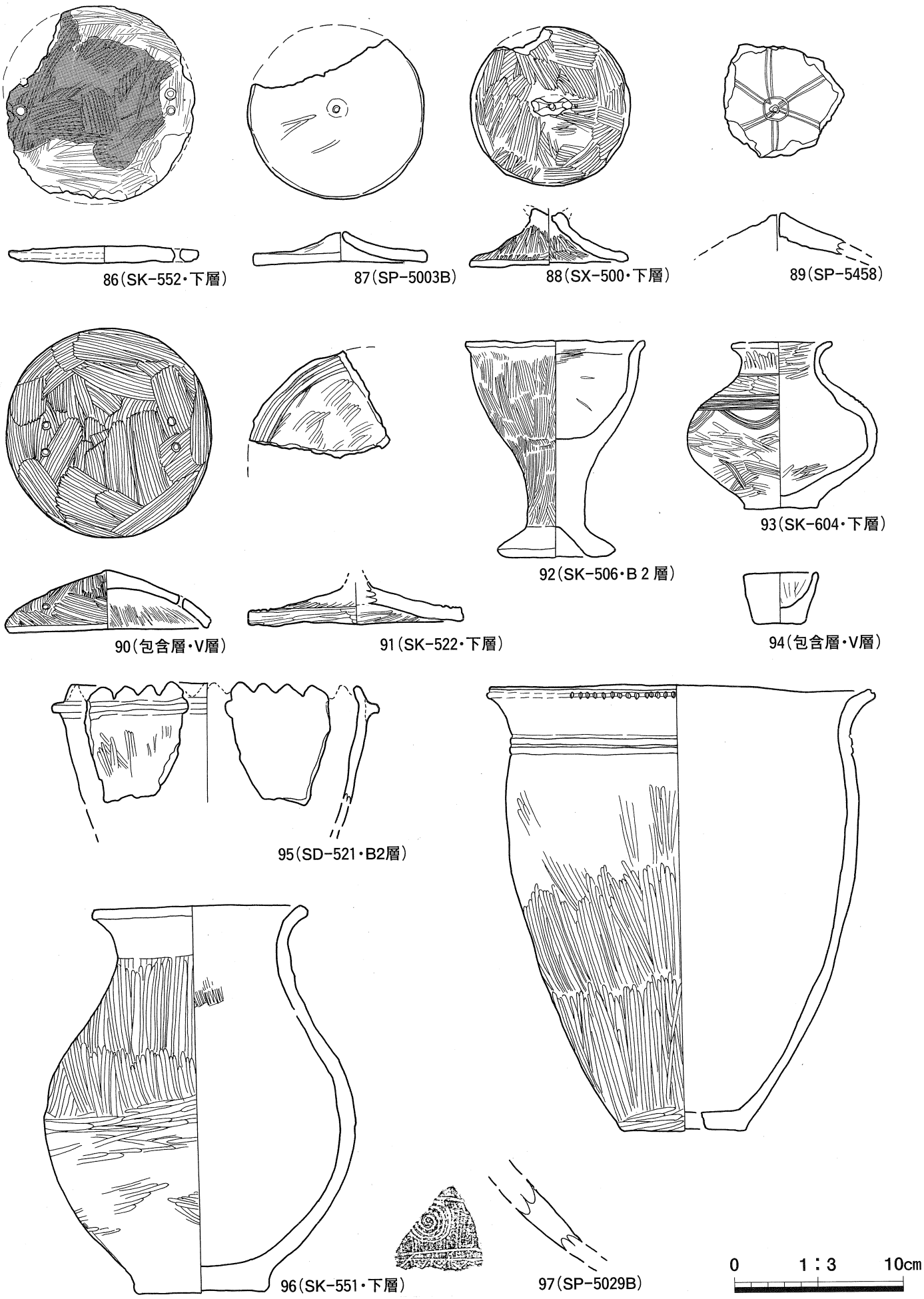

第11図　東奈良遺跡（SD601・B）出土遺物（5）




第12図　東奈良遺跡（SD515・B）出土遺物（6）




第13図　東奈良遺跡（SD515・B）出土遺物（7）




第14図　東奈良遺跡（SK他）出土遺物（8）

# 遺物観察表（1）

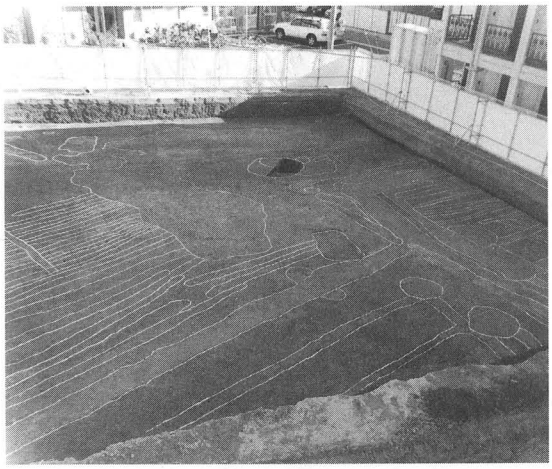
| 図版番号 | 実測番号 | 遺構 | 位置 | 層位 | 種類 | 器種 | 法量 | | | | 調整 | | 色調 | | 胎土 | 焼成 | 残存(%) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 口径 | 最大径 | 底径 | 器高 | 内面 | 外面 | 外面 | 内面 | | | | | |
| 第図 | 1 | SD502B | 東あぜ E-4G | L1層 | 土製品 | 円盤型 | — | 5.5 | — | 1.4 | — | ヘラ描き・ナデ | 鈍い黄橙色 | — | ○ | ○ | 60 | 弥生前期 | 放射状にヘラ描き 1孔 孔径0.7cm。 |
| 第図 | 2 | SD502B | 西あぜ A-3G | M層 | 土製品 | 円盤型 | — | 9.5 | — | 1.1 | — | ヘラミガキ | 灰黄色 | — | ○ | ○ | 100 | 弥生前期 | 1孔 孔径0.3cm |
| 第図 | 3 | SD502 | — | B・C層 | 弥生土器 | 蓋 | 9.2 | — | — | 3.0 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 淡黄色 | 淡黄色 | △ | ○ | 75 | 弥生中期～ | 1孔 孔径0.4cm |
| 第図 | 4 | SD502B | D-4G | M層 | 弥生土器 | 蓋 | (10.3) | — | — | 2.2 | ナデ | ヘラミガキ | 灰白色 | 灰白色・黒色 | ○ | ○ | 25 | 弥生前期 | 1孔 孔径0.35cm |
| 第図 | 5 | SD502B | E-4G | D層 | 弥生土器 | 蓋 | 7.8 | — | — | 2.7 | ナデ | ヘラミガキ | 灰黄褐色 | 浅黄橙 | △ | ○ | 95 | — | 1孔 孔径0.5cm 双頭状つまみ |
| 第図 | 6 | SD502B | E-3G | H層 | 弥生土器 | 蓋 | (11.0) | — | — | 3.4 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | 25 | — | 1孔 孔径0.35cm つまみ高0.8cm 径2.3cm |
| 第図 | 7 | SD502 | A-3G | H層 | 弥生土器 | 蓋 | 12.0 | — | — | 4.5 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 灰白色・黒色 | 黒色 | ○ | ○ | 60 | — | 1孔 孔径0.55cm 双頭状つまみ 内に炭化物付着 |
| 第図 | 8 | SD502 | A-3G | C層 | 弥生土器 | 蓋 | 11.2 | — | — | 3.3 | — | ヘラミガキ・ヘラケズリ | 褐色・浅黄色 | 黄橙色 | △ | ○ | 85 | — | 1孔 孔径0.25cm 外面にユビオサエ跡 |
| 第図 | 9 | SD502 | C-4G | C層 | 弥生土器 | 蓋 | 11.3 | — | — | 3.9 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | にぶい黄褐色・橙色 | 黒色 | ○ | ○ | 100 | 前期（Ⅰ-1・2） | 1孔 孔径0.4cm。外面ヘラ描直線文4区画 |
| 第図 | 10 | SD502 | A-3G | C層 | 弥生土器 | 蓋 | 13.5 | — | — | 1.9 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | にぶい黄橙色 | 黄橙 | ○ | ○ | 100 | 弥生前期 | 4孔2個一対 0.45cm 外面に黒斑多 |
| 第図 | 11 | SD502B | — | M層 | 弥生土器 | 高坏 | 16.9 | — | 13.9 | 15.0 | ヘラミガキ | 体上:ハケメ・体下:ヘラミガキ | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | △ | ○ | 80 | 前期（Ⅰ-1・2） | 頸部径5.7cm(5.1cm) 上半部内外面ともに摩滅著しい |
| 第図 | 12 | SD502B | 中央あぜ | G層 | 弥生土器 | 小型鉢 | 5.0 | — | 4.2 | 4.0 | ヘラミガキ | 丁寧なヘラミガキ | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | ○ | ○ | 100 | 弥生前期 | 内外に朱?ベンガラ?(暗赤色シルト質) |
| 第図 | 13 | SD502B | D-4G | M層 | 弥生土器 | 小型台付鉢 | 6.3 | — | 4.6 | 4.7 | ナデ | ナデ | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | △ | ○ | 98 | 前期（Ⅰ-1・2） | くびれ径3.9cm 内面にカーボン(黒色) 手づくね |
| 第図 | 14 | SD502 | B-3G | C層 | 弥生土器 | 小型鉢 | 5.2 | — | 2.6 | 4.1 | ヘラミガキ | ユビナデ | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | △ | ○ | 100 | — | 内面に朱orベンガラ付着 |
| 第図 | 15 | SD502B | D-4G | M層 | 弥生土器 | 小型鉢 | (8.6) | — | (5.5) | 4.4 | ヘラミガキ | ヘラミガキ・ユビオサエ | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | △ | ○ | 60 | 前期(Ⅰ-1) | 底面:ミガキと黒斑 手づくね (反転実測) |
| 第図 | 16 | SD502B | D-4G | M層 | 弥生土器 | ミニチュア鉢 | (7.6) | — | 3.9 | 6.0 | ナデ | ユビオサエ | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | 65 | 前期（Ⅰ-1・2） | 焼成で内面が黒化、外面半分黒化 |
| 第図 | 17 | SD502B | D-4G | C層 | 弥生土器 | 小型鉢 | 5.5 | 6.5 | 5.2 | 4.6 | ナデ | ヘラミガキ・ユビオサエ | 黄橙、一部黒化 | 黒色(黒化) | ○ | ○ | 100 | 弥生前期 | 内面全体に朱orベンガラ(赤色) 底面:ヘラミガキ |
| 第図 | 18 | SD502 | C-4 G | G層 | 弥生土器 | 小型鉢 | 8.7 | 8.7 | 5.9 | 7.2 | ヘラミガキ・ナデ | ヘラ沈2条・ヘラミガキ | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | ○ | ○ | 100 | 弥生前期 | 一部口縁内外に黒斑(外面一部剥落) |
| 第図 | 19 | SD502 | サブトレンチ内 | サブトレンチ内 | 弥生土器 | ミニチュア甕 | (6.5) | (6.5) | — | 6.2 | ナデ | ヘラミガキ | 黄橙色・灰黄褐色 | 黄橙色・灰黄褐色 | ○ | ○ | 50 | — | |
| 第図 | 20 | SD502B | D-4G | C層 | 弥生土器 | 小型壺 | — | 9.2 | 4.1 | 5.9～ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 橙色 | 橙色 | △ | ○ | 70 | 弥生前期? | 焼成で外面が一部黒斑 底面にゆがみ |
| 第図 | 21 | SD502B | D-4G | C層 | 弥生土器 | 小型壺 | 4.4 | 8.9 | 4.4 | 8.5 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | 97 | 前期(Ⅰ-2) | 焼成が外半分黒斑 |
| 第図 | 22 | SD502B | E-4G | C層 | 弥生土器 | 小型壺 | 4.7 | 10.7 | — | 8.7～ | ナデ | ヘラ沈文様・ヘラミガキ | 橙色 | 浅黄橙色 | △ | ○ | 87 | 前期（Ⅰ-2?） | - |
| 第図 | 23 | SD502B | A-3G | H層 | 弥生土器 | 広口壺 | 8.1 | 11.8 | 5.8 | 11.6 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 橙色・浅黄橙色 | 浅黄橙色 | ○ | ○ | 98 | 前期（Ⅰ-2～3） | 内外に黒斑 |
| 第図 | 24 | SD502 | B-3G | B層 | 弥生土器 | ミニチュア壺 | 4.6 | 5.4 | 3.8 | 7.0 | ナデ | ナデ・ユビオサエ | 黄橙色 | 黄橙色 | ○ | ○ | 98 | — | |
| 第図 | 25 | SD502B | D-4G | M層 | 弥生土器 | ミニチュア壺 | 4.3 | 6.1 | 3.4 | 5.8 | ヨコナデ・ナデ | ヨコナデ・ヘラミガキ | ほぼ黒化(黒色) | ほぼ黒化(黒色) | ○ | ○ | 97 | 前期(Ⅰ-1) | 色調一部灰白色 |
| 第図 | 26 | SD502B | C-4G | G層 | 弥生土器 | 小型壺 | 5.2 | 7.2 | 4.2 | 6.6 | ヘラミガキ | ヘラミガキ・ナデツケ | 橙色・にぶい黄橙色 | 橙色・にぶい黄橙色 | ○ | ○ | 100 | 弥生前期 | 外面に一部黒斑 |
| 第図 | 27 | SD502B | D-5G | I層 | 弥生土器 | 小型壺 | 5.8 | 8.5 | 4.4 | 8.9 | ヘラミガキ | ヘラミガキ・貼付突帯・刻目文 | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | ○ | ○ | 97 | 前期(Ⅰ-2) | 胎土の1mm砂粒中、石英・長石 |
| 第図 | 28 | SD502B | D-5G | I層 | 弥生土器 | 小型壺 | — | 9.0 | 3.9 | 8.4～ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 淡黄色 | 淡黄色 | ○ | ○ | 85 | 前期(Ⅰ-2) | 焼成の外下半黒斑、カーボン付着 |
| 第図 | 29 | SD502B | D-4G | D層 | 弥生土器 | 小型壺 | 7.4 | 9.7 | 5.2 | 11.0 | ハケ→ヘラミガキ | ナデ・ヘラミガキ | 黄橙色・浅黄橙色 | 黄橙色・浅黄橙色 | ○ | ○ | 96 | 前期（Ⅰ-2～3） | 外面が一部黒斑 |
| 第図 | 30 | SD502B | D-4G | I層 | 弥生土器 | 小型壺 | 6.4 | 10.1 | 4.9 | 11.8 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | 96 | 前期（Ⅰ-1?） | 外面下半は黒斑 |
| 第図 | 31 | SD502B | D-4G | M層 | 弥生土器 | 小型壺 | — | 8.0 | 3.8 | 8.6～ | ヘラミガキ | ヘラ沈2条+ヘラ沈2条・ヘラミガキ | 灰黄褐色 | 灰黄褐色 | ○ | ○ | 90 | 前期(Ⅰ-3?) | 内外黒斑80%。B形態。 |
| 第図 | 32 | SD502B | D-4G | M層 | 弥生土器 | 広口壺 | 7.5 | 11.9 | 5.0 | 11.2 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色・橙色 | ○ | ○ | 100 | 前期（Ⅰ-1?） | 外面がほぼ黒斑 |
| 第図 | 33 | SD502B | D-4G | M層 | 弥生土器 | 広口壺 | (9.2) | 13.2 | 5.0 | 16.5 | ヘラミガキ・ナデ | ナデ・細ヘラミガキ | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | ○ | ○ | 96 | 前期（Ⅰ-1?） | 2孔1対 孔径0.2～0.3cm ヘラ沈→竹管文 |
| 第図 | 34 | SD502B | D-3G | L層 | 弥生土器 | 広口壺 | 11.5 | 15.4 | 6.4 | 16.0 | ヘラミガキ | 丁寧なヘラミガキ | 黒褐色 | 灰白色 | ○ | ○ | 98 | 前期(Ⅰ-1) | 外面に一部朱彩痕(赤色)認められる |
| 第図 | 35 | SD502B | D-4G | C層 | 弥生土器 | 広口壺 | — | 12.0 | 6.0 | 13.5～ | ヘラミガキ | ヘラミガキ・ヘラ沈4条 | にぶい黄褐色・浅黄橙色 | 灰黄褐色 | △ | ○ | 85 | 前期(Ⅰ-3?) | 胎土に1mm前後砂粒(白色・石英)やや多、黄銅鉱多焼成で外面に黒斑。B形態。 |
| 第図 | 36 | SD502B | A-4G | I層 | 弥生土器 | 広口壺 | 12.1 | 17.6 | 6.3 | 18.8 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | にぶい黄橙色・灰白色 | にぶい黄橙色・灰白色 | ○ | ○ | 90 | 前期(Ⅰ-2) | 外面の体中央に黒斑 |
| 第図 | 37 | SD502B | C-4G | G層 | 弥生土器 | 鉢 | 10.1 | 15.9 | 5.5 | 10.1 | ヘラミガキ・ナデ | ヘラミガキ | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | ○ | ○ | 96 | 弥生前期 | 0.5mm砂粒多 |
| 第図 | 38 | SD502B | B-4G | L層 | 弥生土器 | 鉢 | 16.9 | 16.9 | 7.6 | 10.8 | ヘラミガキ→ヨコナデ | ミガキ→ヨコナデ | 灰白色 | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | 80 | 前期前半 | 火熱を受け外面体部の中央～下半器面剥落(淡赤橙色) |
| 第図 | 39 | SD502 | C-3G | D層 | 弥生土器 | 広口壺 | (17.8) | — | — | 6.8～ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 橙色 | 橙色 | ○ | ○ | — | 前期（Ⅰ-1?） | 口縁波状。 |
| 第図 | 40 | SD502 | — | D層 | 弥生土器 | 有段口縁壺 | — | — | — | — | — | — | 黒褐色 | にぶい黄褐色 | △ | ○ | — | — | 胎土に0.5mm以下白色粒中 拓本 |
| 第図 | 41 | SD502B | D-3G | I層 | 弥生土器 | 広口壺 | (32.6) | — | — | 6.2～ | ヘラミガキ | ヘラミガキ | にぶい黄褐色 | 橙色 | ○ | ○ | — | 前期(Ⅰ-2) | 口縁内面突帯。口縁内面:ヘラ沈、刺突 |
| 第図 | 42 | SD502B | 中央あぜ | G層 | 弥生土器 | 広口壺 | — | — | — | — | — | — | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | — | 前期(Ⅰ-2?) | 体部のみ。貼付突帯。「C」字状。 |
| 第図 | 43 | SD502 | A-3G | K層 | 弥生土器 | 広口壺 | — | — | — | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | ○ | ○ | — | 前期(Ⅰ-2?) | 体部のみ。朱彩。「C」字状。 |
| 第図 | 44 | SD502 | B-3G | B層 | 弥生土器 | 広口壺 | — | — | — | — | — | — | 浅黄橙色・黄橙色 | 浅黄橙色・黄橙色 | △ | ○ | — | 弥生前期 | 体部のみ。外部に黒斑、貼付突帯＋刻目 |
| 第図 | 45 | SD502 | D-4G | C層 | 弥生土器 | 広口壺 | — | — | — | — | — | 櫛描直線文 | 淡黄色 | 灰黄褐色 | ○ | ○ | — | 弥生中期（Ⅱ?） | 体部のみ。平状粘土貼付。 |
| 第図 | 46 | SD502 | A-3G | B層 | 弥生土器 | — | — | — | — | — | — | 櫛描流水文・刻目 | にぶい黄橙色 | 灰白色 | △ | ○ | — | 中期前葉（Ⅱ-1） | 胎土に1mm大砂粒中。擬流水文。 |
| 第図 | 47 | SD502 | — | A層 | 弥生土器 | 蓋 | 12.6 | — | — | 6.3 | ヘラナデ | ユビナデ・ナデ・ヘラナデ | 浅黄橙色 | 灰白色 | ○ | ○ | 80 | 弥生後期 | つまみ高1.2cm、径4.2cm 外面の1/3に黒斑 |
| 第図 | 48 | SD502 | — | A層 | 弥生土器 | 鉢 | 10.1 | — | 4.0 | 6.2 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 橙色 | 橙色 | ○ | ○ | 90 | 弥生後期 | Ⅵ－2様式 |
| 第図 | 49 | SD502 | A3～6G | A層 | 弥生土器 | 小鉢 | (10.7) | — | 3.9 | 5.8 | ヘラミガキ | ヘラミガキ・ナデ | 黄橙色 | 黄橙色 | ○ | ○ | 65 | 弥生後期 | 環濠1 Ⅵ－0－1様式 |

# 遺物観察表（2）

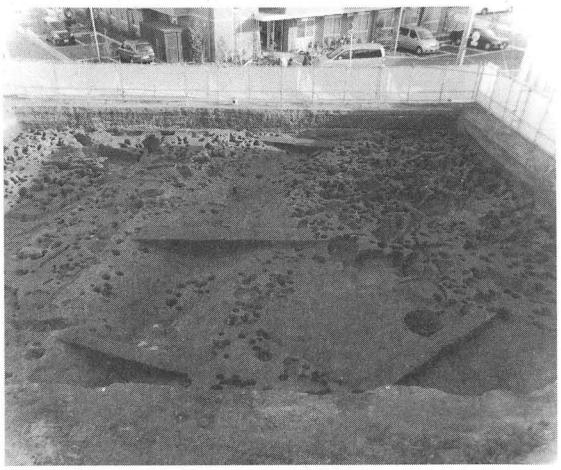
| 図版番号 | 実測番号 | 遺構 | 位置 | 層位 | 種類 | 器種 | 法量 | | | | 調整 | | 色調 | | 胎土 | 焼成 | 残存(%) | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 口径 | 最大径 | 底径 | 器高 | 内面 | 外面 | 外面 | 内面 | | | | | |
| 第　図 | 50 | SD502 | A−3G | B層 | 弥生土器 | 鉢 | 16.7 | − | 6.7 | 12.2 | ナデ | 摩滅剥落・ハケメ・ミガキ | 灰黄褐色 | 浅黄橙色 | △ | ○ | 90 | 弥生後期? | 胎土に1〜4mm丈砂粒多 一部に赤彩(橙色) |
| 第　図 | 51 | SD502 | B-2G | C層 | 弥生土器 | 広口壺 | (14.9) | − | − | 11.0〜 | − | ヘラヨコナデ・櫛描平行文・波・波・波・平 | 灰白 | 灰白 | ○ | ○ | − | 中期中葉(Ⅲ-2?) | 口縁〜体上半部のみ。 |
| 第　図 | 52 | SD502 | C-3G | A層 | 弥生土器 | 壺 | 8.0 | 14.0 | − | 14.3〜 | ヨコナデ・ナデツケ | ヨコナデ・ヘラミガキ | 灰黄褐色・浅黄橙色 | 灰黄褐色・浅黄橙色 | ○ | ○ | 75 | 弥生後期(Ⅵ-2?) | 輪積痕 |
| 第　図 | 53 | SD502 | A-3G | B層 | 弥生土器 | 鉢 | 16.5 | − | 7.8 | 18.1 | ハケメ・ナデ | ヨコナデ・ハケメ・ヘラミガキ | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | ○ | ○ | 60 | 弥生前期? | 体部上半黒斑 |
| 第　図 | 54 | SD601 | 東あぜ | P層 | 弥生土器 | 円盤型土製品 | − | 5.4 | − | 1.6 | ナデ | ナデ | 橙色 | 橙色 | ○ | ○ | 99 | 前期前半 | 1孔、孔径0.55〜0.85cm |
| 第　図 | 55 | SD601 | B−3G | Q層 | 弥生土器 | 円盤型土製品 | − | 5.4 | − | 1.3 | ナデ | ナデ | 黄橙色 | 黄橙色 | ○ | ○ | 99 | 前期前半 | 1孔、孔径0.6〜0.8cm |
| 第　図 | 56 | SD601 | B−3G | Q層 | 弥生土器 | 小型壺 | − | 9.5 | 6.0〜 | 5.0 | ハケメ→ヘラミガキ | ヘラ沈2条・ヘラミガキ | 黄橙色 | 黄橙色 | ○ | ○ | 60 | 前期(Ⅰ-1・2) | |
| 第　図 | 57 | SD601 | E−3G | Q層 | 弥生土器 | 蓋 | (14.6) | − | − | 4.0 | − | 粘土粒貼付放射状 | 黄橙色 | 黄橙色 | △ | ○ | 30 | 前期前半 | 双頭状つまみ:つまみ高1.7、径1.2。1孔、0.6cm。 |
| 第　図 | 58 | SF601 | − | Q層 | 弥生土器 | 広口壺 | 19.3 | − | − | 6.6〜 | ヘラミガキ→ナデ | ヘラミガキ・ナデ | 黄橙色 | 黄橙色 | ○ | ○ | − | 前期(Ⅰ-2) | 口縁のみ。貼付突帯＋刻目。 |
| 第　図 | 59 | SD601 | E−3G | P層 | 弥生土器 | 広口壺 | 14.4 | − | − | 9.1〜 | ヘラミガキ | ヘラ沈1条、ナデ・ヘラミガキ | 橙色 | 灰白〜浅黄橙色 | △ | ○ | 30 | 前期(Ⅰ-1〜2) | |
| 第　図 | 60 | SD601 | E−3G | P層 | 弥生土器 | 広口壺 | (15.1) | − | − | 11.0〜 | ヘラミガキ | ヘラ沈1条、ヨコナデ・ヘラミガキ | 明黄褐色・にぶい黄褐色 | 橙色・灰白色 | ○ | ○ | 20 | 前期(Ⅰ-2) | |
| 第　図 | 61 | SD601 | E−3G | P層 | 弥生土器 | 甕 | (28.9) | (28.9) | − | 16.1〜 | ナデ、ミガキ | ヘラ沈平・三角平・ヨコナデ、ナデ | 黄橙色・黒褐〜黒色 | 黒褐色 | △ | ○ | 20 | 前期(Ⅰ-2) | 使用により磨滅 |
| 第　図 | 62 | SD601 | − | P層 | 弥生土器 | 広口壺 | − | − | − | − | − | ヘラ沈平＋列点文? | 明黄褐色・にぶい黄色 | 灰白色 | ○ | ○ | − | 前期前半 | 体部のみ。 |
| 第　図 | 63 | SD515B | A−2G | F層 | 弥生土器 | 蓋 | − | 10.4 | − | 1.4 | − | ヘラミガキ | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | △ | ○ | 100 | 中期前葉(Ⅱ-1?) | 2孔、孔径0.4cm。外面に黒斑、朱。西摂系。 |
| 第　図 | 64 | SD515 | − | B層 | 弥生土器 | 蓋 | 9.8 | − | − | 2.9 | ナデ | ヘラミガキ | 黄橙色 | 黄橙色 | △ | ○ | 65 | − | 1孔、孔径0.25〜0.45cm。つまみ高1、0、径1.7cm。 |
| 第　図 | 65 | SD515B | C−1・2G | M層 | 弥生土器 | 蓋 | 12.6 | − | − | 3.1 | ナデ | ヘラミガキ | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | △ | ○ | 97 | 前期前半 | 1孔、孔径0.35〜0.7cm。内面に布圧痕。 |
| 第　図 | 66 | SD515B | D−2G | M層 | 弥生土器 | 蓋 | 12.8 | − | − | 2.9 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 橙色・黄橙色 | 浅黄橙色 | △ | ○ | 100 | 前期前半 | 1孔、孔径0.5〜0.9cm。 |
| 第　図 | 67 | SD515B | C−2G | I層 | 弥生土器 | 小型壺 | − | 9.1 | 3.7 | 9.1〜 | ナデ | ヘラ沈2条2段・ヘラミガキ | 淡黄色・橙色 | 淡黄色 | ○ | ○ | 90 | 前期(Ⅰ-3?) | |
| 第　図 | 68 | SD515B | D−2G | I層 | 弥生土器 | 小型壺 | − | 9.8 | 4.6 | 9.0〜 | ユビナデ | ヘラミガキ | 明黄褐色・灰白色 | 灰白色 | ○ | ○ | 70 | 前期(Ⅰ-2?) | 一部黒斑有。 |
| 第　図 | 69 | SD515B | C−2G | M層 | 弥生土器 | 小型壺 | − | 10.1 | 5.2 | 9.8〜 | ヘラミガキ | ヘラミガキ・ナデツケ | − | 一部橙色 | △ | ○ | 95 | 前期(Ⅰ-1?) | 色調:内外黒化。 |
| 第　図 | 70 | SD515B | C−2G | J層 | 弥生土器 | 広口壺 | (5.8) | 13.0 | 6.0 | 11.3 | ヘラミガキ | ヘラ沈平2段、矢羽根状ヘラ沈。 | 淡黄色 | 淡黄色 | △ | ○ | 98 | 前期(Ⅰ-2〜3?) | 外面一部黒斑。 |
| 第　図 | 71 | SD515B | − | M層 | 弥生土器 | 小型壺 | (7.1) | 7.9 | 4.5 | 10.2 | ナデ | ヘラミガキ→ユビナデ | 黒色・浅黄橙色・橙色 | 浅黄橙色 | △ | ○ | 93 | 前期(Ⅰ-1〜2) | 外面黒斑。 |
| 第　図 | 72 | SD515B | B−2G | M層 | 弥生土器 | 小型壺 | (6.6) | 8.7 | 5.0 | 8.5 | ナデ・ヘラミガキ | ナデ・ヘラミガキ・ヘラ沈 | 灰白〜浅黄橙色 | 灰白〜浅黄橙色 | △ | ○ | 97 | 前期(Ⅰ-1〜2) | 体中〜底外面に黒斑。 |
| 第　図 | 73 | SD515B | E−4G・東あぜ | H層 | 弥生土器 | 小型鉢 | 9.5 | − | 4.6 | 6.6 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | ○ | ○ | 100 | 前期(Ⅰ-1) | 外面黒斑有。 |
| 第　図 | 74 | SD515B | C−2G | M層 | 弥生土器 | 鉢 | (10.6) | (11.6) | (8.4) | 5.1 | ヘラミガキ→ナデ | ナデ | 橙色・黄橙色 | 浅黄橙色 | △ | ○ | 40 | 前期(Ⅰ-1) | 外面にユビ圧痕。底部外面に黒斑。 |
| 第　図 | 75 | SD515B | B−2G | H層 | 弥生土器 | 広口壺 | 8.0 | 13.5 | 5.5 | 14.5 | ヘラミガキ、ナデ | 削出Ⅱ種・丁寧なミガキ | 黄橙色・赤色 | 黄橙色 | ○ | ○ | 95 | 前期(Ⅰ-3) | A形壺。1孔1対、孔径0.3cm。外面全体に赤彩。ヘラ沈部分的に残存。外面下半〜底に黒斑。 |
| 第　図 | 76 | SD515B | 東あぜ | M層 | 弥生土器 | 広口壺 | 9.8 | 14.1 | 5.6 | 14.9 | ヘラミガキ・ナデ | 削出突帯・ヘラミガキ | 浅黄橙色・にぶい橙色 | 浅黄橙色 | △ | ○ | 98 | 前期(Ⅰ-1〜2) | 削出突帯:外面一部黒斑有。 |
| 第　図 | 77 | SD515B | C・D−2G | M層 | 弥生土器 | (蓋付)鉢 | 9.9 | 16.2 | 6.7 | 12.3 | ヘラミガキ | ヘラミガキ | にぶい黄褐色 | にぶい黄褐色 | △ | ○ | 85 | 前期(Ⅰ-1) | 2孔1対、孔径0.4〜0.8cm。外面殆ど剥落。外面下半黒斑。 |
| 第　図 | 78 | SD515B | D−2G | M層 | 弥生土器 | 広口壺 | − | − | − | − | − | − | 黒色・赤褐色(朱彩部) | にぶい黄橙色 | ○ | ○ | − | 前期(Ⅰ-1) | 彩文土器。体部のみ。 |
| 第　図 | 79 | SD515B | E−2G・壁際 | J層 | 弥生土器 | 広口壺 | − | − | − | 8.4〜 | − | ヘラミガキ | 黒色・赤褐色(朱彩部) | 褐色 | ○ | ○ | − | 前期(Ⅰ-1〜2) | 彩文土器。体部のみ。 |
| 第　図 | 80 | SD515B | A−1・2G | F層 | 弥生土器 | 壺 | − | (17.4) | 6.7 | 12.4 | ヨコナデ・ヘラミガキ | ヘラミガキ・貼付突帯指頭圧痕。 | 黒色 | 黒色・赤橙色(全面) | ○ | ○ | − | 前期(Ⅰ-3) | 朱を収めていた壺。 |
| 第　図 | 81 | − | 東側溝南側 | M層 | 弥生土器 | 広口壺 | − | − | 7.8 | 3.9〜 | ヘラミガキ | ヘラミガキ・底部ヘラ描沈線植物葉文様。 | 黒色 | にぶい黄褐色 | ○ | ○ | − | 前期(Ⅰ-1) | 底部のみ。 |
| 第　図 | 82 | SD515B | 中央あぜ | H層 | 弥生土器 | 広口壺 | 25.0 | − | − | 9.0〜 | 口:ヘラ沈羽状・ヘラミガキ | 貼付突帯・ヨコナデ・ヘラミガキ | 灰白色 | 灰白色・橙色 | ○ | ○ | − | 前期(Ⅰ-2) | 口縁のみ。頸部径15．8(13.7)cm。孔径0.4〜0.7cm。 |
| 第　図 | 83 | SD515B | 中央あぜ | L層 | 弥生土器 | 広口壺 | (20.7) | − | − | 9.0〜 | 貼付突帯・ヘラミガキ | ナデ・ヘラミガキ・ヨコナデ・多条ヘラ沈 | 浅黄橙色 | 黒褐色 | ○ | ○ | − | 前期(Ⅰ-2) | 口縁のみ。内面に貼付突帯。外面ヨコナデ部にベンガラ付着? |
| 第　図 | 84 | SD515B | E−2G | M層 | 弥生土器 | ミニチュア甕 | 6.5 | 6.5 | 3.7 | 6.1 | ユビナデ | ナデ・ヘラミガキ | 浅黄橙色・黄橙色・黒色 | 浅黄橙色・黄橙色 | ○ | ○ | 100 | 前期(Ⅰ-1) | 手づくね。外面下半に打圧。黒斑 |
| 第　図 | 85 | SD515B | C−2G・中央あぜ東 | L層 | 弥生土器 | 広口壺 | 16.6 | 32.6 | 14.9 | 33.6 | ヨコナデ・ヘラミガキ | ヘラ沈2条・ヘラミガキ | 橙色 | 橙色 | ○ | ○ | 90 | 前期(Ⅰ-1〜2) | 体部中〜下半に黒斑。 |

第２遺構面全景（真上から）

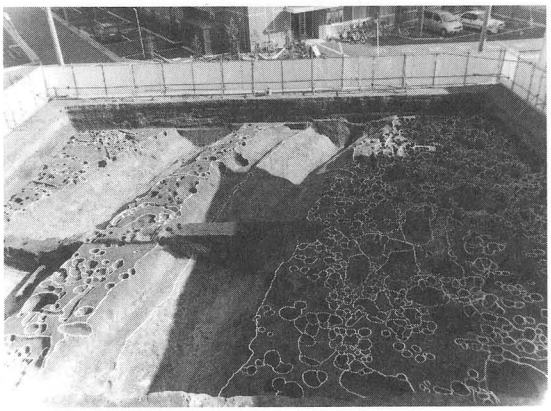
第３遺構面全景（真上から）



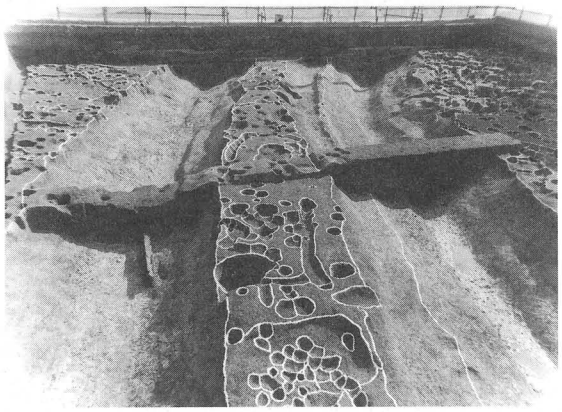
第１遺構面全景（北東から）



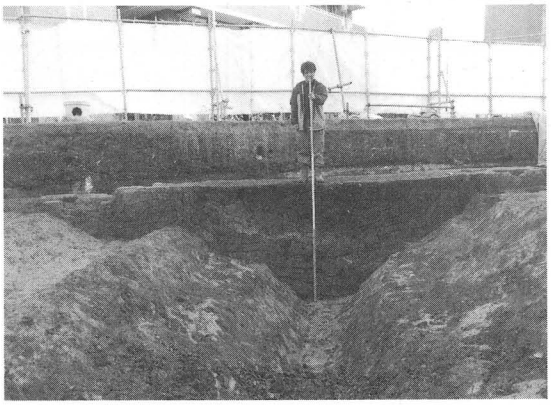
第２遺構面全景（北から）



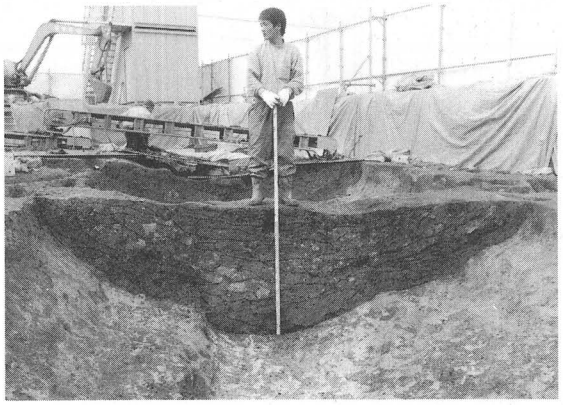
第３遺構面全景（北から）



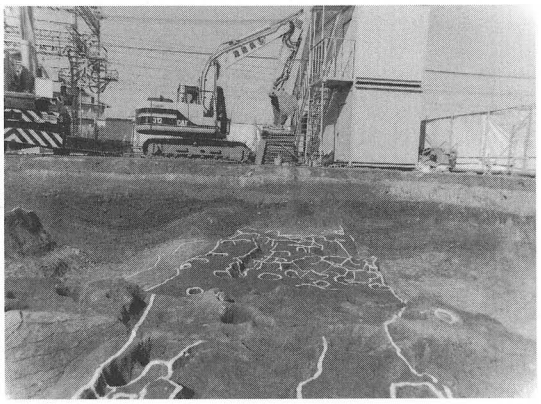
左：SD515B／右SD502（北から）



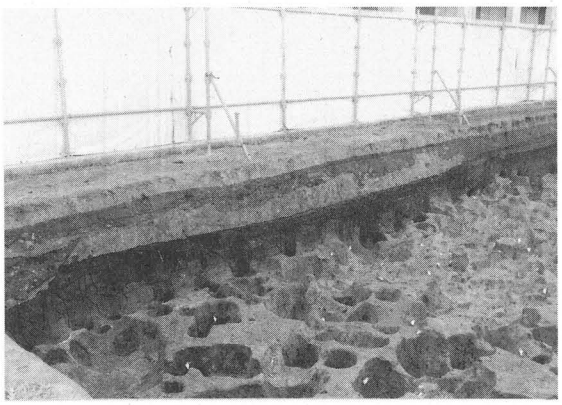
SD502-B（内環濠）・SD601土層断面（北から）



SD515-B（外環濠）土層断面（南から）

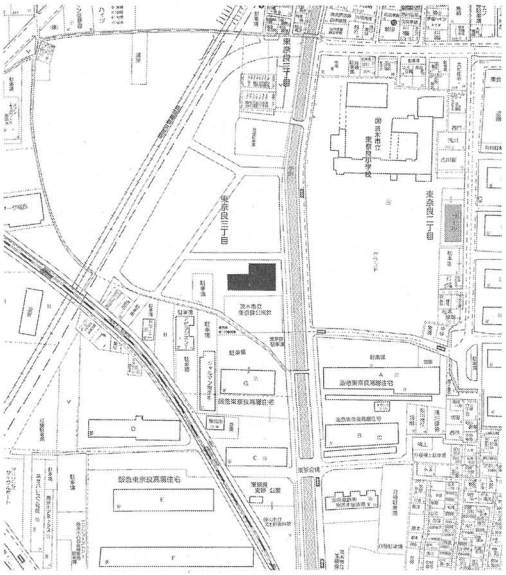


調査区画断面図（南から）



調査区画断面図（東から）

# 東奈良遺跡



位置図

**所 在 地**　茨木市東奈良三丁目114・115

**調査原因**　共同住宅建設事業

**調査期間**　平成16年３月23日～平成16年６月９日

**調査面積**　532㎡

**調査担当**　中東　正之

**調査結果**

東奈良遺跡は、千里丘陵から東方向に流れる小河川等によって形成された扇状地性平坦面と、遺跡の東側を流れる元茨木川が形成した沖積面に成立している。昭和46年、小川水路の改修工事に際して遺跡が発見されて以来、多くの発掘調査が実施され、弥生時代の環壕集落をはじめとする、弥生時代前期から中世に至る複合遺跡として、南北約1.2㎞、東西約１㎞の包蔵範囲が周知されている。

本調査地は、東奈良二・三丁目、若草町にまたがる、東奈良土地区画整理地区内に位置する。同地区は、環壕集落の中心部から北東域をその範囲に捉えており、平成11年度に実施された区画道路部分の調査では、標高７ｍ前後の扇状地平坦面に立地する、弥生時代前期の環壕５～６条と同中期の環壕２～３条が廻る集落の概要が明らかとなった。扇状地性平坦面（集落域）は、北西から南東方向に緩やかに下っており、区画整理地区東辺を南北に流れる現在の小川水路下に存在する旧河道が形成した段差地形を以て終端となる。旧河道以東は、標高5.5ｍ前後の低い沖積面が広がっている。本調査地点は、小川水路に面した南東隅の区画である。小川水路沿いは、旧河道、環壕、そして集落内から旧河道に注ぐ排水溝等、多くの溝が集中する地区である。隣接する既往の調査地として、北隣の区画道路第４調査区、南隣の東奈良公民館（平成３年度発掘調査）などがあり、その遺構検出面を本調査地とあわせて示した（第20図）。

基本層序は、南壁断面（第19図）の第１～９層とする。検出遺構は、第９層地山層上面を検出面として、環壕３条、溝約20条、井戸６基、土坑約10基、柱穴1,400口以上を数える。時期は、弥生時代前期後半～同中期初頭を主体とするもので、弥生時代前期、弥生時代中期後半から古墳時代前期初頭、古墳時代から奈良時代、中・近世のものがある。当地より西方では、各時期の遺構面が確認されているが、当地に至っては一部を除いて欠如しているため、地山層上面を検出面とした。これは、南北隣接調査地も同様の状況である。検出面は、小川水路に向けて下る標高6.1～6.4ｍの緩傾斜を呈している。以下、検出遺構から環壕について概説する。

環壕－１は、溝幅４ｍ前後、深さ1.1～1.2ｍを測る。二段の掘形ながら、やや平坦な底面で、断面形は台形に近い。８層ほどに分かれる埋土の下層遺物は、概ね弥生時代前期末のものである。中・上層の遺物は、さらに次の段階（畿内２様式）への傾向が強まり、遺構数が急激に増える弥

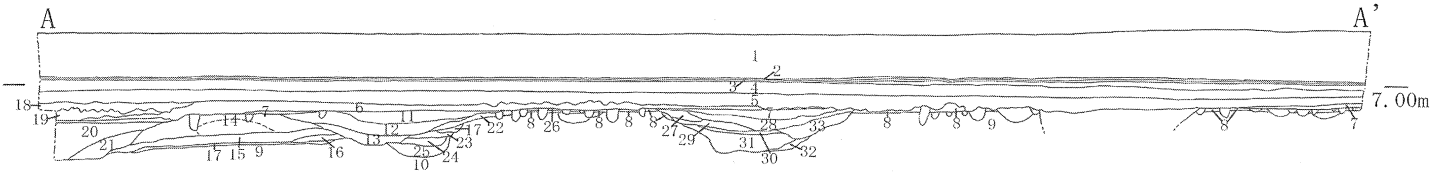
生時代中期初頭の段階には、完全に埋没したと考えられる。埋没後、同中期後半には一部を溝として利用するため、改修した痕跡が確認できる。

環壕－２以東の堆積層は、湿潤で複雑な層序を示していた。その上面は、湿地状の緩やかな落ち込みを呈し、上層から掘り込まれた柱穴等も減少する。環壕－２は、溝幅２ｍ前後、深さ１ｍ程を測る、比較的小規模の環壕である。その東肩部を削るように、やや蛇行しながら流れ、東奈良公民館にも続くＳＤ－24が重複する。埋土下層の遺物は、環壕－１に先行した形式差が認められ、弥生時代前期後半に比定される。ＳＤ－24との時期差は、あまり感じられない。

また、環壕－２の外側を、並行関係にある環壕－３が廻っており、弥生時代前期では最外縁を廻る環壕となる。当地では削平のため、これをプランで検出することはできなかったが、下層に該当するとみられる堆積層から、開削時は、並行関係を保って廻っていたものと推測される。

出土遺物は、包含層、環壕内などから出土した、壺類、瓶、鉢、高坏、器台などの弥生土器が大半を占める。その時期は、前期後半から中期初頭が最も多く、次いで中期後半が主体となる。他に庄内併行期の瓶などの土器類、古墳時代から奈良時代の土師器や須恵器などがある。石製品や木製品、動物遺体も出土している。とくに庄内併行期の井戸（ＳＥ－04）から出土した木製臼の半壊品が挙げられる。

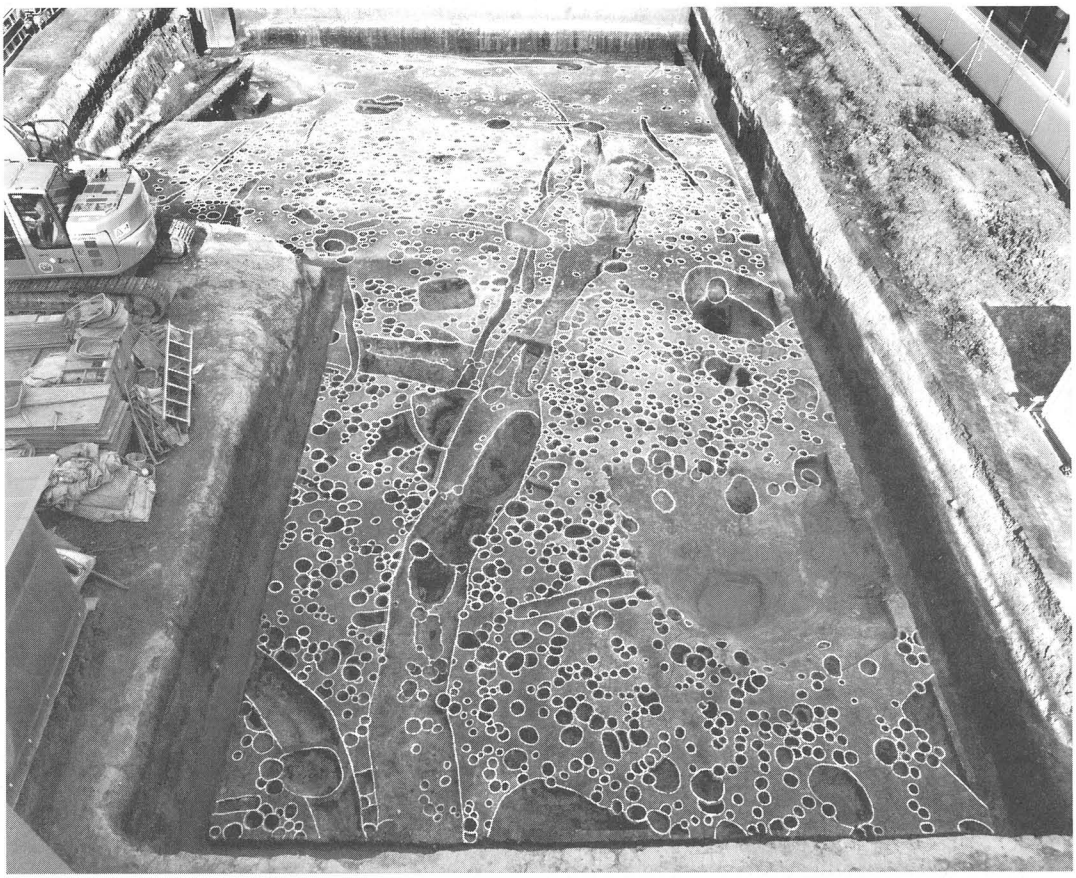
本調査地においては、集落終端の段差地形から河道に至る湿潤な立地にかかわらず、弥生時代前期としては最外縁となる環壕が開削されている。河道の影響はさけられなかったと推測されるが、意外に、洪水によるとみられる堆積は、ほとんど見受けられなかった。当地より100ｍほど西方、東奈良遺跡の集落中心部には、原初の環壕とみられる、小規模で古相を示す溝が存在する。これを含めると、開削時期に差はあるが、弥生時代前期の段階で６条もの環壕が存在していたこととなる。しかし、同中期初頭には、拡大する居住域に埋没していったと推測される。次に環壕が開削され、あるいは埋没した環壕の一部が浚われて機能を回復するのは、空白期をおいて、弥生時代中期の後半となる。空白期には、該当する遺構・遺物が大幅に減少しており、集落の消長を語る上で謎の期間となっている。



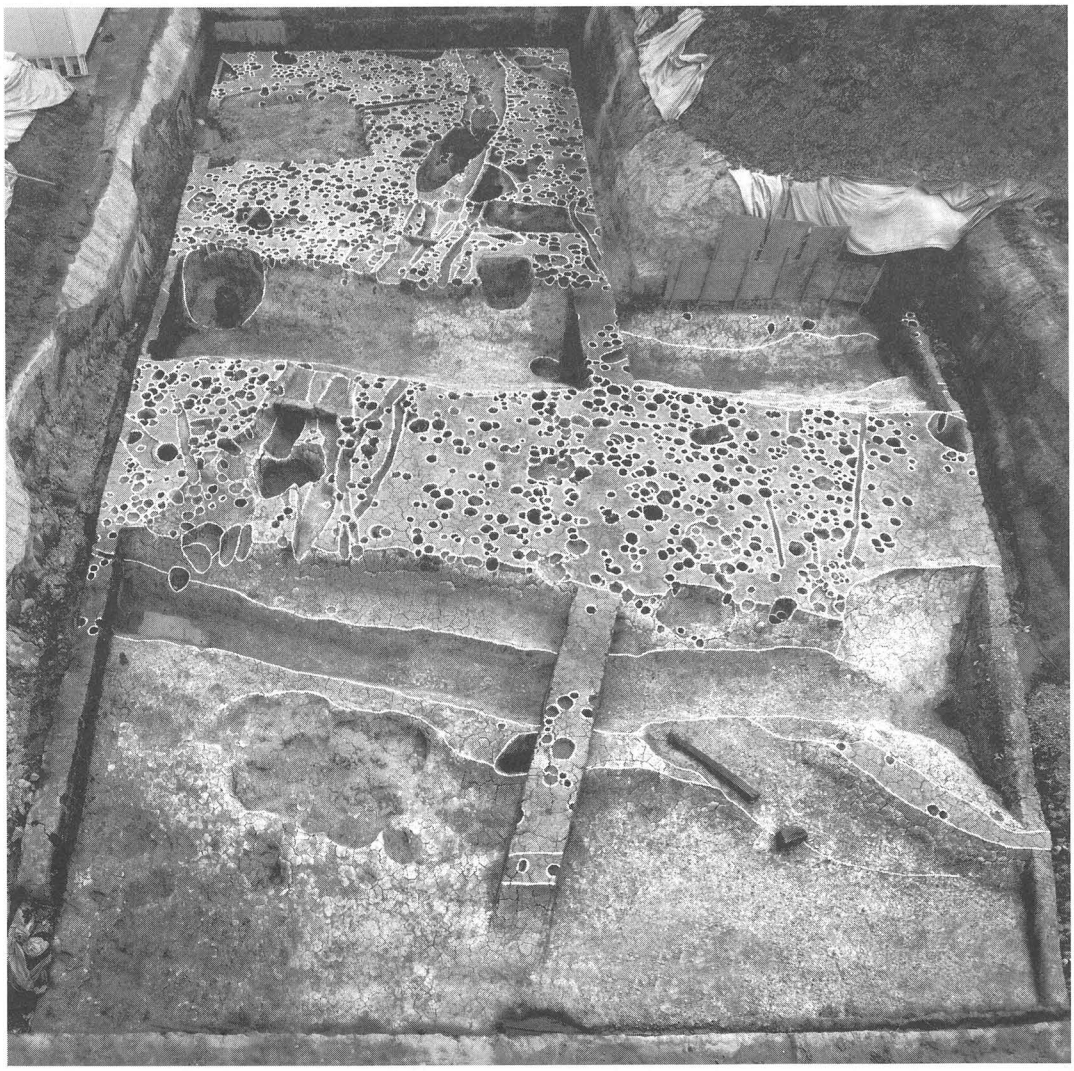

1 現代盛土
2 耕土
3 床土
4 灰黄褐色粘質土(Fe,Mg含浸、中世遺物含む)
5 灰黄褐色粘性シルト(Fe,Mg含浸、中世遺物含む)
6 暗褐色粘質土（弥生中期～古代の遺物含む、全域で締まりよく、奈良時代頃の整地を認む)
7 黒褐色粘質土(弥生前期後半～同中期初頭の遺物含む)
8 赤灰色粘土(弥生前期後半の遺物含む)
9 明黄褐色～明緑灰色粘質土(地山層)
10 明緑灰色礫混土(地山層)
11 黒褐色粘質土(弥生中期初頭主体の遺物多量に含む)
12 暗灰色粘土(弥生中期初頭主体の遺物多量に含む)
13 暗灰色粘性シルト(弥生中期初頭主体の遺物・植物遺体含む)
14 黒褐色粘質土・灰色粘土・地山ブロック混在
15 灰色粘土(弥生中期初頭主体の遺物・植物遺体含む)
16 暗灰色シルト
17 灰色粘土・地山層混在
18 灰黄褐色シルト
19 褐灰色粘質土
20 黒褐色粘質土
21 黒色粘質土
22 灰色粘土(炭化物混)
23 灰色粘質土
24 灰色シルト混粘土
25 灰色粘土
26 第６層と第８層混在
27 暗灰色粘質土・地山ブロック混在
28 第７層と第30層混在
29 暗灰色粘土(弥生前期遺物多量)
30 灰色粘土
31 暗灰色粘土
32 暗灰色粘土(地山ブロック混入)
33 第31層と第29層混在
34 灰黄褐色砂質土

**第19図　調査区 南壁断面土層図**

第20図　東奈良遺跡最終面平面図（中央）および隣接調査地平面図（左右）



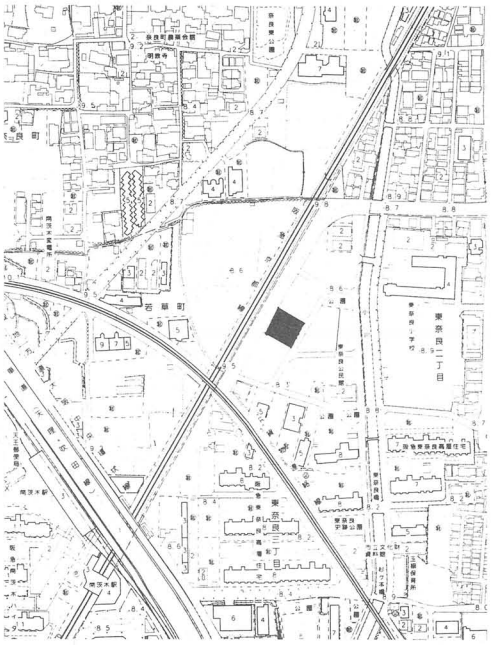
調査区全景（西から）
（溝・環濠掘削前）



調査区全景（東から）
（溝・環濠掘削後）

第21図　東奈良遺跡 遺構面検出状況

# 東奈良遺跡



位置図

**所 在 地**　茨木市東奈良三丁目127

調査原因　共同住宅建設事業

調査期間　平成16年３月18日～平成16年６月７日

調査面積　549㎡

調査担当　宮脇　薫

**調査結果**

この調査地は東奈良遺跡のほぼ中央に位置している。建物建設部を２調査区に分け、立体駐車場部分を３調査区とし、第１調査区を１次調査、第２・３調査区を２次調査とした。

基本層位は区画整理に伴う盛土が約60～70㎝、弥生時代から中世・近現代の遺物を含む淡灰褐色土（第１包含層）が約10～15㎝、弥生時代中期から古墳時代前期の遺物を含む淡褐色土（第２包含層）が約15～20㎝、弥生時代前期～中期の遺物を含む褐色土（第３包含層）が約10～15㎝であり、その下層は黄色土が堆積している。

調査は淡褐色土の上面を第１遺構面、褐色土の上面を第２遺構面、黄色土の上面を第３遺構面として検出し精査した。

淡褐色（第２包含層）から弥生時代中期の土器、古墳時代の土師器及び石器と共に、銅鏃２点、石製の管玉及び臼玉が出土した。

第１遺構面

各調査区において、幅約15～25㎝、深さ約３～８㎝の溝が途切れた状態で検出された。これらは近現代の耕作に伴う鋤溝とも考えられる。

第２調査区で検出された井戸－１は、径が約82㎝、深さ約75㎝のほぼ円形である。幅20㎝の薄板を井戸側として使用されていた。埋土内より近現代の磁器の椀が出土したことから近現代の農井戸と考えられる。他に柱穴、土坑が検出された。一部の遺構から土師器・須恵器の細片が出土したが遺構の明確な時期を決定することはできなかった。

第２遺構面

各調査区から径が約15～30㎝の円形やほぼ円形の柱跡が検出された。重なって数多くが検出されているので建物としては捉えられない。ほとんどの柱穴の埋土から壺及び甕の弥生土器の破片が出土している。

溝が各調査区から検出されている。規模は幅が約15～35㎝のものと、約40～70㎝のものと規模の違いが認められる。深さはいずれにおいても約６～17㎝と浅く、１層の堆積である。各溝から弥生中期の土器が出土している。

他に土坑が検出されている。形状はほぼ円形、楕円形、隅丸方形などである。規模は径、辺が約45㎝から1.5ｍのものまである。出土遺物は弥生中期の土器が出土している。

第１調査区の南で、短径約1.15ｍ、長径1.45ｍの楕円形、深さ約90㎝の井戸－２が検出した。井戸内からほぼ完形の壺５点、甕２点が出土した。いずれの土器も弥生時代中期（畿内Ⅲ様式後半）である。第２遺構面の遺構は出土した遺物から弥生時代中期である。

第３遺構面

各調査区から径が約18～35㎝の柱穴が検出された。埋土から出土した遺物から弥生中期、弥生中期と前期、弥生前期の弥生土器があることから、時期が異なると考えられる。

土坑が各調査区から検出されていて、形状及び規模は異なるが弥生中期の土器が出土しているので同時期の遺構とみられる。

溝も各調査区から検出されている。

第１調査区の溝は、幅が約25～45㎝であり、途切れた状態で検出された。出土遺物から弥生時代中期のものと考えられる。

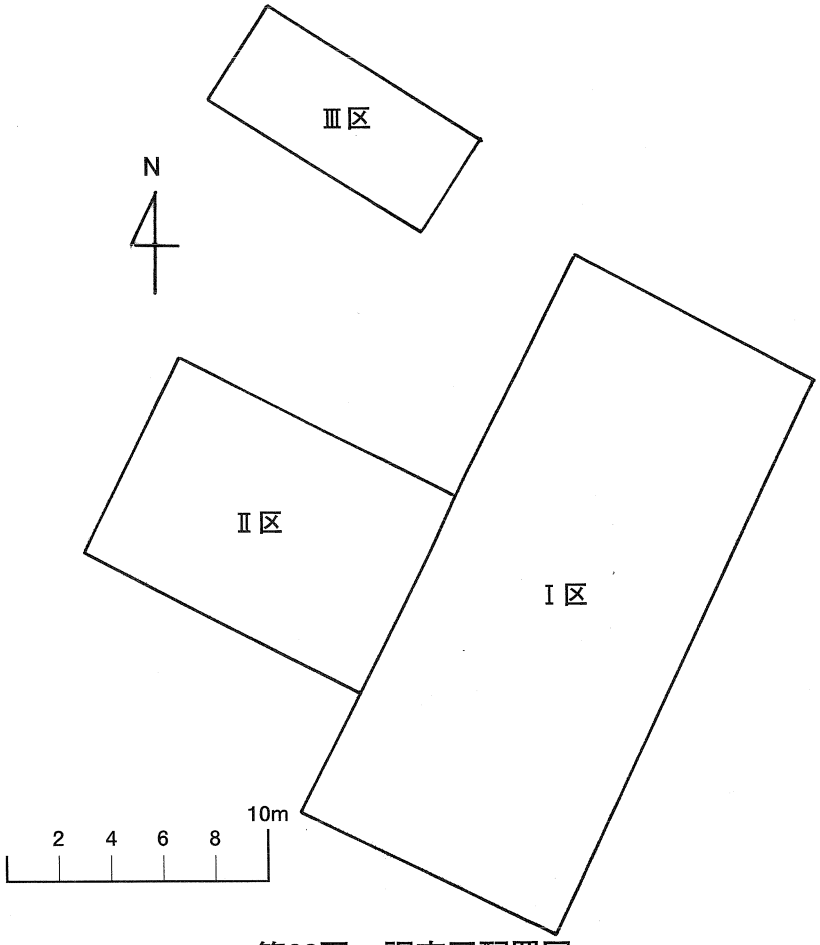
第２・３調査区の溝は、幅が約５～12㎝、やや崩れた隅丸方形で途切れた状態で検出された。規模が竪穴式住居の周溝と同じ規模、形状から削平された竪穴住居の周溝と考えられる。

第１調査区の北西で一部途切れた状態で、短径約1.53ｍ、長径が約3.32ｍ、深さ約５㎝の浅い落込みが検出された。底は平坦であり、厚さ約１～２㎝の炭化物の堆積が認められた。また、一部火による赤変がみられる。落込みは焼失した竪穴式住居である可能性がある。

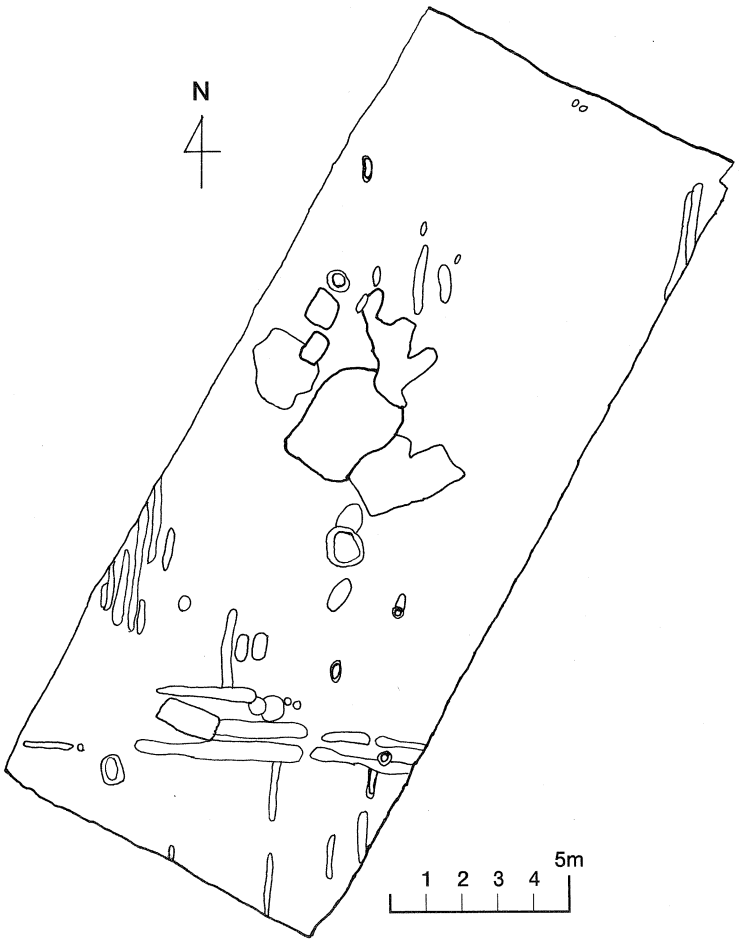
第１調査区の南端において、約1.5㎡の範囲で地山に厚さ約１㎝の炭の堆積があり、弥生時代前期の壺、甕が直立状態で出土し、その近くで石包丁が検出された。祭祀跡と考えられる。

弥生時代後期の遺構は検出していない。また、弥生時代中期の遺構が２面検出されたことにより、中期が２期に分けて考えられる可能性が出てきた。

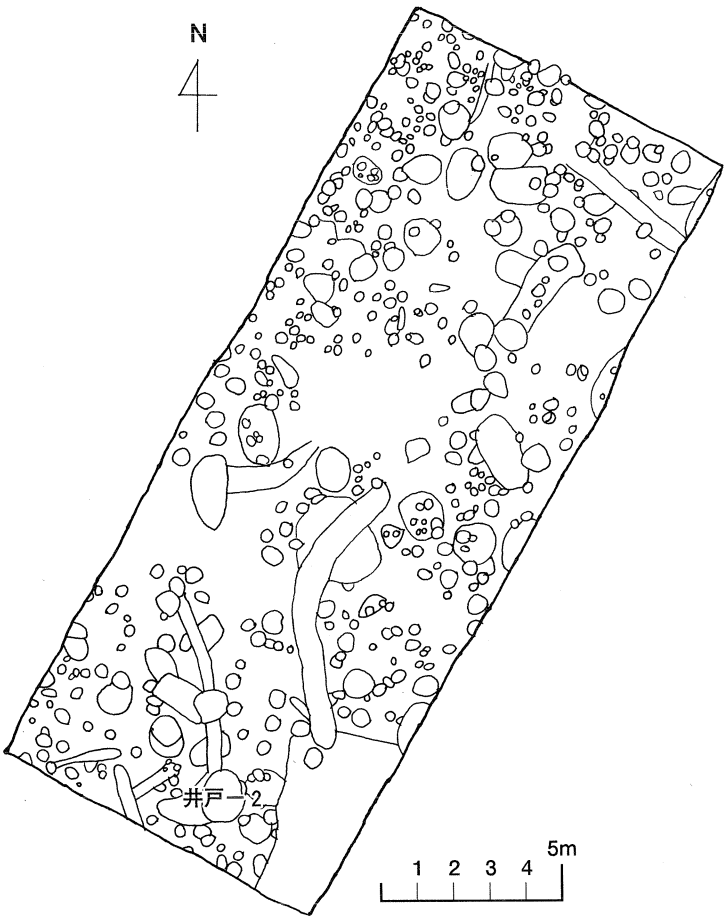
第２・３調査区の規模の小さい溝、第３調査区の落込みから今までほとんど明らかでなかった、住居の形態の一端を窺うことができる資料が得られた。



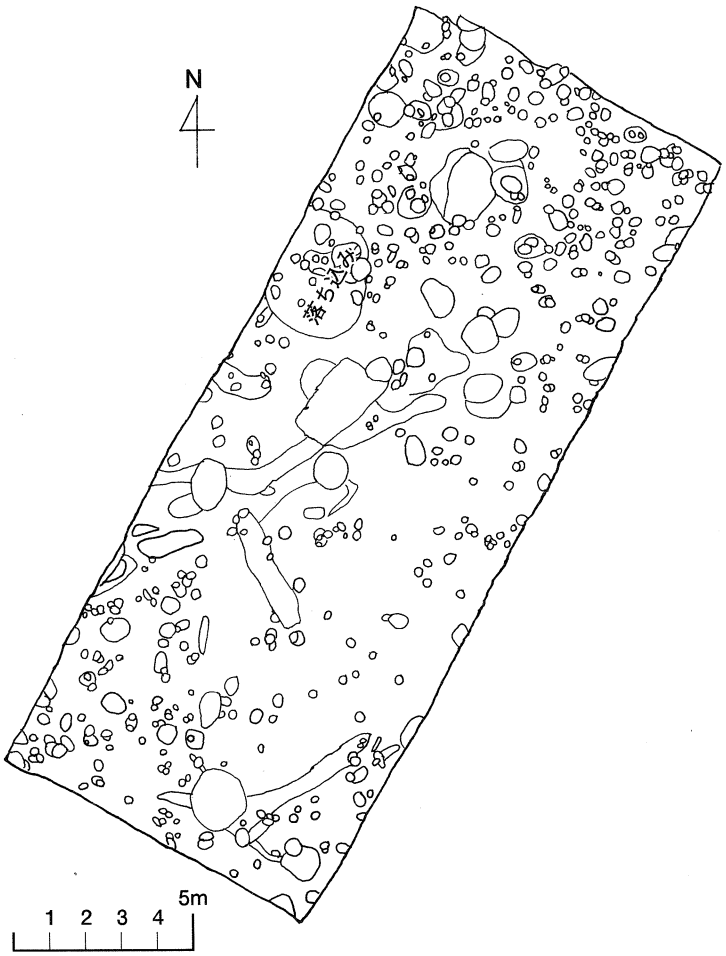

第22図　調査区配置図



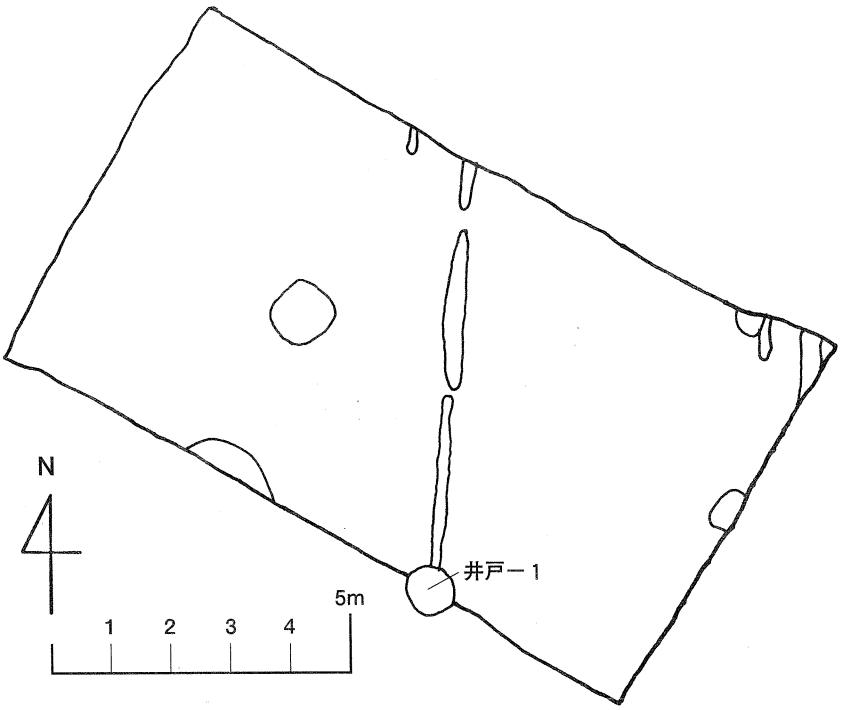

第23図　第Ⅰ調査区（第Ⅰ遺構面）



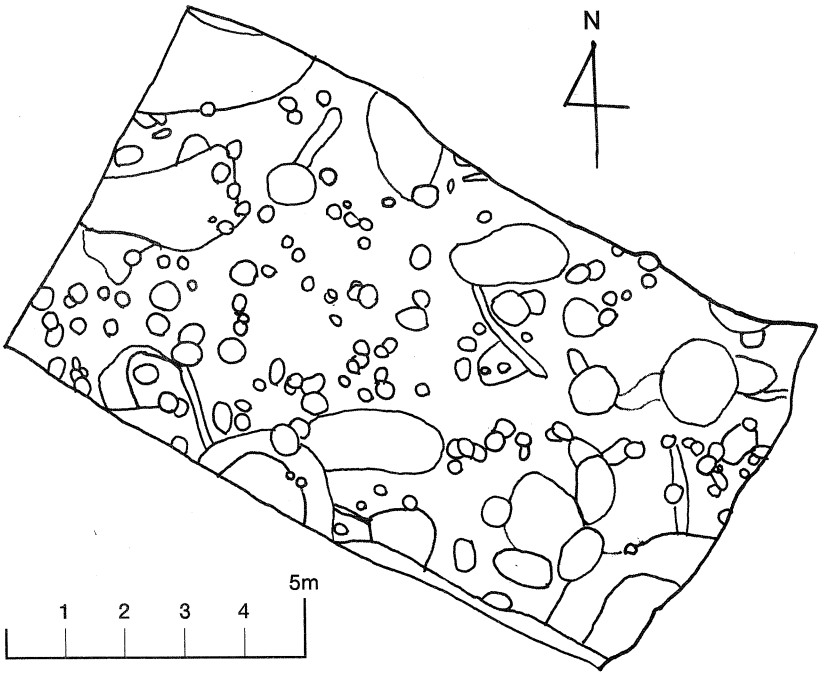

第24図　第Ⅰ調査区（第Ⅱ遺構面）



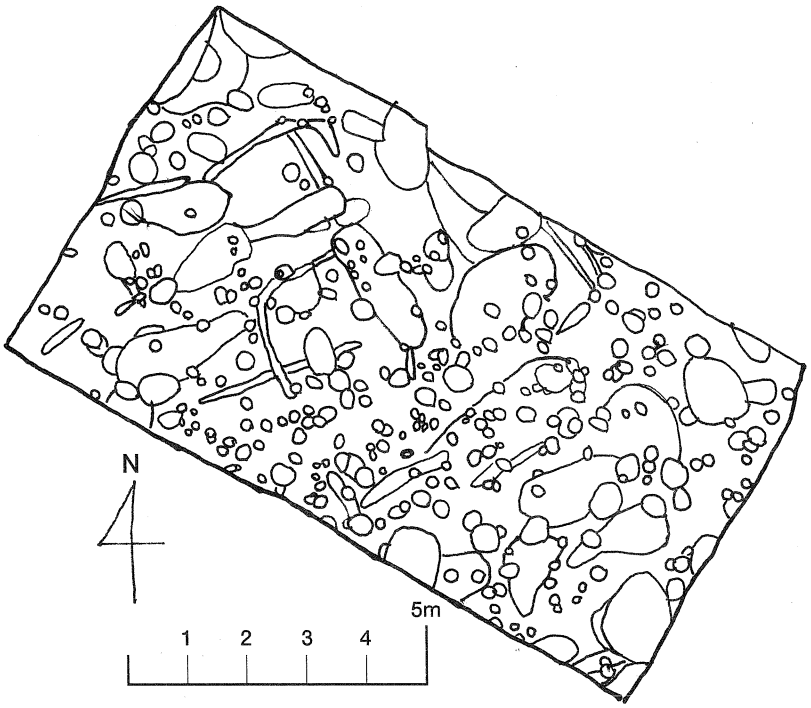

第25図　第Ⅰ調査区（第Ⅲ遺構面）



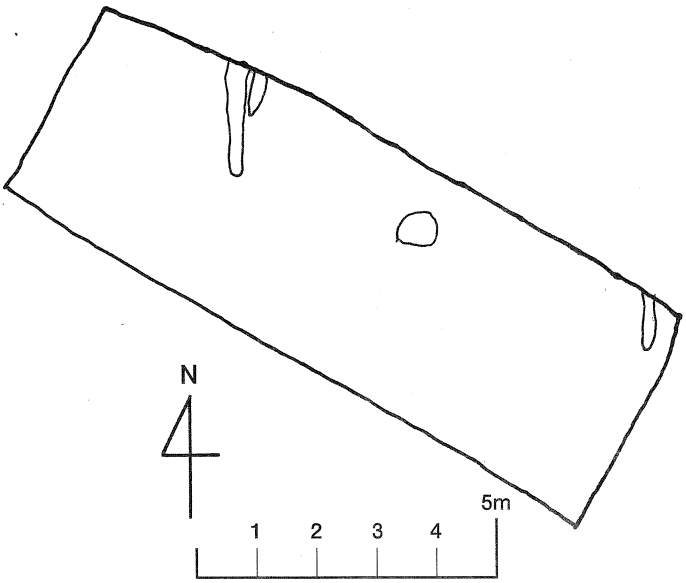

第26図　第Ⅱ調査区（第Ⅰ遺構面）



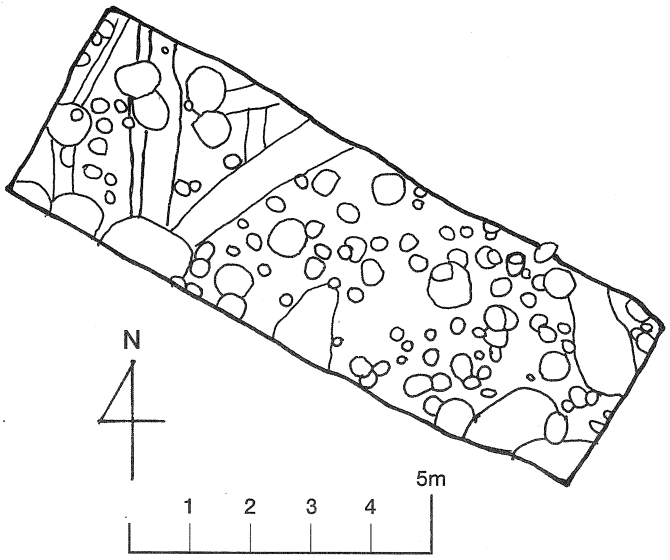

第27図　第Ⅱ調査区（第Ⅱ遺構面）



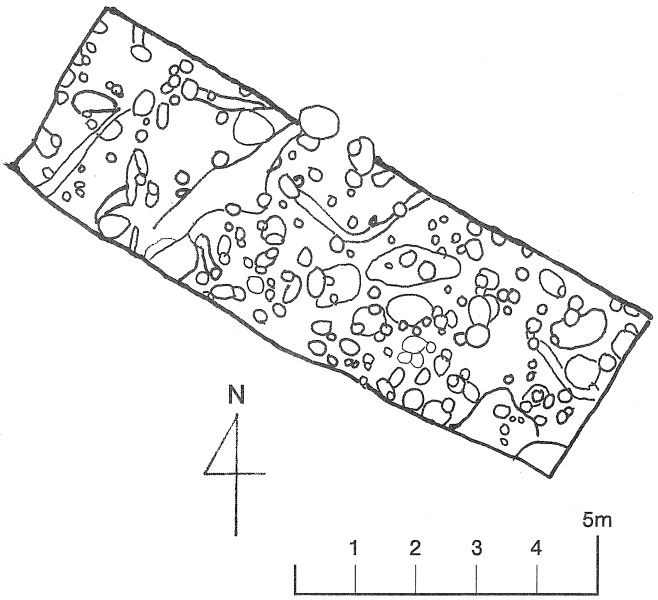

第28図　第Ⅱ調査区（第Ⅲ遺構面）




第29図　第Ⅲ調査区（第Ⅰ遺構面）




第30図　第Ⅲ調査区（第Ⅱ遺構面）




第31図　第Ⅲ調査区（第Ⅲ遺構面）

第32図　第Ⅰ調査区（第Ⅰ遺構面）北から

第33図　第Ⅰ調査区（第Ⅰ遺構面）南から

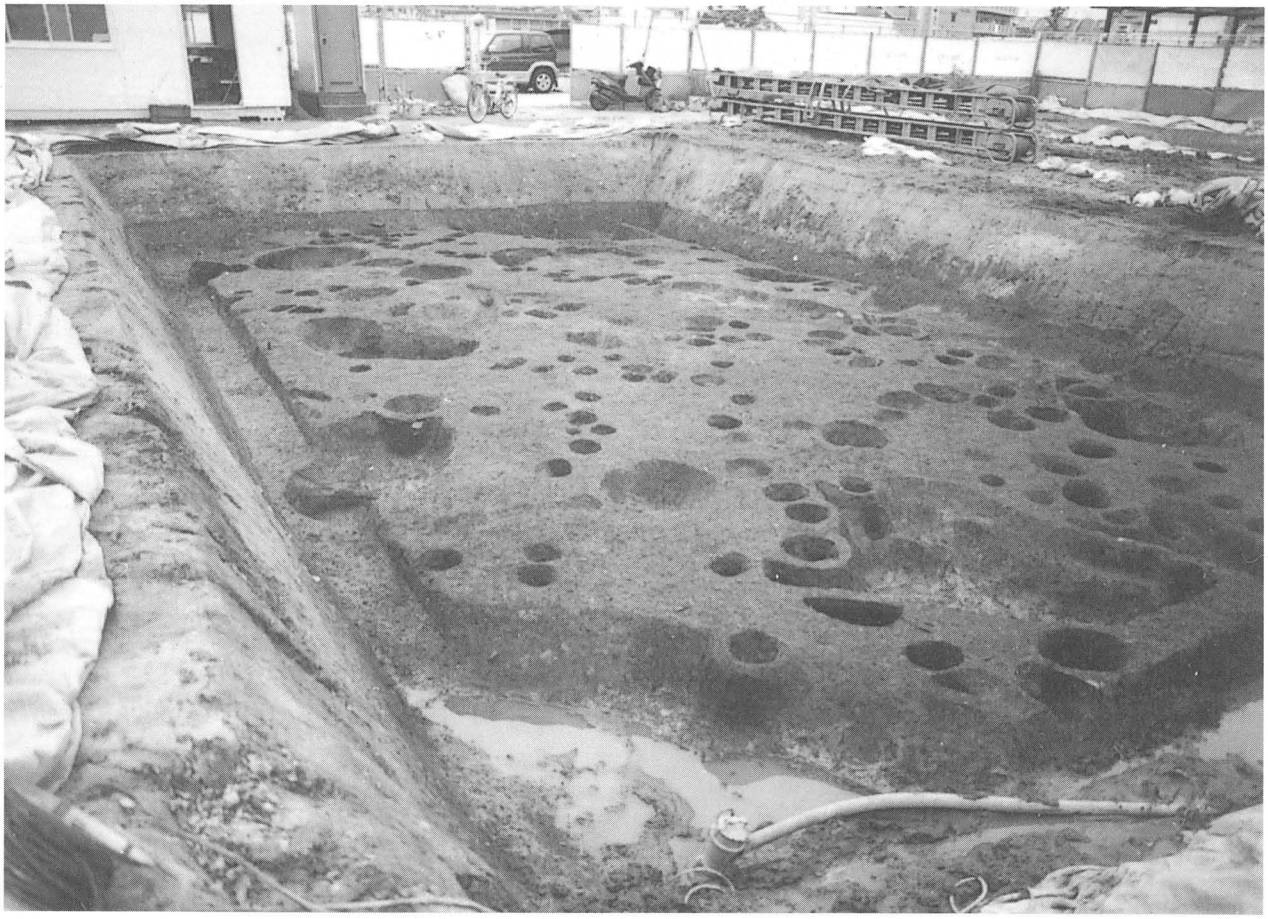
第34図　第Ⅰ調査区（第Ⅱ遺構面）北から

第35図　第Ⅰ調査区（第Ⅱ遺構面）南から

第36図　第Ⅰ調査区（第Ⅲ遺構面）北から

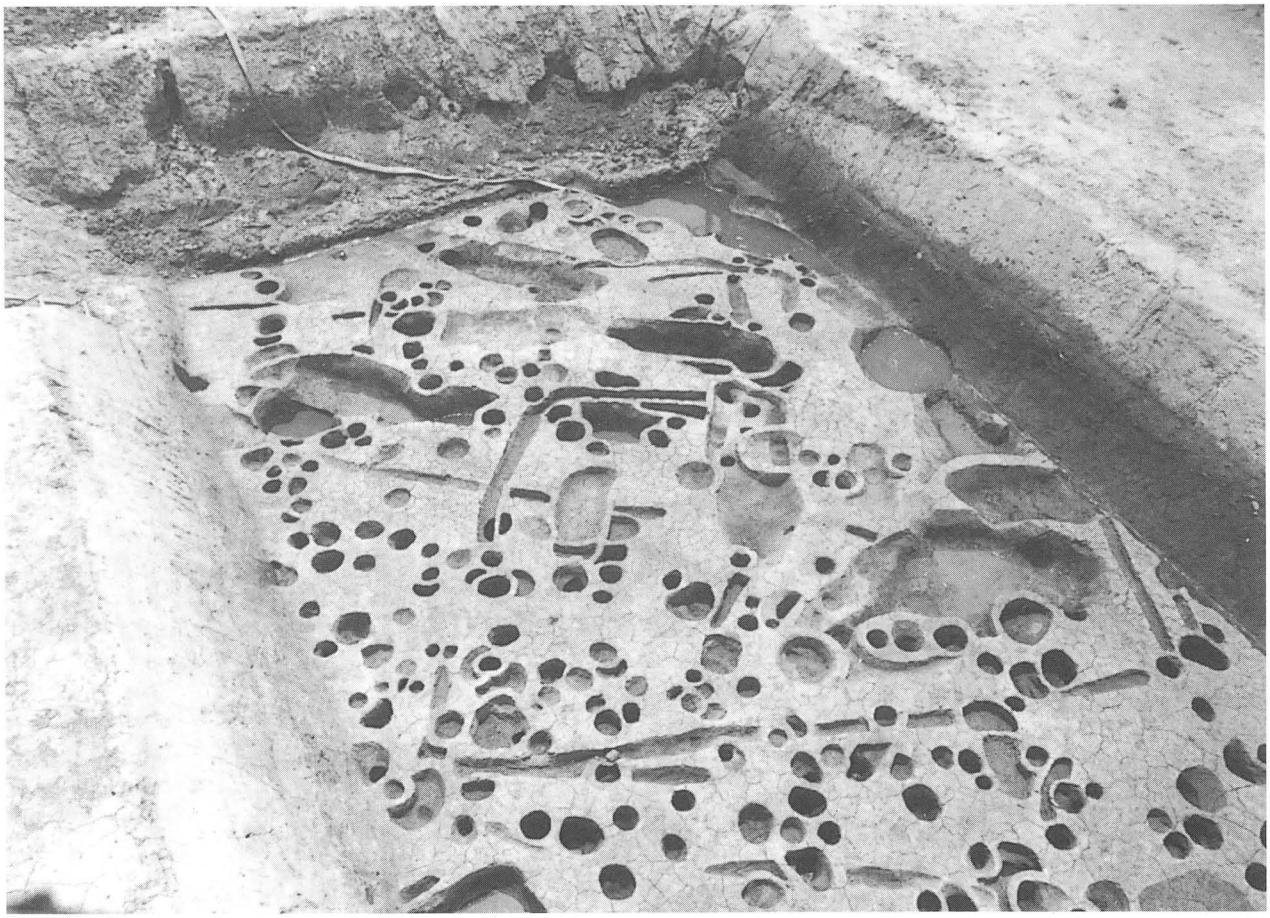
第37図　第Ⅰ調査区（第Ⅲ遺構面）南から

第38図　第Ⅱ調査区（第Ⅰ遺構面）西から

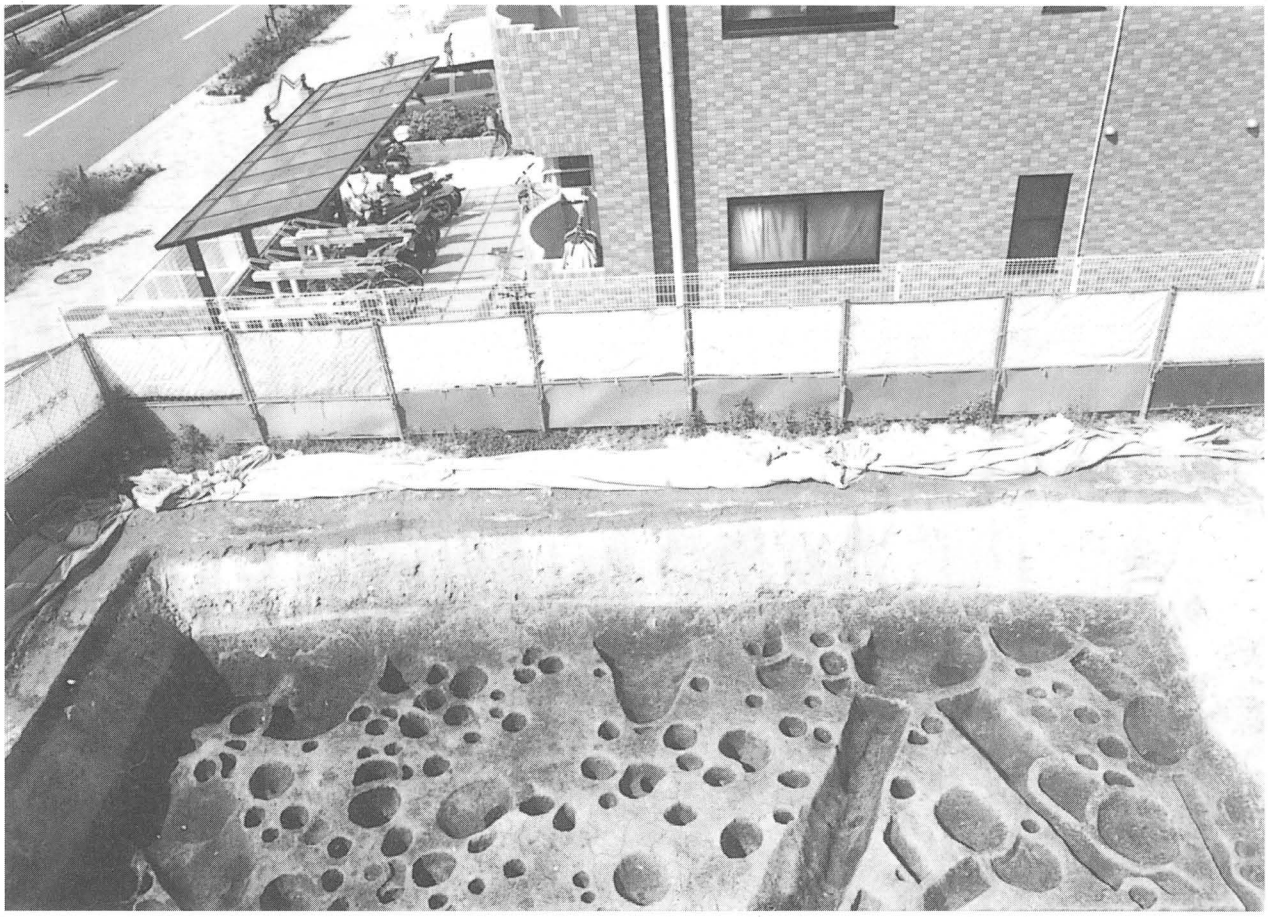


第39図　第Ⅱ調査区（第Ⅱ遺構面）西から

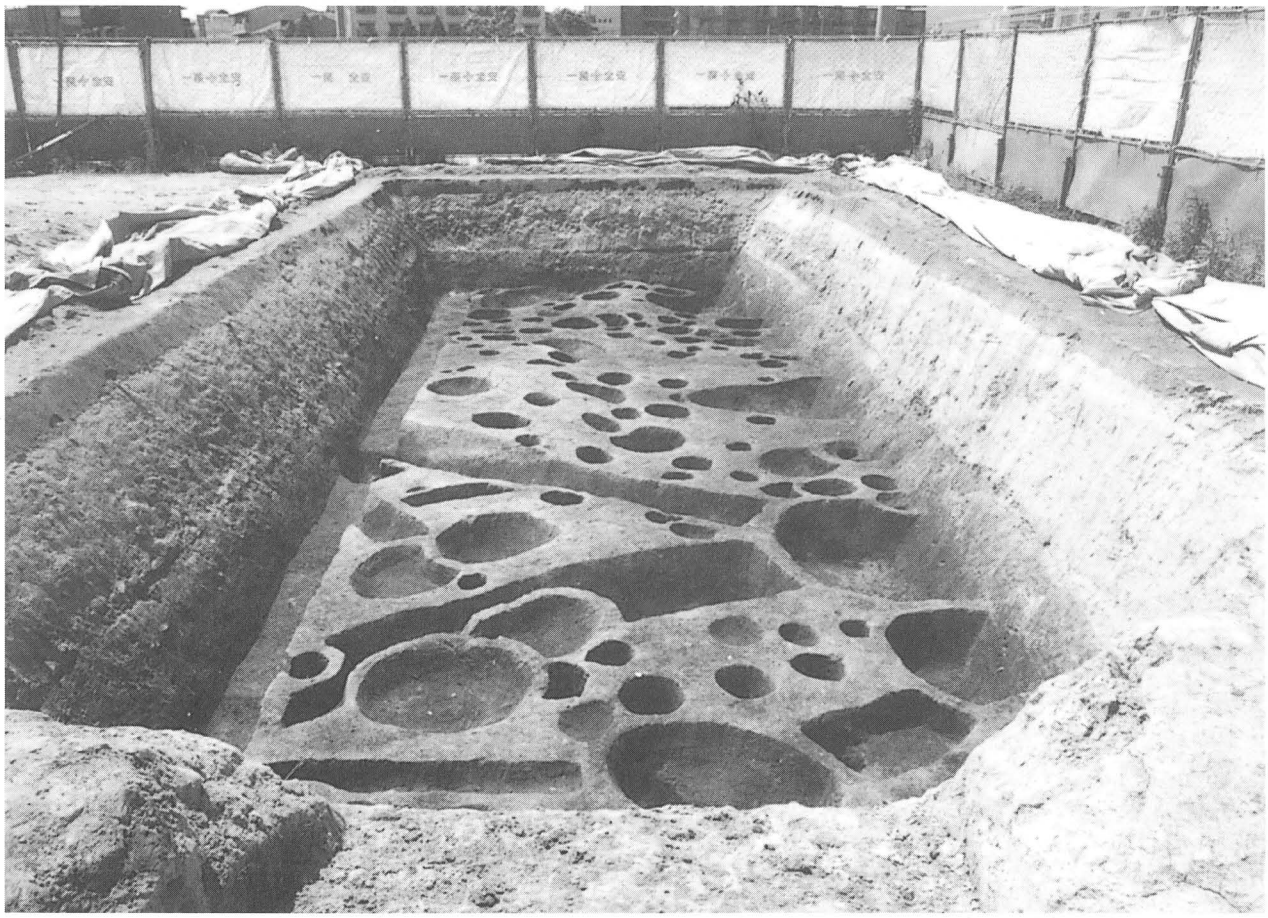
第40図　第Ⅱ調査区（第Ⅲ遺構面）西から



第41図　第Ⅲ調査区（第Ⅰ遺構面）西から



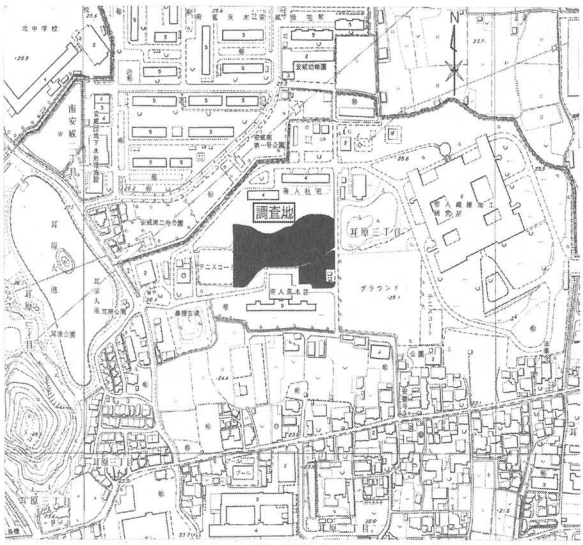
第42図　第Ⅲ調査区（第Ⅱ遺構面）西から



第43図　第Ⅲ調査区（第Ⅲ遺構面）西から

# 耳原遺跡

**所在地**　茨木市耳原三丁目地内
調査原因　宅地造成事業
調査期間　平成16年６月４日～平成16年10月12日
調査面積　7,517㎡
調査担当　宮本　賢治



位置図

**調査結果**

耳原遺跡は、三島平野を南北に流れる安威川によって形成された扇状地の氾濫低地や丘陵部に立地し、東西約350ｍ×南北約300ｍに広がる。段丘部においては地形分類によると下位段丘に分類され、この耳原遺跡ではこれまで縄文時代前半の土器片の採集の例があり、生活の痕跡を示す時期のものとして、縄文時代晩期の深鉢棺を16棺検出している。その後の発掘調査により、弥生時代から古墳時代、近世へとこの地において人々が生活をしていた痕跡が見られ複合遺跡の様相をしている。

周辺での既往の調査としては、同丘陵地の東方約50ｍには古く1935年（昭和10年）に梅原末治氏によって横穴式石室と２基の家型石棺の実測が行われた事で知られる耳原古墳が存在する。その現況は盛土が大きく削平され、南北約20ｍ、東西約16ｍ、高さ約６ｍを測り、円墳を形作っていて、築造年代については石室内部に納められた二つの石棺からみて６世紀末、７世紀前半の二つの説がある。

鼻摺古墳は一辺が30ｍ前後の方墳であり、築造年代は６世紀から７世紀にかけてのものと考えられている。

当該地は両古墳に挟まれた丘陵地と平坦部にあたっている。

丘陵地全体（6,442㎡）を第１調査区として、標高の一番高い点（約29.6ｍ）を境に東側部分（第１調査区東部）と西側部分（第１調査区西部）とした。また、丘陵の南側部分の平坦部（1,075㎡）を第２調査区とした。

この丘陵地について、古地図等を調べると調査区の東にある耳原古墳及び西にある鼻摺古墳を含め、同じ丘陵地として繋がっていた事が分かった。このことから同調査区にも古墳が存在する可能性があることから表土を掘削する前に、この丘陵地の現況の地形測量を実施した。

基本層序

丘陵地部分の第１調査区では、表土（約35㎝）、暗褐色砂質土層（約10㎝）、褐色砂質土層（中世遺物包含層約25㎝）、明褐色砂礫層（地山層）となる。第２調査区は、盛土層（約30㎝）、にぶい黄褐色砂質土層（土師器片を含む約20㎝）、黄褐色砂質土層（土師器片を含む約15㎝）、褐色砂

質土層（土師器片を含む約５㎝）、黒褐色砂質土層（約10㎝の礫を多く含み、須恵器片を含む約15㎝）、暗褐色砂層（地山層）に分けられる。

出土遺物

コンテナに16箱の量であった内訳は、第１調査区東部と南の第２調査区の各遺構からは、主に奈良から鎌倉時代に相当する遺物が出土した。全体的に三足土器が多くみられる。

第１調査区西部からは５世紀中葉の須恵器片を伴った埴輪列が丘陵上の西端付近から２列出土しており、その東側付近で天井石が欠落した６世紀後半のものと思われる小規模の横穴式石室を検出した。特筆すべきものに石室内からは、副葬品として金製環が１点、ガラス小玉が43点の他、須恵器片が出土した。石室の残存状態からみると東側から西側に向かって側壁が落込んでおり、かなり攪乱されたのか石室内から埴輪片も出土している。さらに石室周辺においては、盾形や家形とみられる埴輪片が出土している。

出土遺構

特筆すべきものは第１調査区西部の丘陵地の西端部付近で横穴式石室を検出した。表土を除去する前にいくつかの花崗岩の一部分が既に見えている状況であった。トレンチを入れて慎重に掘り進めていくうちに、先に見えていた花崗岩の一つは一番底にあたる奥壁の一部であり、もう一つは天井石を取り除かれてバランスを崩した東側の側壁が東から西へ落ち込んだ状況の一部であることが分かった。東側の側壁が石室内に合計３石落ち込んでいた。

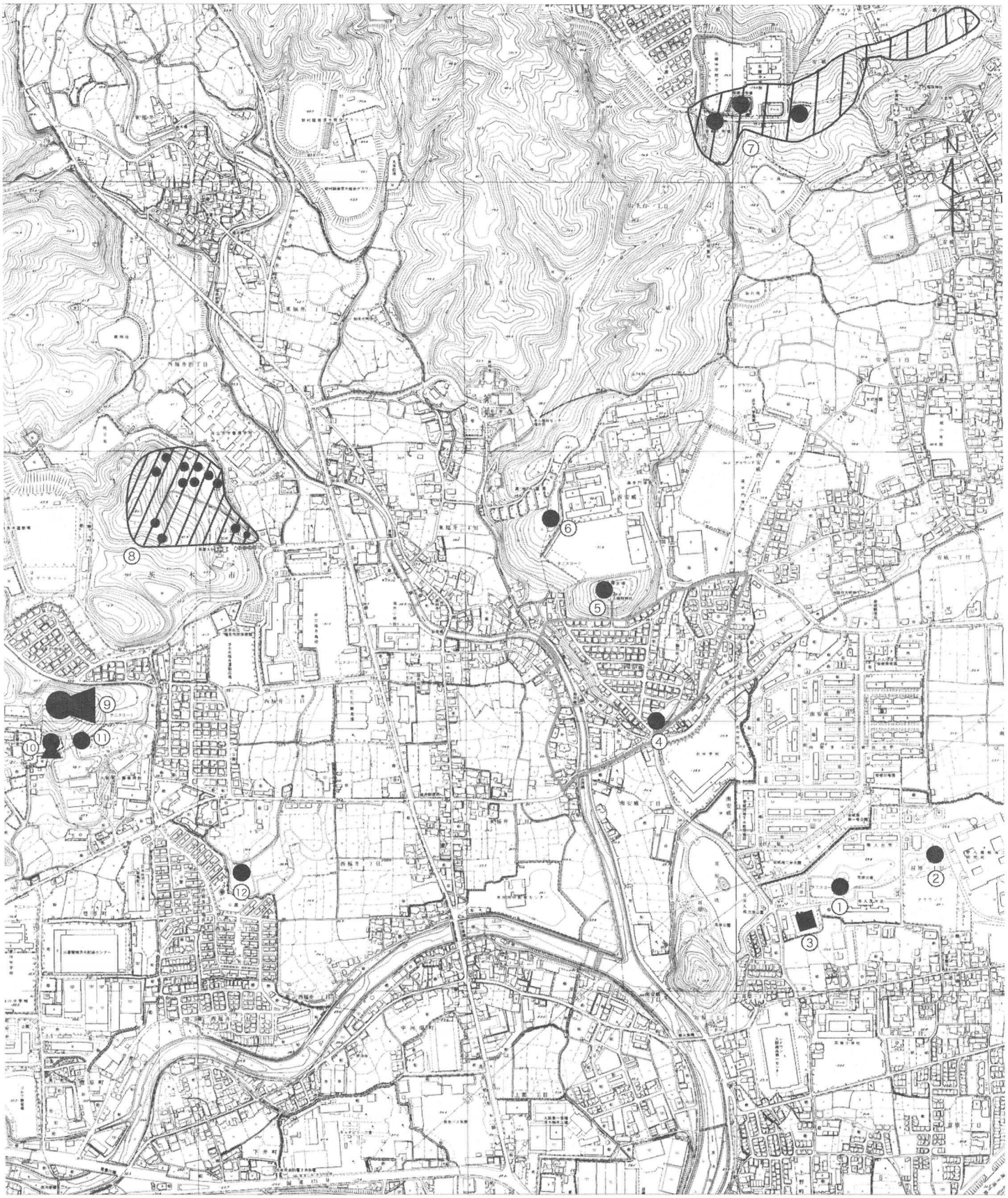
まとめ

１次調査の第１調査区東部及び第２調査区から、平安時代から鎌倉時代を中心とした遺構や遺物を検出し、一部では近世以降の瓦などの遺物も出土している。また、２次調査の第１調査区西部より検出された６世紀後半頃のものと考えられる横穴式石室や、金製環や数多くのガラス玉といった貴重な遺物など新しい発見もあった。特に金製環については、高槻市所在の梶原古墳群内Ｄ－１号墳石室から金製環が出土している。実際に高槻市立埋蔵文化財調査センターで実見したが類似する点がいくつか見られた。このことから、調査区一帯は耳原古墳・鼻摺古墳と合わせて古墳群であったとも考えられる。さらに後世の攪乱などにより確認できなかったが、５世紀代の埴輪列や須恵器の出土は、最初に方墳が造られ、その後同地点に石室を持つ円墳が築かれたと考えられる。

最後に大阪府教育委員会・高槻市教育委員会の方々から多くの貴重なご意見を賜り、記して感謝申しあげます。

参考

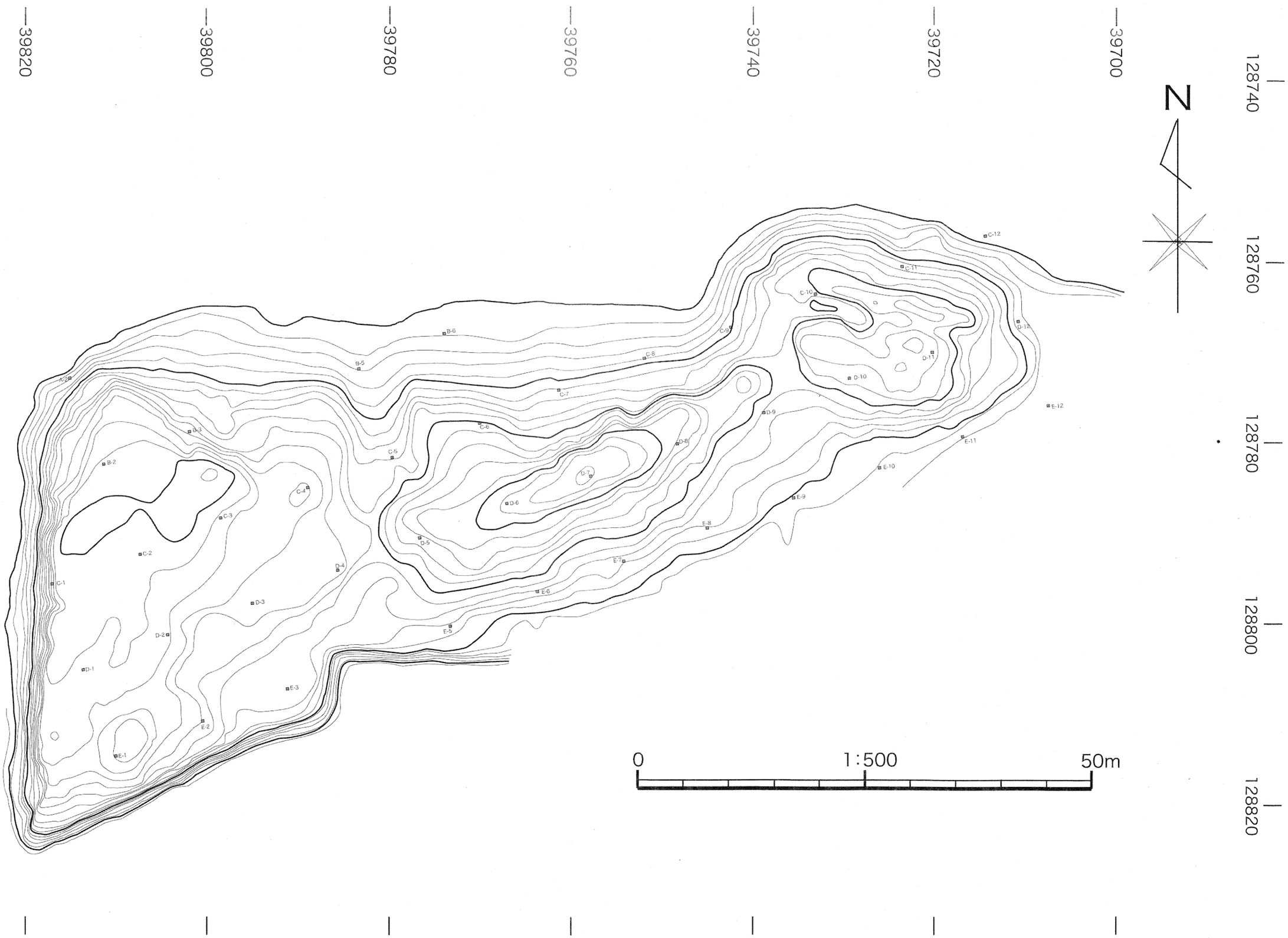
わがまち茨木－古墳編－　1990年３月　茨木市教育委員会
『耳原古墳の研究』　1996年９月　追手門学院大学考古学研究会
『梶原古墳群発掘調査報告書』　1998年３月　名神高速道路内遺跡調査会



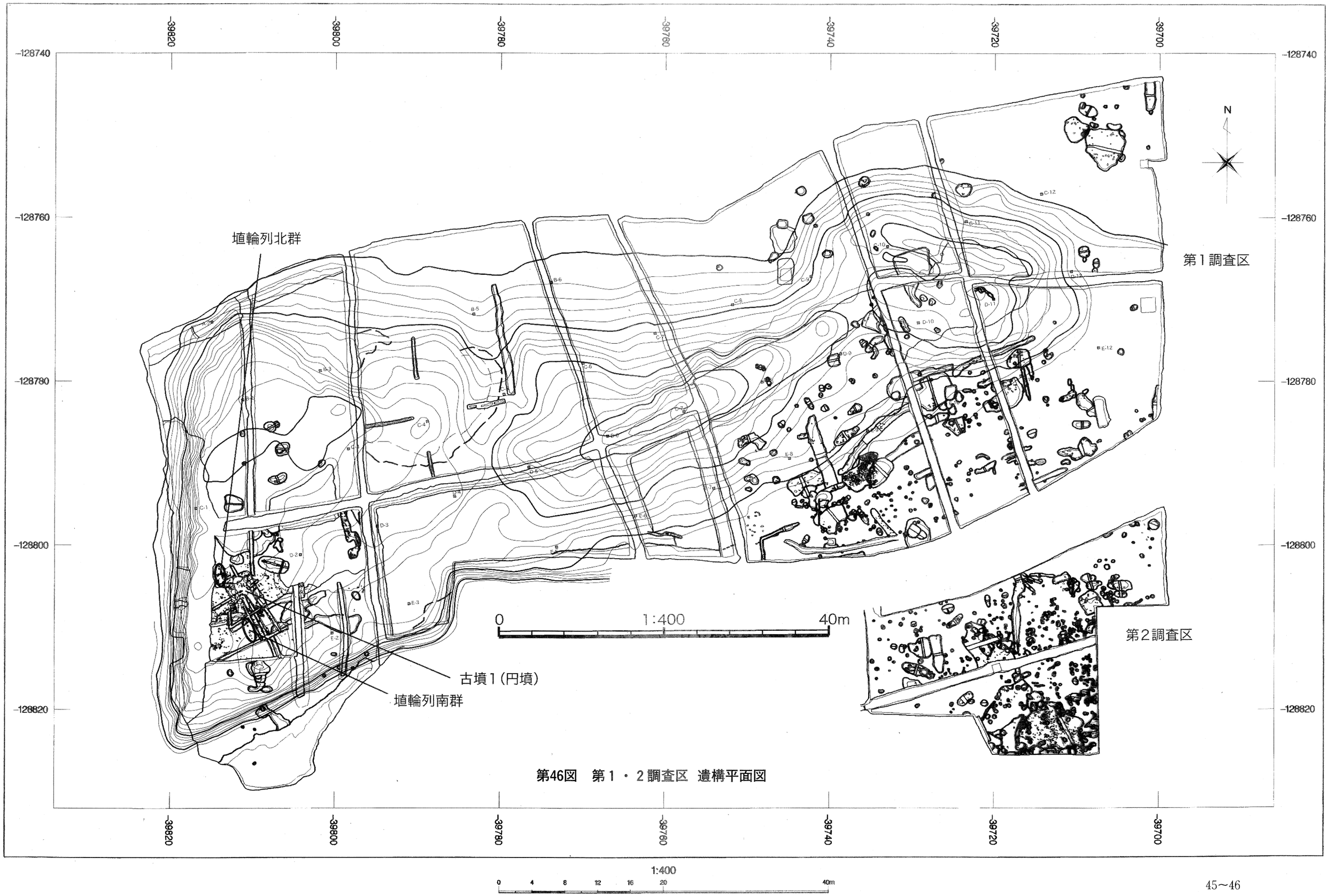

第44図　耳原西古墳周辺遺跡分布図

0　1:10,000　500m

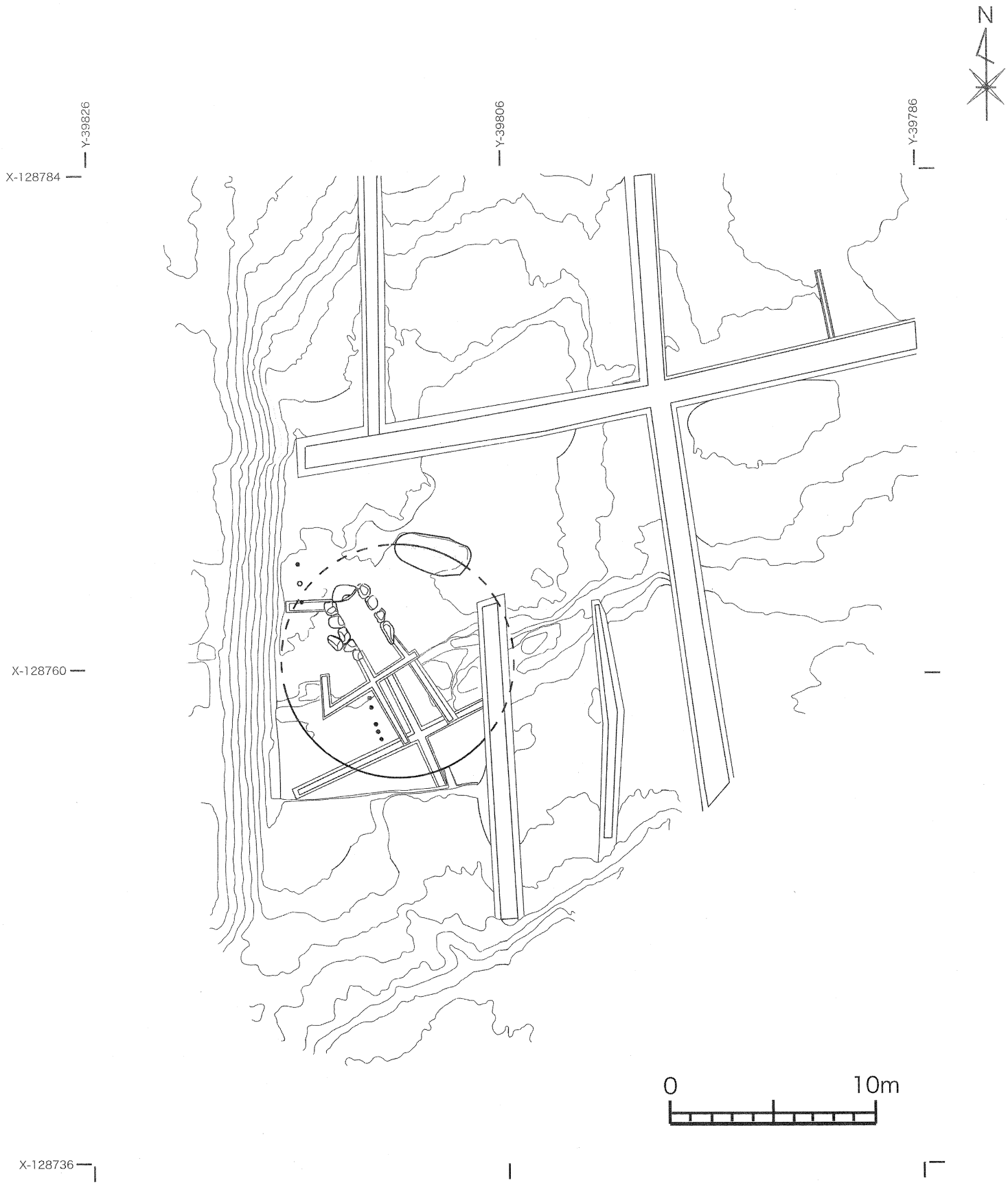
1．耳原西古墳　2．耳原古墳（大阪府史跡指定）　3．鼻摺古墳（耳原方形墳）　4．将軍山古墳
5．将軍塚古墳　6．真龍寺古墳　7．安威古墳群　8．新屋古墳群　9．紫金山古墳（大阪府史跡指定）
10．南塚古墳　11．青松塚古墳　12．海北塚古墳



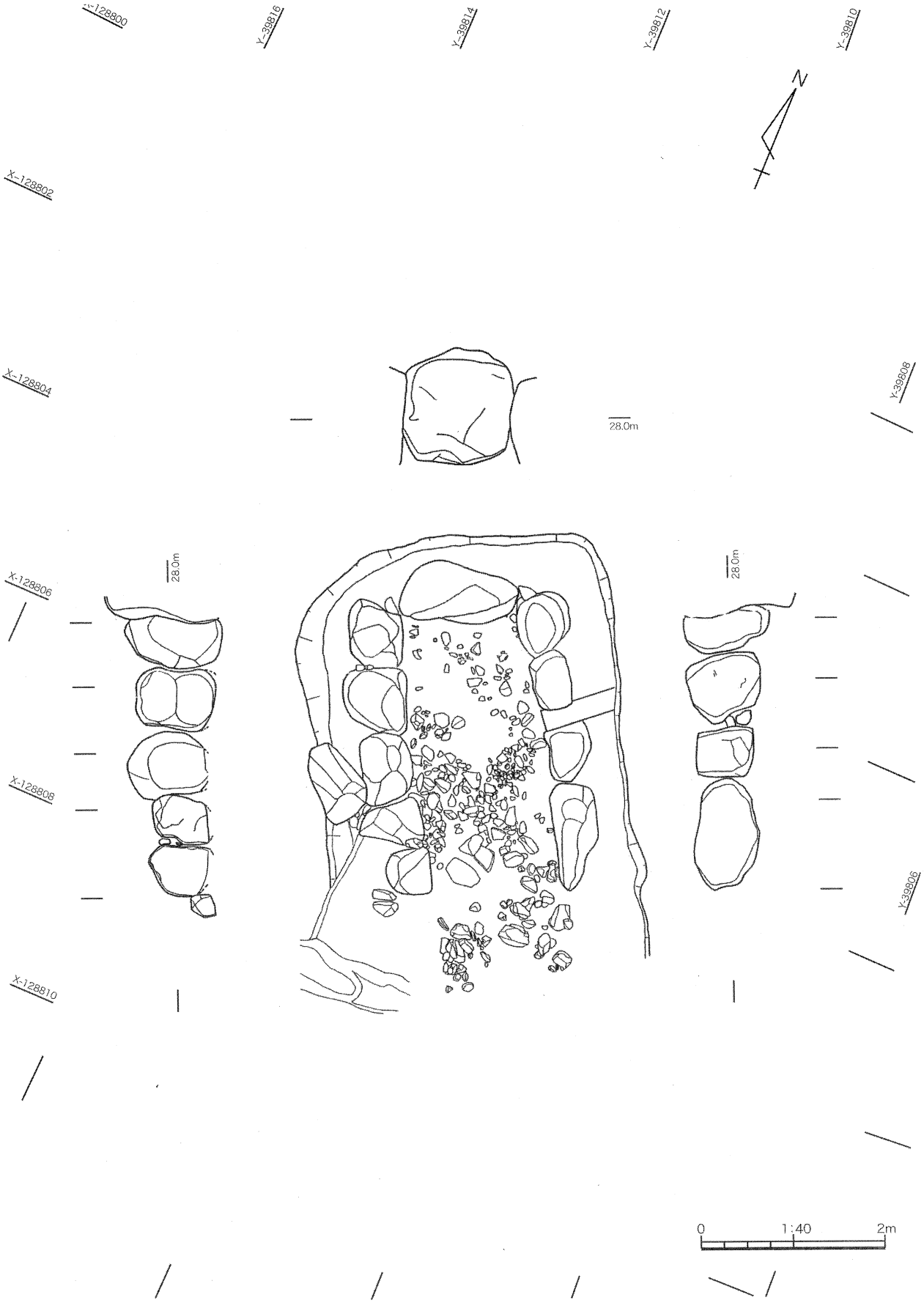

第45図　第１調査区　調査前地形測量図



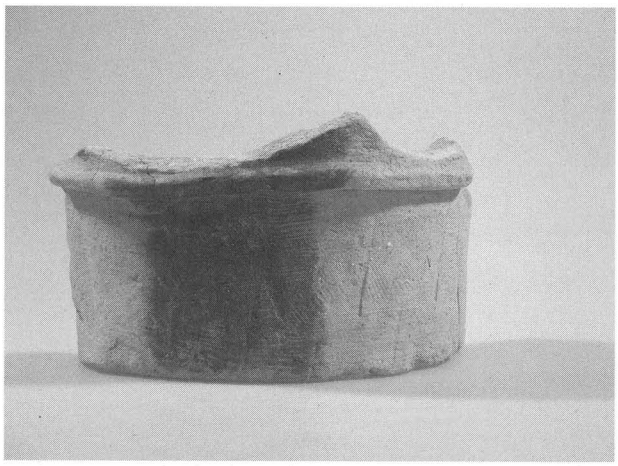

第46図　第１・２調査区　遺構平面図




第47図　耳原西古墳 範囲図

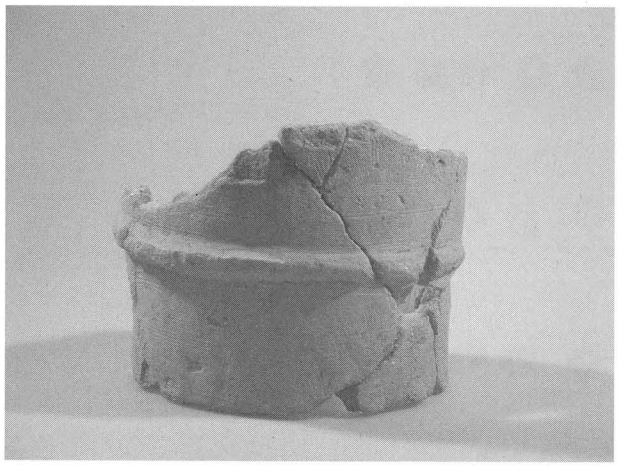



第48図　耳原西古墳 石室実測図



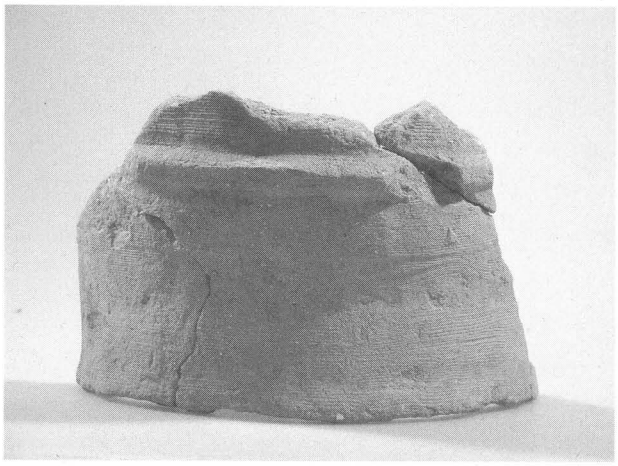
埴輪列北群出土 1号埴輪

埴輪列北群出土 2号埴輪

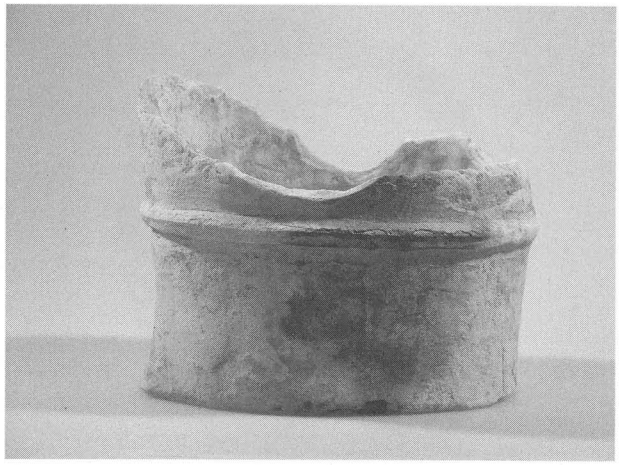


埴輪列南群出土 2号埴輪

埴輪列南群出土 3号埴輪

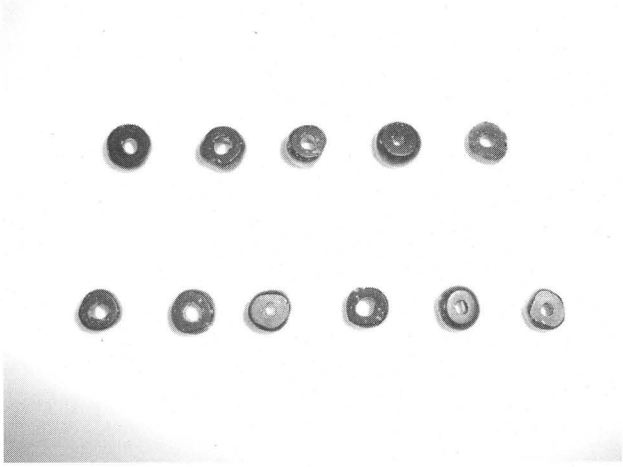


埴輪列南群出土 4号埴輪

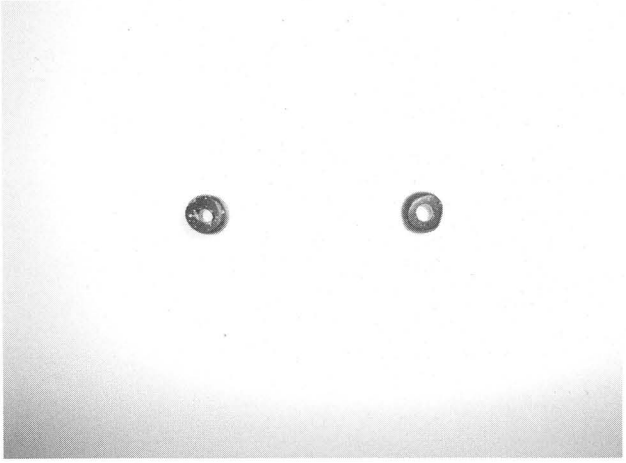


埴輪列南群出土 5号埴輪

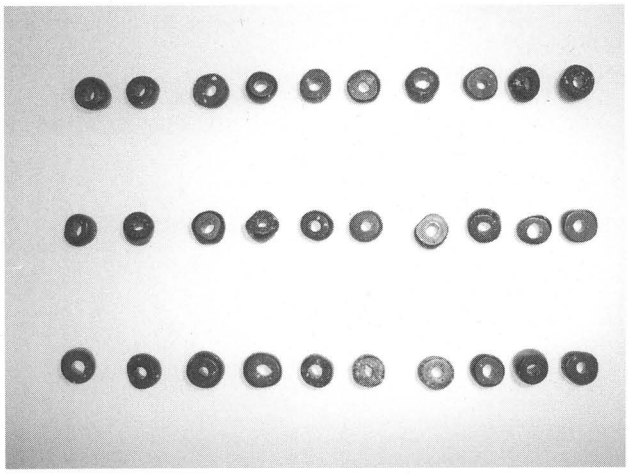
**第49図　耳原西古墳 出土 円筒埴輪**



玄室内上層出土　ガラス小玉

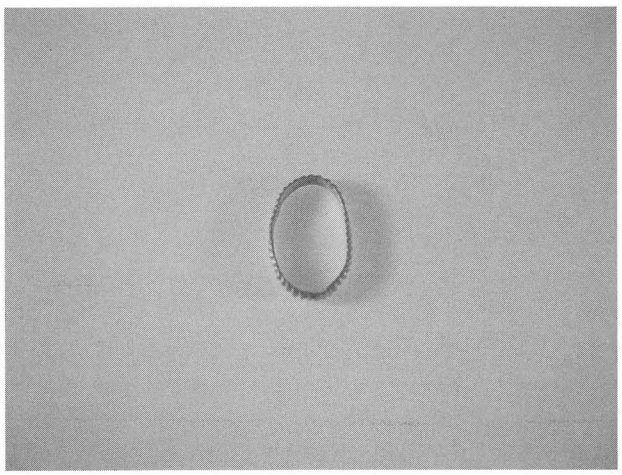


玄室内(羨道付近)最下層出土ガラス小玉



玄室内最下層出土　ガラス小玉

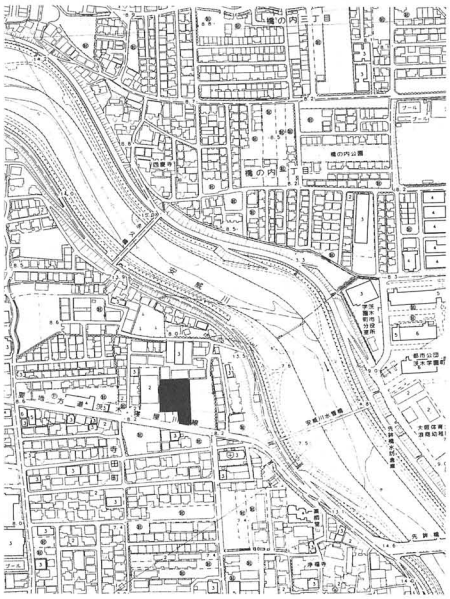
ガラス小玉　腕輪復元状況



玄室内最下層　金製環

**第50図　耳原西古墳 石室玄室内出土 ガラス小玉・金製環**

# 牟礼東遺跡



位置図

**所 在 地**　茨木市寺田町21・22-5・23-4・23-5

**調査原因**　共同住宅建設事業

**調査期間**　平成16年5月21日～平成16年5月27日

**調査面積**　106㎡

**調査担当**　宮脇　薫

**調査結果**

この調査地は安威川の右岸に位置している。共同住宅が建設されることになり埋蔵文化財の確認の試掘調査を実施した結果、建設予定地の西端で中世の遺物を含む包含層が確認され、建物の基礎により埋蔵文化財に支障を来す範囲において調査を実施した。

駐車場跡であり、盛土が約80cmあり、耕土が約30～40cm、無遺物層の青灰色土約25cm、中世の瓦器および土師器等を含む淡青褐色土が約15cm堆積し、青灰色粘土層の上面が遺構面となっている。

検出遺構は、柱穴、溝、落込み状土坑である。柱穴は径が約20～35cmのほぼ円形であり、深さは約15cm である。

柱穴－1は短径が約42cm、深さ約17cmの長円形である。埋土から12～13世紀の瓦器の椀が完形で出土した。

溝－1は調査区の北でほぼ東西に検出された。規模は幅が約58～88cm、深さ約17cmである。溝内から瓦器及び土師器片が出土した。

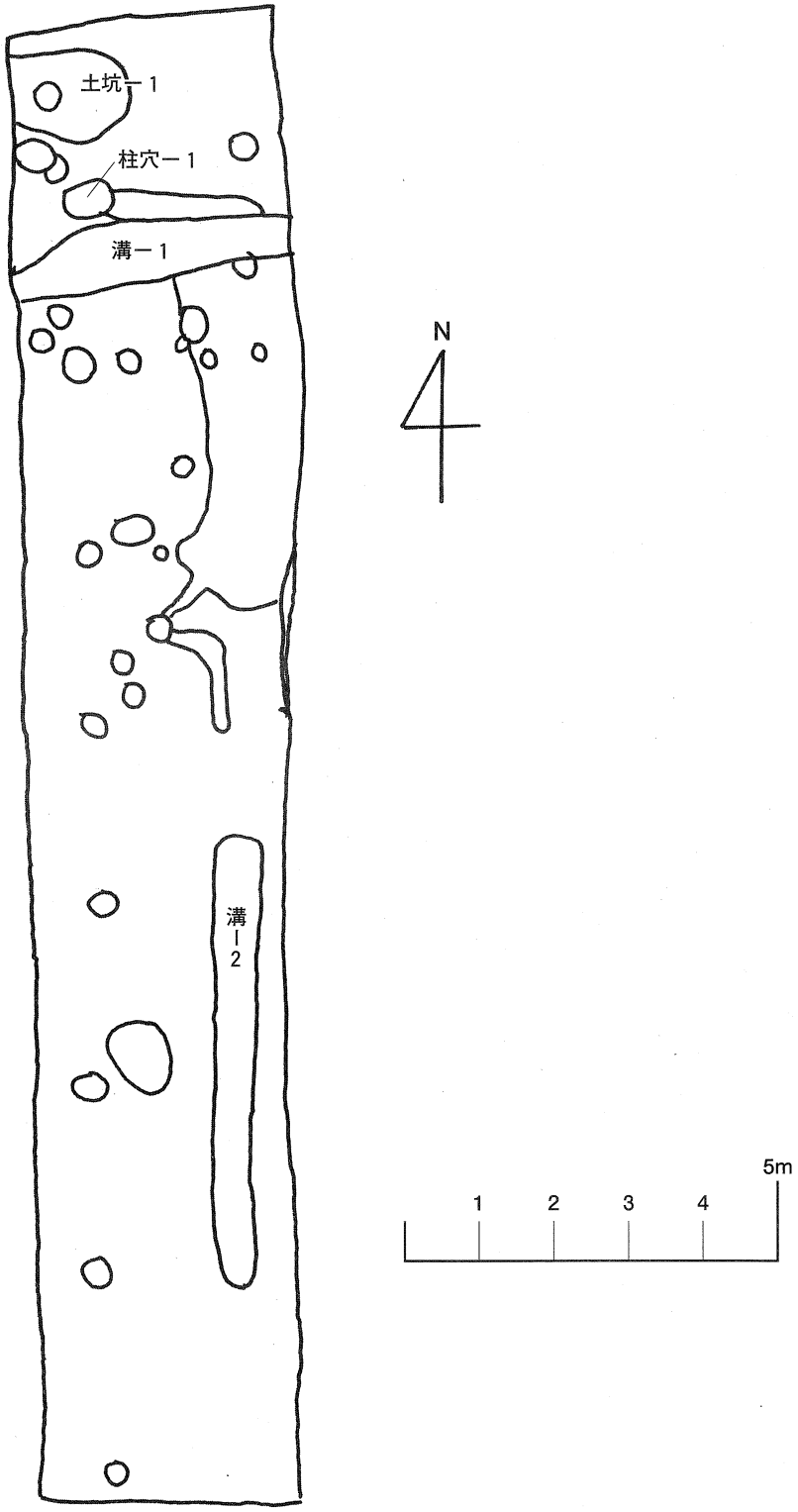
溝－2は調査区の中央から南にかけて南北に途切れた状態で検出された。規模は幅が約55cm、深さ約7cm である。

土坑－1は短径が約1.05m、長径が1.7mの変楕円形で、深さ約12cmの規模である。埋土から瓦器片が出土した。底面は平坦で柱穴1基が検出された。

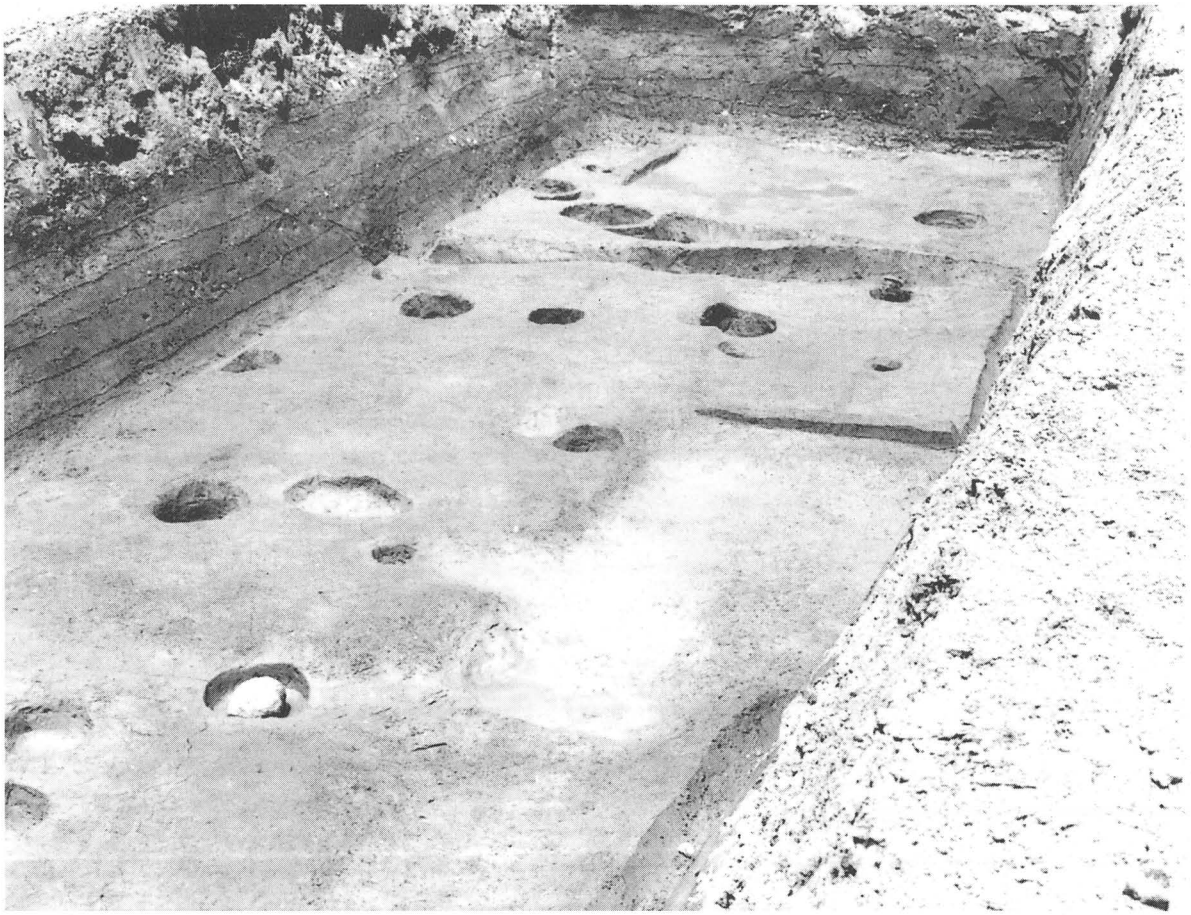
他の柱穴からは遺物は出土しなかった。

安威川の右岸地域においては隣接の牟礼遺跡以外、遺跡は見付かってはいなかったが、当地では明らかに中世の集落跡の存在が認められた。

今後の調査によって、牟礼遺跡との関係も明らかなものになっていくものと考えられる。




第51図　遺構図

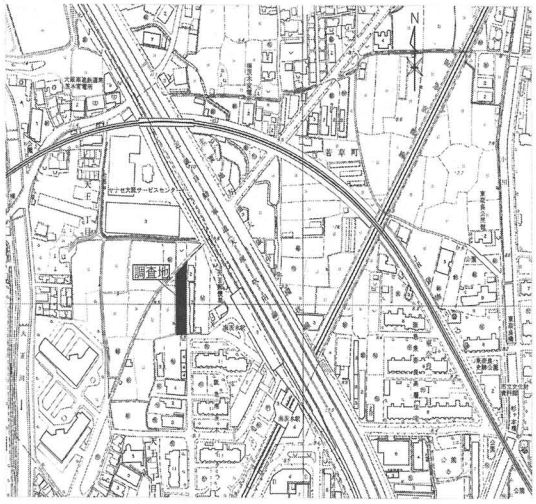


第52図　南から

第53図　北から

# 東奈良遺跡

**所 在 地**　茨木市天王二丁目211-1
**調査原因**　共同住宅建設事業
**調査期間**　平成16年5月24日～平成16年6月3日
**調査面積**　65㎡
**調査担当**　宮本　賢治
**調査結果**



位置図

東奈良遺跡は茨木市南部にあたる東奈良・奈良・沢良宜西・天王・若草町にまたがる標高7ｍ前後の沖積平野に立地する、弥生時代前期から始まる複合遺跡である。

当該地は、弥生時代前期頃に営まれた集落の中心地と考えられる地点からやや南西より300ｍ程の所にある駐車場跡地である。なお、周辺の既往の調査では平成6年度に東方隣接地で柱穴や溝等の遺構が検出している。当地では、中世の生活遺構面（第1遺構面）、弥生時代の生活面（第2遺構面）が調査対象であった。

基本層序

上層より盛土層（約1.1ｍ）、黄灰褐色粘質土層（約30㎝）、黄灰色粘土層（約25㎝ 中世遺物包含層）、灰色砂質土層（約10㎝）、灰色砂層（約5㎝ 弥生時代遺物包含層）、褐色粘質土層（地山層）となっている。

出土遺物

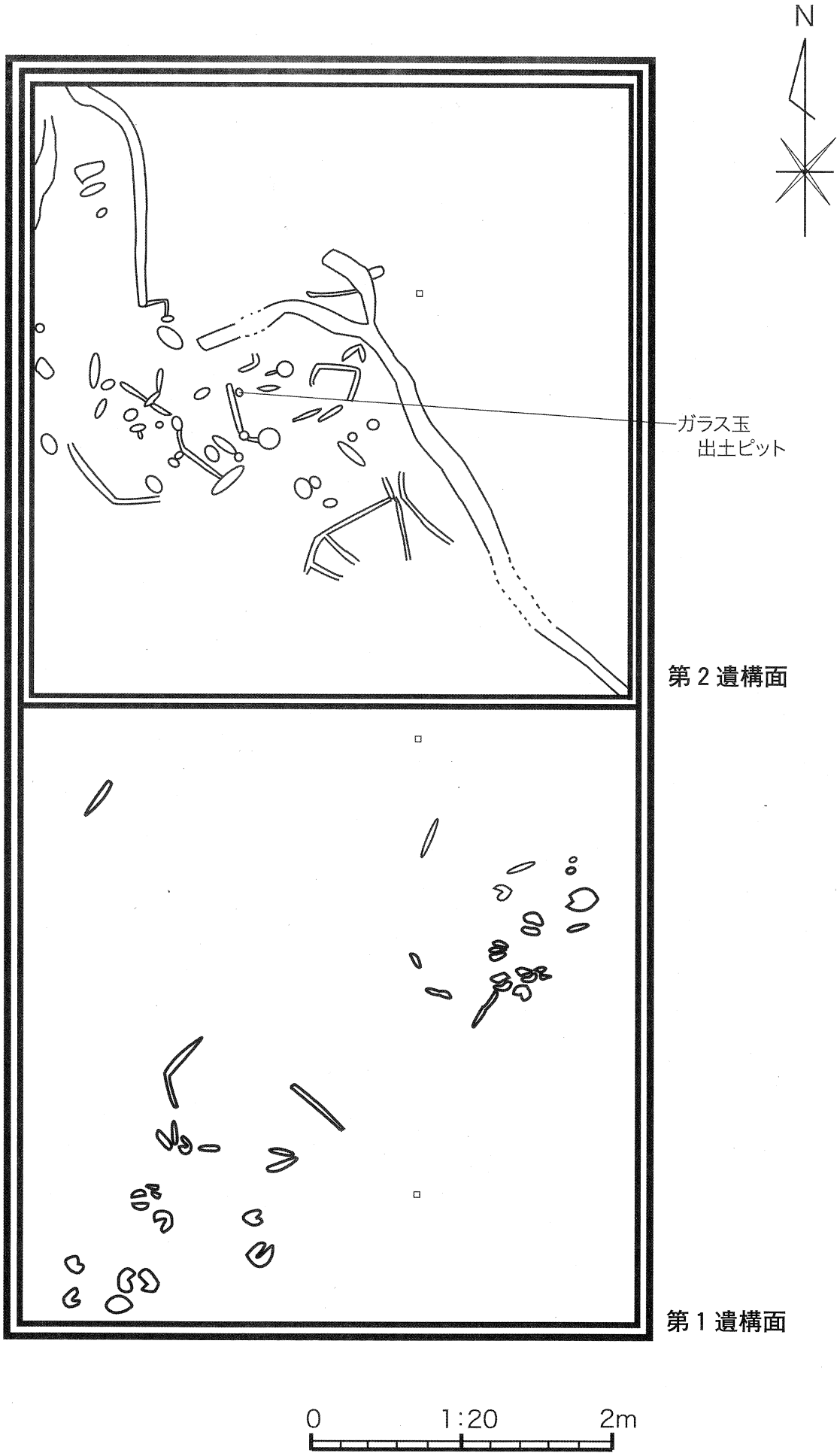
弥生時代の遺構面精査中より弥生土器の破片と水田の可能性のある遺構面のピット内よりガラス玉が出土した。

検出遺構

第1遺構面では中世の生活遺構面において、複数の牛や鳥などの小動物を中心とした足跡遺構を検出した。また、第2遺構面では先ほどにも述べたように水田面の可能性のある遺構を3面検出している。東奈良遺跡の弥生時代における環壕集落の生産遺構の検出例はこれまでになく、当地周辺においてその可能性が出てきている。

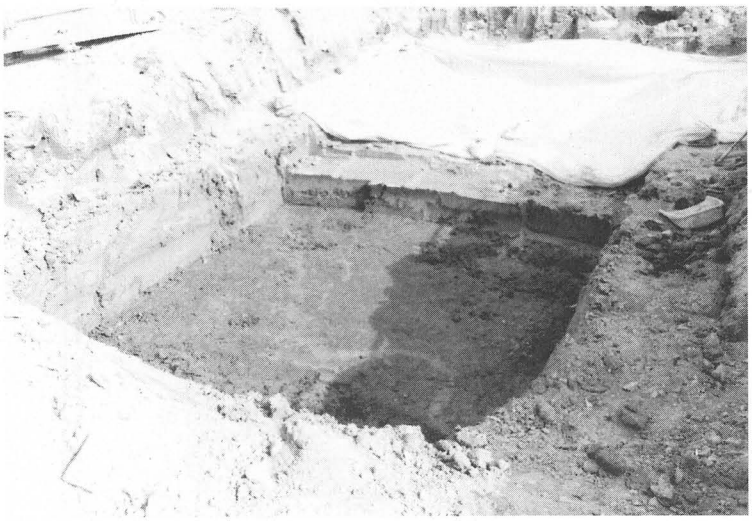
まとめ

第1遺構面から中世の生活の時期の小動物の足跡遺構が検出された。また、第2遺構面での検出状況から水田の畦とみられる区画が施されたような痕跡が断面及びプランから認められ、水田となる可能性が高く、さらなる検討が必要である。これまでの東奈良遺跡の弥生時代に関する調査では、集落を構成するうえで欠かせない3つの要素である、衣食住のうちの食物の生産場所は検出されなかった。今後の周辺地域での調査に期待するものである。




第54図　東奈良遺跡　遺構平面図

第２遺構面検出状況（北から）

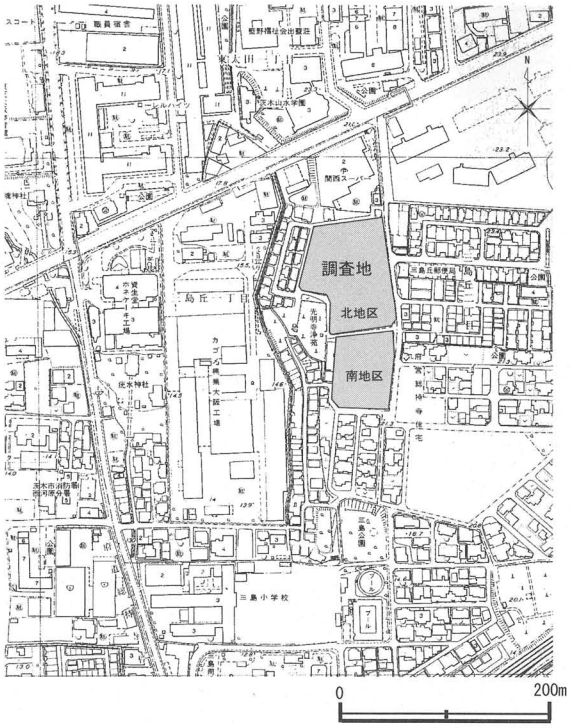


第２遺構面検出状況（北西から）

第２遺面ガラス玉出土状況（北から）

**第55図　東奈良遺跡　遺構検出状況**

# 総持寺遺跡



位置図

**所 在 地**　茨木市三島丘一丁目261－１他

**調査原因**　宅地造成事業

**調査期間**　平成16年５月24日～平成16年６月11日

**調査面積**　1,862㎡

**調査担当**　黒須　靖之

**調査結果**

総持寺遺跡は、北摂山地から派生した下位段丘状の「富田台地」と呼ばれる上に立地している。この富田台地は南東に向かって緩く傾斜しながら大きく舌状に張り出し、東西約２㎞、南北約2.5㎞ の広大な段丘面を形成し、標高は15～30ｍを測る。遺跡の西側には比高５～６ｍの段丘崖を介して安威川が造りだした沖積地が広がり、東側は女瀬川・芥川が開析し、南側には沖積平野が広がる。総持寺遺跡はこの富田台地の南西部分にあたる。

この総持寺遺跡が立地する富田台地上の遺跡を見ると、台地の奥部に古墳時代中期の全長226ｍを測る太田茶臼山古墳（継体天皇陵）や高槻市側に後期の全長190ｍを測る今城塚古墳が築造されている。そしてこれら大古墳に主として埴輪を供給した新池埴輪製作遺跡が存在する。

総持寺遺跡は弥生時代から中世に至る複合遺跡として周知されており、これまでに大阪府教育委員会および（財）大阪府文化財センター（以後、府教委およびセンターと呼称する）により大規模な発掘調査が近年実施されている。大阪府営茨木三島丘住宅の建替えに伴い、1994～2001年（平成６～13年）にかけて府教委が約23,500㎡ に及ぶ発掘調査を実施した。また、遺跡の北辺部を住宅・都市整備公団（現 独立行政法人都市再生機構）の住宅建設に伴い、センターが1994～1997年（平成６～９年）にかけて約25,500㎡ の発掘調査を実施している。また、府営住宅整備関連に伴う道路拡幅及び新設にかかる調査を2002年度（平成14年度）に約2,037㎡、2003年度（平成15年度）に約1,076㎡をセンターが発掘調査をしており、当該地周辺では既にこれまで52,200㎡にも及ぶ発掘調査が実施されている。

これまでの府教委及びセンターの発掘調査によって以下のことが判明している。総持寺遺跡では弥生時代後期後半の土器棺墓・周溝墓といった墓域が、段丘崖に接する尾根状地形の南先端部分に築かれる。土器棺墓が先行し、周溝墓に時期差はないと想定されている。古墳時代になると古墳時代前期に尾根筋に竪穴住居を主体とする集落が営まれ、中期には尾根筋の段丘崖を望む付近に総持寺古墳群が展開する。43基中１基の円墳を除いて総て方墳であった。周辺からわずかに高い尾根上地形に沿って北に広がるものと推定され、規模は小さいものが１辺４～５ｍ、大きい

もので１辺約15ｍほどである。主体部は削平されており、木棺直葬と想定されている。出土した埴輪のうち、形象埴輪の多くと円筒埴輪の一部が高槻市新池埴輪製作遺跡産と分析されている。古墳時代後期にも竪穴住居主体の集落が東西の谷筋に営まれる。

古代になると７世紀前葉～中葉（飛鳥時代）にも同様の選地で古墳時代後期に引き続き竪穴住居が営まれる。７世紀中頃に大型の掘立柱建物跡を構成する一辺１ｍを超える方形の柱穴堀方が検出される。遺構のまとまりを把握できるとしているのは、７世紀中頃の柱穴より一回り小さい方形堀方の柱穴群で、31棟の掘立柱建物を復元し、８世紀後半から９世紀にかけて存続したものと考えられる、としている。（府教委報告書より）

今回の調査区に隣接するセンター02－１調査区では弥生時代後期、７～10世紀、12世紀後葉～13世紀の遺構が検出されている。弥生時代後期の遺構は東西の溝（66）１条のみで、７世紀代の遺構は７世紀前葉～中葉頃と推定される竪穴住居７棟を調査区南端部で検出している。７～８世紀代の遺構は復元された13棟の掘立柱建物や５列の柱列を主として溝（25）落込み（410）等があり調査区南部で確認されている。10世紀代の遺構は調査区南部の小規模なピット群で、12世紀後葉～13世紀の遺構は柵や溝、柱穴等を調査区北部や北端部で検出したとされている。出土遺物は10箱程で弥生時代後期の広口壺・高坏・無頸壺等や古墳時代後期（６世紀）は遺構・出土遺物はなく包含層から須恵器坏が出土している。７～８世紀代の遺物は調査区全域で普遍的に認められ出土遺物の大半を占めているとされる。ほかに古代後期～中世のものは緑釉陶器、黒色土器椀、土師器皿、瓦器椀、白磁碗等が出土している。また、10世紀中・後期の「て」字状口縁皿、12～13世紀頃の土師器皿、和泉型瓦器碗等が出土している。（センター報告書より）

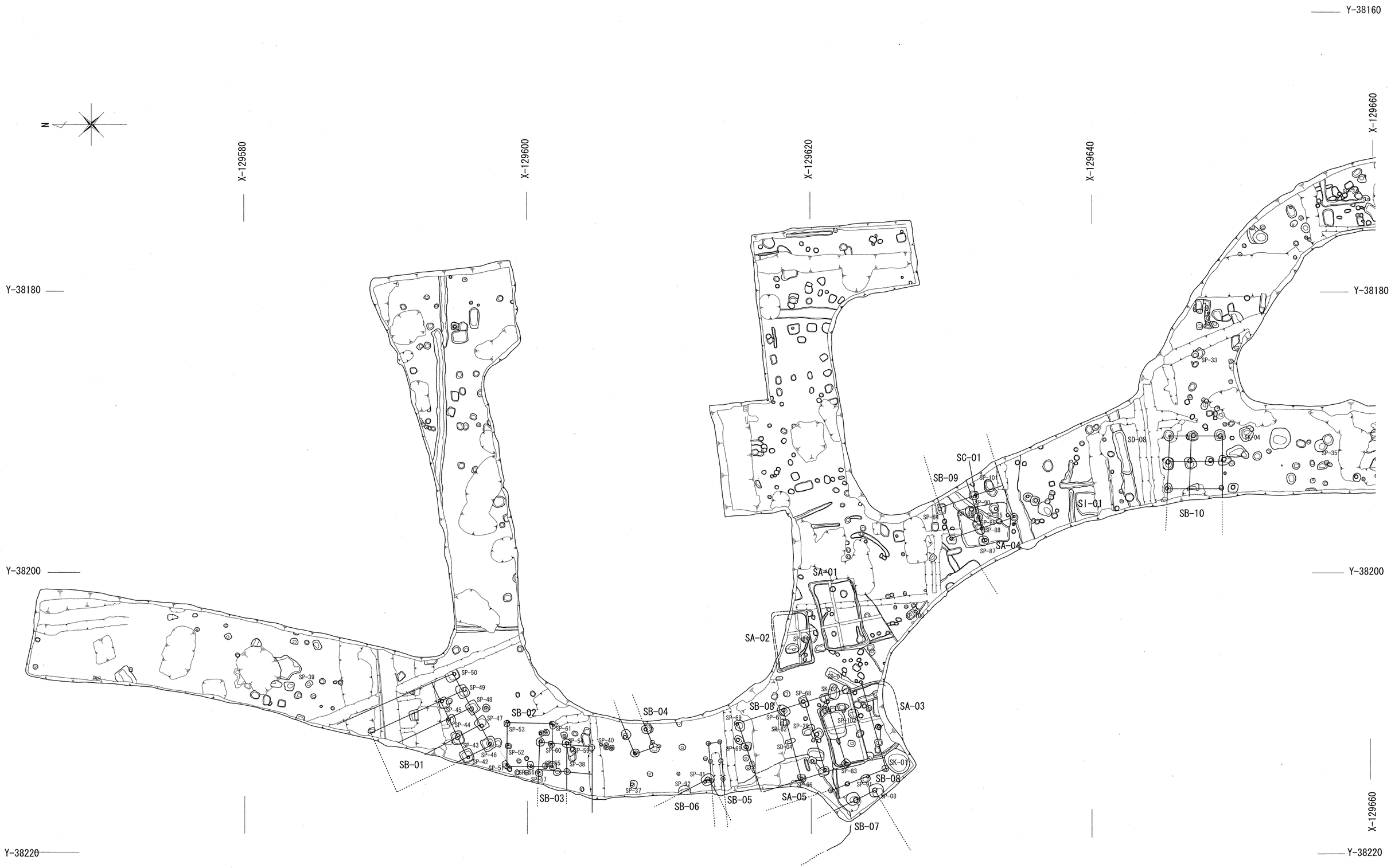
**調査概要**

今回の調査は2002年度（平成14年度西部02－１）にセンターが実施した道路調査部分に囲まれた区域内の開発に先立ち計画道路及び防火水槽部分の発掘調査を実施した。東西に延びる道路を境に調査区を北地区と南地区に分けている。調査の結果、検出された遺構は掘立柱建物21棟（推定復元）と柱列２条、竪穴住居５棟、溝９条、土坑11基、柱穴群である。また、出土遺物はコンテナ２箱分で須恵器・土師器が大半を占める。検出された遺構の主な時代は飛鳥時代（７世紀）から奈良時代（８世紀）の掘立柱建物や竪穴住居、溝、土坑といった集落遺構が中心で、時代を隔てて12世紀後葉～13世紀の中世遺構がある。

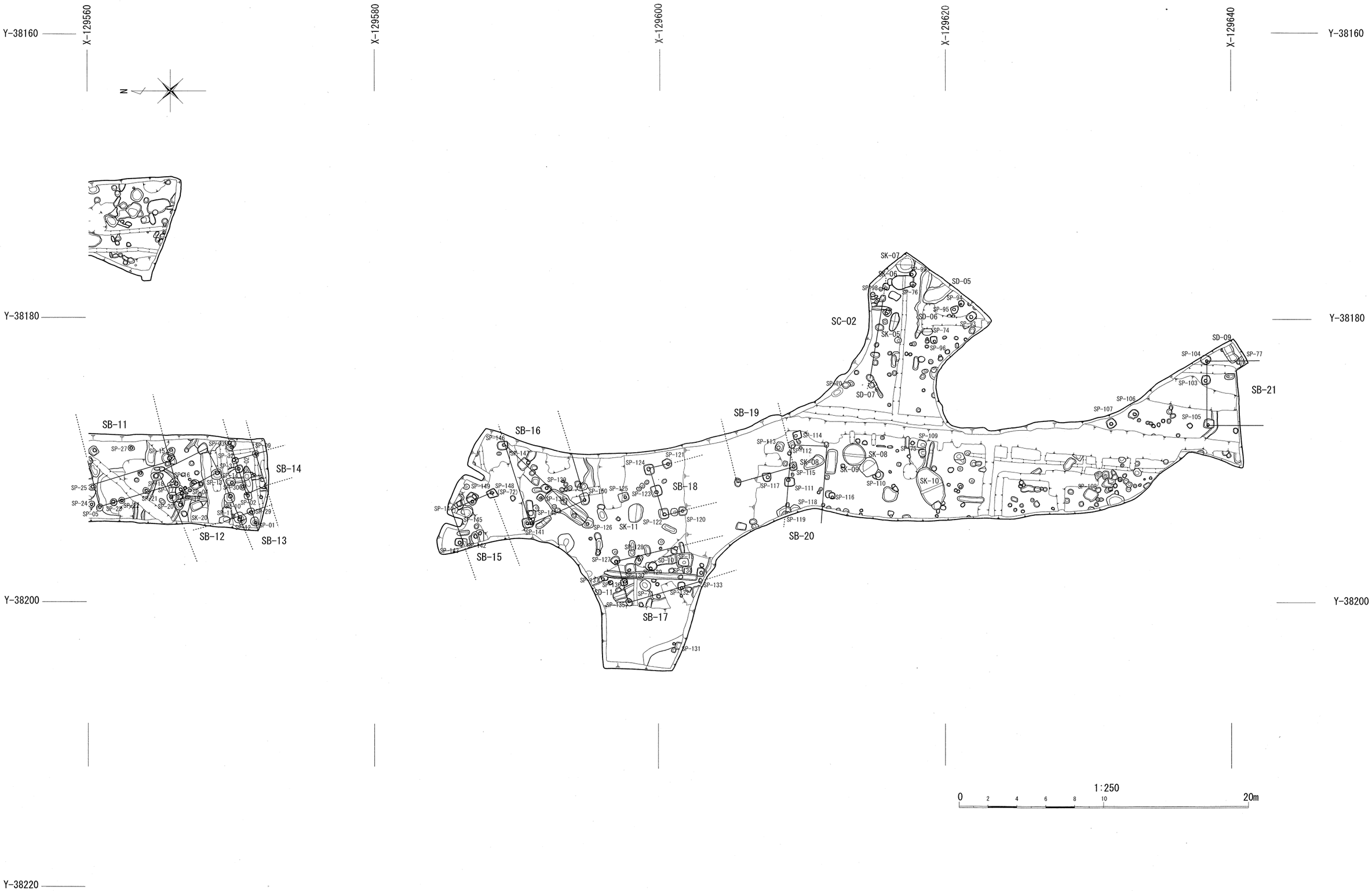
**基本層序**

上から表土10～40㎝、黄色シルト５～15㎝（遺物包含層）、暗褐色土10～15㎝（遺物包含層）、地山（黄褐色砂礫混土）である。調査区の北端から南端まで南北に約180ｍの距離があるため、その基本層序は一様ではなく、北調査区においては北部から中央部にかけて遺物包含層は見られず、表土直下が地山面である。また、北調査区南部から南調査区中央部にかけて良好に遺物包含層が残存している。調査区は北から南へ向かって地形が緩やかに傾斜しており、標高は北調査区ではＴ.Ｐ.22.2～21.4ｍで、南調査区ではＴ.Ｐ.21.3～20.9ｍで遺構が検出される。全体では比高差1.3ｍを測る。

第56図　総持寺遺跡　周辺調査全体図




第57図　総持寺遺跡 調査区北地区全体図

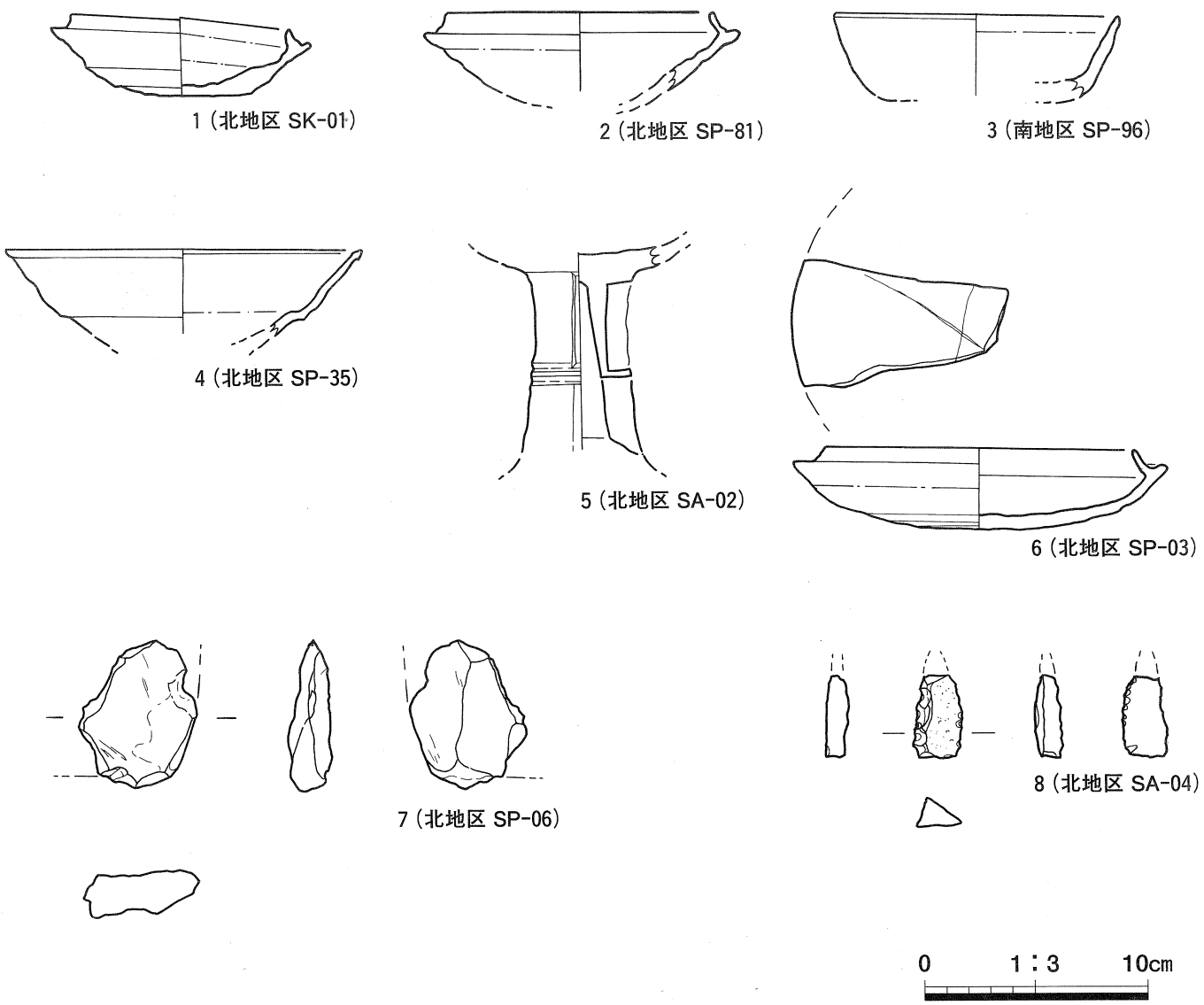



第58図　総持寺遺跡 南地区全体図

**検出遺構**（第57・58図）

遺構は前述のとおり、掘立柱建物や竪穴住居を主とした構成の集落跡が調査区全域に展開するが、北調査区の北端及び東側においては遺構数が少ない上に検出遺構も浅いものが多数を占める。遺物包含層の堆積もなく、表土直下が地山面であることから推察すると、削平された可能性が高い。

竪穴住居は北調査区中央部のみで検出されており、５棟を数えいずれも平面形は隅丸方形・長方形を呈する。竪穴住居（ＳＡ）１及び２が長方形で東西方向に長い。長軸方向はＳＡ１～３がN76°Ｅで主軸を同じにする。ＳＡ４はＮ９°Ｗ、ＳＡ５はN62°Ｅである。規模はＳＡ１が




**第59図　総持寺遺跡 出土遺物**

4.0×2.7m、ＳＡ２が5.1×3.1m、ＳＡ３が5.3×5.0～m、ＳＡ４が3.6×2.8m、ＳＡ５が6.0～×5.8～mを測り、ＳＡ５がやや大型である。重複関係はいずれの竪穴住居も建物跡（ＳＢ）を構成する柱穴に切られることから建物に先行するようである。検出状況は表土直下のため掘込面は不明である。埋土は自然堆積で概ね１層～２層の堆積である。A層は暗褐色土主体、B層は暗褐色土に黄褐色シルトを含む。床面はほぼ平坦でシルト上面を直接床面とし床構築土は認められない。ＳＡ３のみ４本の支柱穴が認められる。

出土遺物はいずれの竪穴住居からも甕や坏等の須恵器や土師器が出土しているが、削平され浅いためか遺物は少ない。時期のわかるものとしてはＳＡ２から須恵器高坏脚部（第59図）やＳＡ３の須恵器坏身・蓋があり、７世紀前葉（ＴＫ209）頃と思われる。また、ＳＡ３の南西隅に隣接して土坑（ＳＫ１）があり、長軸1.8m・短軸1.6mの楕円形を呈し、深さは0.4mで埋土は２層に大別できる。A層は黒褐色土に灰黄褐色シルトを多量に含む。B層は暗褐色土に黄褐色シルトを含む。出土遺物は須恵器坏・蓋・身（第59図）、埴輪片等があり、時期は竪穴住居と同時期と考えられる。

建物跡（ＳＢ）は復元できるもので21棟程度を数えるが、建物の平面形・主軸方向や柱間、柱の掘方形状及び大きさ、埋土等から概ね最低８つの建物群に分類でき、時期・時間的な差が考えられる。

中でも一番古いと考えられるのはＳＢ11である。平面形態は３間×２間で主軸はN70°Ｅである。建物規模は5.5×3.1m程で柱の掘方は長軸0.5m、短軸0.4mで柱痕跡は直径0.2m、柱の深さは0.35～0.5mを測る。この建物を構成する柱穴（ＳＰ５）からは須恵器坏蓋が出土しており、６世紀前葉頃のものと見られる。また、ＳＢ11と主軸を同じくするＳＢ９も同時期のものと考えられ、２間×１間～で平面規模は4.7×2.3～m、堀方長軸0.7m、短軸0.6m、柱痕跡は直径0.2m、柱の深さは0.35～0.5mを測る。

次に古いと考えられるのはＳＢ13・14・17である。また、ＳＢ８も主軸N73°Ｅでこれらに後続する建物と思われる。この４つの建物に共通することは主軸がN72°～73°ＥでＳＢ13以外、南北方向に長い建物であることである。21棟の建物のうち殆どが東西に長い建物と考えられることが大きな特徴である。

また、ＳＢ８・14は総柱建物であることから倉庫としての機能があったと思われる。ＳＢ８は３間×５間の南北方向に長い総柱建物で西面と南面に庇が付く。建物規模は5.1～8.15mで柱間寸法は桁行1.63m、梁行1.72m（一部中央部の梁行は２間で2.55mの柱間）を測る。掘方形状は長方形を呈し、およそ長軸0.8m、短軸0.7m、柱穴の深さは0.14～0.5mを測る。底面の標高はほぼ同じで柱痕跡は円形を呈し、直径0.25mを測る。庇部分の柱穴は西面の全長が6.5m、柱間は2.17m、南面の全長は4.2mで柱間は1.4mを測り、柱穴の大きさが0.3～0.5m前後と主屋部分の柱より一回り小さい。埋土は柱痕跡が褐色土及び暗褐色土で掘方埋土は橙色シルトに褐色土を含む。出土遺物は土師器片が出土したものの古代であるとしか判別できないが、重複関係からＳＡ３より新しいことが窺え、７世紀中葉頃の建物跡と推定される。

ＳＢ13は１間×３間で規模は？×６ｍで掘方は長軸0.65ｍ、短軸0.5ｍ程で柱痕跡は直径0.2ｍ、柱の深さは0.4～0.5ｍを測る。

ＳＰ１～３から須恵器坏蓋や身、土師器が出土し６世紀末～７世紀前葉頃のものとみられる。

ＳＢ14も南北に長い総柱建物と思われ、２間×１間～で、規模は3.8ｍ～×1.5ｍ～を測る。

ＳＢ17も南北に長く２間×３間～で規模は３×5.3ｍ～で主軸方向はＮ17°Ｗ（Ｎ73°Ｅ）である。

また、ＳＢ１・12とＳＡ５が奇しくも主軸が同じでＮ62°Ｅを示す。

さらにＳＢ１とＳＡ５は15ｍ程の距離で、倉庫と竪穴住居の同時性を窺わせる。

ＳＢ１は２間～×４間の東西方向に長い総柱建物で規模は3.6～×5.6ｍ、柱間は桁行1.4ｍ、梁行1.8ｍを測る。掘方は桁行方向が0.9～１ｍ、梁行方向が0.8～0.9ｍを測る。柱穴の深さは中央の桁行に並ぶ柱は0.18～0.22ｍに対して、側の桁行の深さは0.34～0.46ｍを測る。柱痕跡は直径0.23～0.3ｍを測り、埋土は柱痕跡が黒褐色土に明黄褐色シルトを含み、掘方埋土はにぶい黄褐色土に黄褐色シルトや灰白色粘土ブロック、灰黄褐色土を含む。出土遺物はない。

ＳＢ12は２間×２間～で規模は3.7×3.7ｍ～、掘方は正方形を呈し共に0.7ｍ程で柱痕跡は直径0.3ｍ、柱穴の深さ0.4～0.55ｍを測る。

ＳＰ４からは須恵器甕、土師器が出土している。ＳＡ１～３とＳＢ18・19も軸方向が同じで、共に２間×１間～でＳＢ18を構成するＳＰ121・123・124から土師器が出土している。

他に古代～古代末の建物と思われるグループは主軸方向がＮ67°Ｅを示すＳＢ４・15・16で、ＳＢ15を構成するＳＰ144から土師器が出土している。

ＳＢ２・10（総柱建物）・21は主軸が真北方向を示すグループで遺物の出土はない。

ＳＢ３・20は主軸がＮ85°Ｗを示し、ＳＢ３を構成するＳＰ54から土師器が出土している。ほかに柱列（ＳＣ）１や掘方が１ｍ前後と大きく、主軸がＮ30°Ｗを示すＳＢ６・７が見受けられる。

中世に属するものとしては柱の形状が円形を呈し、概ね直径0.3ｍ前後の柱穴で構成されるＳＢ05やＳＣ２が挙げられる。

**出土遺物**

１～６はすべて須恵器である。１はＳＫ１出土の坏身で器高2.9～3.6ｍ、口径9.4㎝、最大径11.5㎝を測る。

２も坏身でＳＡ２内のＳＰ81から出土し、器高（復元）3.5㎝、口径11.9㎝、最大径14㎝を測る。

３はＳＰ96出土の坏身で器高3.7㎝、口径（復元）12.7㎝を測る。

４はＳＰ35出土のハソウ口縁である。残存高3.8㎝～、口径（復元）16㎝を測る。

５はＳＡ２アゼから出土した高坏の脚部で２段２対の透かしを施すものであるが、上段は内面まで貫通していない。残存高は8.9～㎝を測る。

６はＳＢ13を構成するＳＰ３出土の坏身で底部外面は回転ヘラケズリを施し、「×」のヘラ描きがされる。器高は3.6㎝、口径13.8㎝、最大径16.7㎝を測る。

７はＳＰ６出土の泥岩製の砥石で、８はＳＡ４出土の石鏃である。１・２・４・５は概ね７世紀前葉～中葉頃、６は６世紀後葉～６世紀末頃、３は７世紀後半以降と思われる。

**まとめ**

ＳＢ11を構成するＳＰ５、及びＳＢ13を構成するＳＰ２・３から明らかに６世紀代の須恵器が出土しており、古墳時代後期に属する。これまでの調査ではこの時期の集落構成を示すものは数棟の竪穴住居とされていたが、堀立柱建物も新たにその構成に加わる可能性がある。

しかし、現段階では調査の類例を待って慎重に判断をする必要があろう。また、調査区が狭いことによる掘立柱建物の平面形や建物に伴う、時期の判る遺物の出土が少ないことからも復元された掘立柱建物群は今後も検討を重ねていきたい。

なお、センター調査区及び府教委で検出された竪穴住居とＳＡ１～３の時期に関しては７世紀前葉～中葉で一致している。さらに、時期は不明であるがＳＡ５とＳＢ１(総柱建物)、ＳＡ３とＳＢ８（大型庇付建物）といった竪穴住居と掘立柱建物の関係にも留意したい。

私見ではあるが、６世紀代から竪穴住居以外にも掘立柱建物が存在し、７世紀段階では、むしろ掘立柱建物（住居や倉庫）が主流であって、竪穴住居は何らかの理由で７世紀中葉まで残ったものと考えたい。500ｍ程北に位置する総持寺北遺跡でも９世紀後半～10世紀前半と考えられている建物群が約70棟ほど検出されるなど、総持寺遺跡から北へ集落が移動されていったことが指摘されている。遺跡の規模・存続期間・建物等の多さや遺跡総面積に対する既往調査面積の割合等、これまでの調査結果を考え合わせると、古墳時代から古代にかけて、この地域一帯ではかなり有力な勢力を誇った集団が存在していたことが容易に想像できる。その集団の有力候補は現在のところ地名や文献に名のある中臣系の太田連が考えられるが、今後の調査および成果に期待したい。

参考文献

1995 『総持寺遺跡発掘調査概要』　大阪府教育委員会
1997 『　〃　・Ⅱ』　〃
1998 『総持寺遺跡』「センター調査報告書　第30集」　現(財)大阪府文化財センター
2004 『　〃　』「　〃　第117集」　〃

調査区全景 北地区（南から）

調査区全景 北地区（北から）